IS世界に現われたらしい冥王

戯言

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ世界に現われたらしい冥王

【Ｎコード】
Ｎ３３００Ｕ

【作者名】
戯言

【あらすじ】
ＩＳ世界にゼオライマーを介入させてみたら、を思いついて二次創作を書いてみました。

暇つぶしにでも見てみてください。
※この作品に登場する施設、軍、国家、兵器は実在するものとは違います。フィクションです。

プロローグ（前書き）

プロローグです

プロローグ

プロローグ

ある日、ある研究所にて実験が行われていた

「ふ、ふふふ……クハハハハハッ！！　遂に、遂に完成したぞ！」

「おめでとうございます、主任！！」

その研究所にのある区画で高笑いをする痩せ細った男に、その男に取り巻くようにしてともに笑う男二人。彼らは顔を歪めて笑いながら強化ガラス張りの向こうにある区画を眺めた。そこには一人の少年が顔を伏せたまま突っ立っている。しかし彼の姿は異様だった。白い、純白の鎧に包まれているのだから。

「まさか、手に入れたＩＳコアが男に反応するとは思わなかったが、予想以上に適性値が高くてよかったな」

「えぇ、私たちが立てた理想値を軽く超えるほどですから」

その研究所はとてもではないが合法的な所ではなかった。どの国にも属さず、独自の研究をあらゆる手段を使い行うマッドサイエンティストが集う研究所だ。まともな研究所であるはずが無い。

「しかし、まさか本当に完成するとはな」

「えぇ、ですがこの成果を各国に公表すれば私たちの地位は鰻登りでしょう」

「どこの国も、私たちに逆らう事が出来ないな。これも主任の力があってこそですね！」

取り巻きの二人の言葉にさらに調子が良くなる痩せ細った男。彼はさらに愉悦の表情を浮かべて、口元を歪ませる。

「クックック……、それはそうだろう！　何故なら、私たちは無限のエネルギーを持つＩＳを造り上げたのだからな！！」

彼らの高笑いが一層強くなる。その彼らの高笑いに呼応するように、白い、ＩＳと呼ばれていた兵器の胸元に取り付けられた黄色に輝くコアらしきものが光りだす。

「……っ！！！　主任！！」

「なんだ、どうした！！」

それに気付いた研究員が計器を覗きながら荒々しい声を上げる。その声色の中に含まれた焦りを感じたのか、主任と呼ばれていた男は何事か、と研究員の元に詰め寄る。

「ゼオライマーの、次元連結システムがひとりでに起動しています！！」

「なんだと！？　直ぐに制御プログラムを打ち込め！！」

「プログラム、受け付けません！！」

「な、なにぃ！！」

高笑いによって明るかった研究所の空気は一転、慌ただしい空気になる。研究員達の焦りを嘲り笑うようにさらに、コアが光輝いていく。

「ゼオライマーのエネルギー容量が、臨界点を越えました！！　千、二千……、さらに増え続けていきます！！」

「くそっ！！　緊急停止信号を送信しろ！！」

「緊急停止信号、受け付けません！！」

さらに研究員たちの焦りが高まる。なかには神に祈る人間も現われたくらいだ。それほど、このゼオライマーと呼ばれるＩＳの次元連結システムは恐ろしいものなのか。主任は引き釣った笑みを浮かべて、ガラスの向こうにいる少年を見つめた。

「……ニィィ……」

主任の目線の先にいる少年は先程まで気絶していたように眠っていたはずなのだが、いつの間に起きていたのか、狂気に塗れた表情を浮かべて佇んでいた。

「……ば、化け物が……！」

主任が魔物を見るような、侮蔑と恐れを含んだ表情で彼を見る。その少年はゼオライマーの胸元に取り付けられているコアを小さくしたものが取り付けられた装甲に包まれた両腕を胸元まで持ち上げて

くる。少年の顔は主任たちを見下すような冷たい印象を感じさせる笑みがうかんでいた。

そして、

「消えろ……」

少年は笑みを浮かべたまま、両腕のコアを打ち付けた。瞬間、膨大なエネルギーの奔流が溢れだし、研究所は光に包まれた。

「ククッ、クハハハハハッ！！　ざまぁないなあ！！　屑共が！！」

研究所から溢れだしたエネルギーは研究所の周り二十?を焦土に変えて収束した。膨大なエネルギーが消え去ったあとに、気圧差により吹き荒れる強風のなか、悪魔のような純白の鎧、ゼオライマーに身を包んだ少年は焦土の中心地で声高らかに笑う。

「……しかし、疲れたな。少し、寝るか」

そして、少年は糸の切れた人形のようにパタリと地面に落ちて、眠りについた。

――――――――

「こちらデルタ1。異常なし」

『こちらデルタ2、異常なし』

『こちらデルタ3、異常な……、いや！！　生存者を発見した！！』

「何！　今すぐそちらに向かう。デルタ3は現状待機だ」

『りょ、了解！！』

数分後、異常なエネルギー波を観測したアメリカ特殊ＩＳ部隊はエネルギー波を観測した地点に調査に来ていた。彼女等はＩＳを駆り、焦土と化した荒野を駆け巡り調査していく。そして、荒野の中心地と思われる地点で、俯せに倒れる少年を見つける。

「十歳前後と思われる少年を発見。確保します」

『慎重に扱えよ』

「了解」

彼女等は愛機であるラファールを器用に操り、少年を抱き抱える。

「生存者と思われる少年を確保しました。これより帰投します」

『確認した。これより帰投せよ』

「イエスサー」

彼女等は少年を抱き抱えて空に飛び上がった。彼を抱えて飛び上がった彼女の名前はナタル。

この出会いが、この世界を変えていく事になるのは、今の時点で知るものは誰もいない。

ナターシャ・ファイルス（前書き）

今、このストーリーについて考えてみたんですけど……

主人公が原作みたいな外道だとＢＡＤＥＮＤしか見えねぇ！！

正直あの外道さだとヒロイン、一夏もろとも吹き飛ばしてしまいそうだ！！

外道さを少し弱めようかな……

ナターシャ・ファイルス

「……」

ピッピッ、と不定期な音が聞こえる。清潔感のある部屋だ。そこには一人の少年が眠っていた。備え付けられたベッドで安らかに眠っている。彼の腕からはチューブが伸びていて様々な計器に繋がれている。

「彼の様子は？」

「安定していますね。ただ眠っているだけのようです。直ぐに起きるでしょう」

その様子をマジックミラーの向こうから眺めているのは、アメリカ特殊ＩＳ部隊所属のナターシャ・ファイルスだ。彼女は傍らで空間ディスプレイ型のキーボードを操作している女性に話し掛ける。女性はにこやかな笑みと共にキーボードを消して、部屋を退出していった。因みにこの場所はアメリカ軍の医務室だ、

「……」

ナターシャは医師の出ていったスライドドアを見つめたあと、ガラスの向こうで眠る少年を見つめる。少年はアメリカでもよく見かける茶褐色の髪の毛に、アジア系の端正な顔立ち、アジア系としては珍しい白磁の様な肌色を持っている。ナターシャはまだ幼い少年を見ながら思いを馳せる。

……なぜ、彼はあんな場所で眠っていたのだろう。

彼、ナターシャの視線の先で眠る少年はナターシャが発見した。彼は絨毯爆撃を行った爆心地の様な所で眠っていた。半径二十？にも及ぶクレーターの真ん中で眠りこけていた彼を見つけたときは流石に軍役に属している彼女でも驚いたであろう。
…あの場所には何もなかったはず。じゃあ、やはり彼が……。

プシュー……

さらに思考を深くしていく彼女はスライドドアが開く音に反応してそちらを見る。その場所には一人の女性が立っていた。

＊

「よう、ナタル」

「あら、イーリじゃない」

スライドドアから医務室に入ってきた女性は獰猛な笑みを浮かべていた。
イーリス・コーリング。ナターシャ・ファイルスと同じアメリカ軍のＩＳ操縦者の座にいる。ナターシャ・ファイルスはただの兵士であるが、イーリスはアメリカの代表選手である。

そのイーリスはナターシャをナタルと呼び親しんでいる。ナターシャもイーリスをイーリと呼んでいるのを見ると、二人は親友関係と思われる。イーリスはナターシャに右手を上げて挨拶をしながら彼女の横に立つ。

「どうしたの、こんな所に」

「いや、訓練が予想以上に早く終わったからな。開発部の伝言を預かったついでにここに来たんだ」

「あら、もう結果が出たのね」

ナターシャの言葉にイーリスが首肯する。イーリスは訓練後の為か扇状的なＩＳスーツを着ているが、手には、彼女には似付かわしくないものが握られていた。

「あぁ、このガキが握っていたこのペンダント。やはりＩＳだった」

「……そう」

彼女が言葉とともに掲げたのは白色の天の字を型どったペンダント。それは少年が握っていたものらしい。彼女はそれを傍らにある机の上に置いて、話しだす。

「こいつは日本の漢字で、天。こっちの言葉ならヘブン、だそうだ」

「……日本語？」

「あぁ」

彼女が机の上に置いたペンダントは確かに天という字を形作っている。キラリ、と輝くペンダントは確かにヘブンという意味を持っていても不思議ではない。

ナターシャは怪訝そうな顔で訪ねる。

「マスター……、同乗者は？」

「あそこのガキ、秋津マサトだそうだ」

イーリスはナターシャの問いに、マジックミラーの先にいる少年を指差しながらいう。その言葉にナターシャは目を見開いた。

「男が……、ＩＳを扱える……？」

「みてぇだな」

ナターシャの確認にイーリスは有り得ないものを見たように少年、秋津マサトを見ながら、呆れたように言う。

「……嘘、でしょ？」

「こんな所で嘘つくかよ。あたしは本当の事しか言わないぜ？」

イーリスの言葉にナターシャは声を上澄み、驚愕を顕にする。

ＩＳ。稀代の天災と呼ばれた篠ノ之束によって造られたマルチパワードスーツ。その戦闘能力は常軌を逸し、現行の兵器では勝てないという。そんなＩＳには欠陥があり、女にしか動かすことが出来ない。よって世界の支配体制が逆転したりなど世界は混乱をした。

しかし、彼女の目の前には世界で初めてＩＳを動かした男、秋津マサトがいる。彼女等が混乱するのも頷けるだろう。しかしイーリスはさらに、

「ＩＳコアを調べた時に解ったことだが、このＩＳ『ゼオライマー』には三つＩＳコアが使われていて、そのどれもがあのガキに反応しているらしい」

「なんですって！？」

先程よりも大音量の悲鳴がナターシャの口から飛び出した。

「ＩＳコアが三つも使われたＩＳ……？　しかもそれが全て男に反応しているなんて……。」

ナターシャの驚愕は最もだ。ＩＳコアというのは篠ノ之束しか造り出すことが出来ず、さらに絶対量が４９７と決まっているのだ。その中の三つものコアが男に反応して、さらに一つのＩＳに納まっているなんて。奇跡なんてレベルじゃない。天文学的数字の確率だ、そんなもの。

「……他に解ったことは？」

ナターシャはさらにイーリスに質問をする。イーリスはナターシャの言わんことが解ったのか、資料を机の上に置いた。

「ＩＳ『ゼオライマー』の戦闘データを見るかぎり、あのエネルギー反応を起こしたのは、ゼオライマーらしいな。それが初陣であるらしい。他はブラックボックス化されてやがって、分からなかったが、次元連結システムとやらがあるらしーな」

「嘘でしょ？　二十？を焦土に変えるエネルギーをＩＳが？　核兵器じゃあるまいし……」

「残念ながら、事実らしい」

「そう……」

イーリスと共に資料を見つめながら話す。彼女等が持っている資料にはＩＳ名であるゼオライマーと、次元連結システムという言葉しか書かれていなかったが、彼女等にショックを与えるには充分過ぎるものだった。
ナターシャは、

「政府の会見は？」

「あのガキの国籍を調べたところ、アメリカ国籍の孤児だったらしいからな。公式に保護を検討しているらしい。ま、初めての事例だから困惑して、難航しているらしいが」

「そう」

「最も、政府としてはあのガキの事を広告塔として使いたいらしいがな」

「え？」

イーリスの口から保護という言葉が出たのにホッとしていたナターシャは再度イーリスの口から出た広告塔という言葉に困惑を顕にする。イーリスはナターシャの様子を見て、

「あたしらアメリカ合衆国はＩＳが世の中を席巻するまでは軍事大国だった。だが、そのせいでＩＳというものへの法整備、体制整備が遅れたため、ＩＳ開発は各国に後れを取っている。ロシアはおろ

か、日本、中国、ドイツ、イギリス、とな。イスラエルの協力がなけりゃ第三世代のＩＳすらまともに造れやしねぇ」

「つまり、仮定の段階だけど二十？もの土地を焦土に化す事が出来るＩＳとアメリカ国籍の秋津マサトを広告塔に立てて、アメリカの暗黙の実権を取り戻そう、ということね？」

「あぁ」

途中からイーリスの言わんとしていることを理解したナターシャは彼女の後を継いだ。イーリスはナターシャに首肯しながらさらに、

「だから、この件に関して大統領自身があのガキに会いにくるらしい。もっとも、ガキへの交渉はガキが状況を理解できた頃にするらしいが」

「そう、なの」

イーリスの言葉に複雑そうな顔をするナターシャ。軍人としてアメリカに忠誠を誓う立場からなら政府の行動に賛同できる。だが、一人の人間としてはあまり良い思いではない。小さな子どもを広告塔に仕立てあげるなんて、良心が許さない。

「……」

「……はぁ、やれやれ」

深く考えこむナターシャを邪魔しないように肩を竦めて計器があるところまで下がるイーリス。ナターシャの事を人一倍理解している親友のイーリスにとっては彼女の考えている事も理解できるのだろ

う。

「……さて、と。あのガキの様子は、っと……。……ん？」

イーリスは暇を持て余しているのか計器を眺めている。その中でイーリスは一つ、不思議な反応をしている計器を目ざとく発見した。

『……ぐっ……！』

と、同時にガラスの向こうから聞こえるくぐ持った声。イーリスはびっくりしたように起き上がろうとしている秋津マサトを見て、直ぐ様ナターシャに近づいた。

「お、おい…！　あのガキが起きたみたいだぞ！！」

冥王の目覚め（前書き）

この小説に限って一話分を短くしていこうかと、思います

長すぎると飽きるから

冥王の目覚め

「……ぐっ……！」

清潔感溢れる医務室のベッドに寝かされていた少年のくぐ持ったような声が聞こえた

「……ここは……」

少年は辛そうに眉根をひそめていたが、閉じられた瞼の奥から覗く淡い光に顔を顰めながらも目を見開いた

「……知らない天井……」

少年が最初に見たのは天井にある蛍光ライト。病院らしい所の所為か無駄に明るい。天井には染み一つなく、清潔感が溢れている。少年は仰向けに寝そべっている自らの身体を起こそうと、右手を着いて擡げようとした。だが、

「……力が入らん……」

彼の右手は彼が思っている以上に力が入らず、カクン、と肘が折れてしまった。体勢を崩した彼は自分が寝ていたベッドにしたたかに打ち付けられた

「……俺は……どうして……」

少年はベッドに惨めに倒れこんだ自分を恨み、そしてなぜこのような場所にいるのか思考を張り巡らせる。
———あの時、俺は確かにメイオウ攻撃で研究所を吹き飛ばしたはず……。もし吹き飛ばせなかったのなら、あれは俺の淡い幻想で、今現在も囚われていることになる。ならば憂いを無くすために、ゼオライマーで……。

彼は一瞬でここまで思考し、直ぐにゼオライマーの待機状態である天の文字を型どったペンダントを探す。だが、

「無い、無い、無いだと！！」

ベッドの中や周りを動き回る彼の指は遂にゼオライマーを触れることはなかった。だが、それでも諦めず、少年は捜し出す。

「アレが無ければ……、俺は！！　「キミが捜しているのはこれかな？」　誰だっ！！」

焦燥感に駆られていた彼の思考や危機管理能力は極限まで落ちていた。だから彼は背後に人が近づくのを最後まで察知する事が出来なかった。彼は背後に近づかれ過ぎたのを警戒して、防御体勢を一瞬で取りながら背後に向き直して、敵と思しき人間に対峙する。

「……へぇ、なかなか訓練されてやがるな。ちょーーっと興味出たかも……」

「もう！　いっつもイーリは戦闘思考ばっかり。もう少し他のことも考えましょうよ」

「な……」

しかし、彼は敵と思しき人間に対峙した瞬間に脱力する。彼の目に飛び込んできたのは、女だった。自分がいた研究所では一度も見たことが無い種族、女。彼は初めて見る女という種族に興味津々ながらも彼女等から何か情報を得られないか、目にも止まらぬ速さで目を動かし、自分の網膜に情報を焼き付けていく。彼はそこで決定的な物を目にする。

———アメリカ空軍の腕章……。それに中尉を示す官章にゼオライマーのペンダント……。そういう事か……。

彼は聡かった。一瞬で自分が置かれている状況を仮定していく。女等が身分を偽ってなければアメリカ空軍の人間であると分かったのだ。少なくとも、この場所は研究所ではない。ならば自分のメイオウ攻撃もあの研究所を吹き飛ばした昂揚感も幻想ではない。彼は研究所以外の場所に出られるのならどうでもよかった。人間として外に出て生きていくのならば、自由というものに制限がつくことも、ルールが定められていることも十歳ながらに知っている。事なかれ主義の人間になるつもりは無いが、社会に適合するのはメリットが多いと。自分の性格が少なくとも良いとは言えないことも、自分が社会的不適合者であるのも知っている。だが、あの研究所に囚われの身でいるのは我慢がならなかった。だから彼は歓喜する。外に出られたのだと。

そこで彼は、自分を焦土で発見したのだろう女を見る。男とは違う、包容力のある丸く柔らかい身体を見つめ、最後に顔を見る。女とはこんなものなのか、と知識を増やすように観察していく。既に彼の中には警戒心というのは最低限にしか無いのだろう。自分はアメリカ国籍を持っている。少なくともアメリカは無害な自国民に危害を加えない。それにＩＳについての基本知識もあるから、自分がどれだけ稀有な存在かも理解している。アメリカと利害関係を結べば、

自分の地位が確固たるものに成る事は基本としてあった。それにいざとなれば次元連結システムのちょっとした応用で逃げることも可能。アメリカに次元連結システムを教えても良いかもしれない。この辺りは交渉次第だが。

彼はどこまでも利己的で、独善的で、現実主義者なのかもしれない。

悪魔たる主人公（前書き）

正直、まだまだ外道成分が薄いですが、今はまだ序章ですので
彼の外道は戦闘において発揮されると思うので、それまで楽しみに
していただけるとありがたいです

悪魔たる主人公

「おい、貴様」

「……えっ？」

こんにちは、私の名前はナターシャ・ファイルス。アメリカ空軍の特殊ＩＳ部隊の一応副隊長をさせて貰っているわ。今日は私がこの物語を進めさせてもらいます。
さて、私は早速だけどとても混乱している。何に困惑しているのか、それは私とイーリの前にいる少年、秋津マサトについてだった。

「貴様、と俺様が聞いているんだ。返事をしたらどうだ」

「……」

秋津マサトは傲慢に不遜に私に獰猛な眼差しを向けていう。私はさっきまで眠っていた彼と、今の彼に軽い、いや切実にショックを受けている。只者じゃない。この子を十歳だと見てはいけない、そう本能が訴えてきている。

「……貴様、無視とはいい度胸だ。塵一つ残さず消滅させてやろうか」

「えっ！？　あぁ、ごめんね。ちょっと放心していたの」

「ふん、アメリカ空軍の中尉なら少しはましな反応をしたらどうだ。貴様程度が中尉とは、片腹が痛いな」

「……」

また放心。この子は本当に十歳なのだろうか。この子は十歳では持ち合わせないような知識と観察眼を持っている。私やイーリをアメリカ空軍と見抜いたのや中尉だと見抜いた程度なら、まぁミリタリー好きだと判断できる。しかし彼は、私たちが背後から声を掛けたとき、後ろからの襲撃者に対して最も効率のいい防御体勢を振り向きざまにとった。その際に、武器と使えるようなものや、私たちの身分を確認するように一瞬で周りを見渡して状況把握を一瞬の内で終わらせている。弱冠十歳が出来るもの？　いえ、出来るはずが無いわ。

「ふん、まぁいい」

私が訝しげに秋津マサトを見ると、彼はベッドの掛け布団からするりと抜け出して布団の上に胡坐をかいて座り、私たちの方を見た。

「それで？　貴様らが俺を保護したのはアメリカの地位のためか？　ただの良心か？　それとも、俺を広告塔に仕立てあげるためか？」

「……っ！！！」

戦慄した。彼の探るような、それでいて確信を持っているかのような瞳を見ればわかる。彼は私たちアメリカの目的を、そして自分の立場を理解している。プレジデントは彼をただの十歳だと侮っていたがために、彼が落ち着いた頃にうまく誘導して広告塔に仕立てあげるつもりだった。しかし、早くもその目論みは潰えた。いや、まだ潰えた訳じゃないが、こちら側の切り札が一枚消えた。私たちが秋津マサトを広告塔に仕立てあげようとした事実を隠していれば、まだマシに終わるだろうから。

「……なんのことかしら」

「ふん、あくまで白を切るつもりか。まぁ、いい。それよりも貴様、名前はなんだ」

「……ナターシャ・ファイルスよ」

まるで凄腕の政治家を相手にしているようだ。やっぱりとてもじゃないが十歳には見えない。彼はこちらの思惑を知った上で、交渉をしようとしている。

――――末恐ろしい。

私は彼が既に子どもには見えていなかった。

「ナターシャ・ファイルス……。そうか、ナターシャ・ファイルスか」

そんな彼は私の言葉を咀嚼し嚥下するように二回呟いた後、今度はイーリをその獰猛な眼差しで刺すように見つめた。

「貴様は？」

「あたしか？　あたしはイーリス・コーリングだ」

「イーリス・コーリングだな。……ふむ」

イーリスの名前を私の時と同じように自分の糧にするように深く呟いていく。

「……なるほど、な」

秋津マサトは一言呟いた後、私たちを見る。やはり警戒の色は見えない。その代わり友好の色も見えず、常に打算的な目付きをしている。彼は予想外に冷静で聡明だった。こちらを信頼しているわけじゃない。いつでも逃げられる体勢を崩さず、そしていつも自分が有利になるように動いている。……相当難儀な拾い物をしてしまったかも。

私が数時間前の自分に呆れていると、秋津マサトは、

「それで？　俺様に聞きたいことがあってきたんじゃないのか？　ならば早くしろ」

「えっ？　あ、あぁ……」

秋津マサトに言われて思い出した。私たちはプレジデントから依頼を受けていたのだ。

「それじゃあ、あなた、秋津マサトくんは孤児よね？」

「そうだが？　それがどうした」

「今、あなたは自分の状況を理解している？」

「馬鹿か、貴様は。理解しているに決まっているだろうが」

「そう」

プレジデントからの依頼は彼に今の容態や状況整理の理解を促すこと。此方としては彼を広告塔に立てる用意が出来ている。私たち側としてみると、早くこの事実を全世界に発信して、ＩＳ世界におい

ての遅れをとっていた地位を取り戻したい。彼はそれを知っているから素早く出来るだろう。だから

「なら、今すぐホワイトハウスに向かうわよ」

「はぁ？」

彼の手を取り、医務室を出ようとする。ケーブルが彼の腕に刺さっているが、素人でも簡単に抜くことも出来るし、所詮は点滴。抜いたところで然したる問題はない。なに？　急ぎすぎている？　別に馬鹿だと言われて怒っているわけじゃないわよ？　ホントよ？

＊

「それで君は彼をこの場所に連れてきたと」

「……すいません」

数時間後、私ことナターシャ・ファイルスはホワイトハウスの一室で大統領補佐官の前で頭を下げながら謝っていた。

「この阿呆が。アポも無しにただの一介のＩＳ操縦者が大統領に会えるか」

「……うぅ、返す言葉もありません」

今思えば、私は大分馬鹿だった。大統領にアポ無しで会えるほど私

に権利はない。というかアポも無しにホワイトハウスに突っ込んでいったのだ。普通はテロリストとして殺される。考え無しだったかも……。

「考え無しどころか能無しだ、このガラクタが」

「……うぅ」

でも、今回の事で一つだけ良く分かったものがある。彼、秋津マサトは毒舌であり、ドSだということだ。……あまり知りたくなかったかも……。

「まぁまぁ、秋津マサトくん。君もあまり彼女を責めてやらないでくれ。これでも一応代表候補生なんだ」

「くくっ……！！　このガラクタが代表候補生だと……？　笑わせてくれるな、国防総長？」

「……冗談ではないのだがね」

そして、そんな彼は私の実質上上司である国防総長と大統領補佐官と共に会話をしている。……その会話の節々で私を馬鹿にしてくるのはどうにかならないのだろうか……。

「それにしても国防総長はなぜホワイトハウスに？　遊びにでもきていたのか？」

「…遊びじゃなく、今日は大統領と共に会談があったのだよ」

「……ほう、差し詰め俺に関しての事だと推測するが？」

「……」

秋津マサトは国防総長にまでその毒舌を持ってして攻撃をしていた。……しかしやはり凄い少年だと思う。十歳で各国の代表と渡り歩いてきた国防総長を相手に相対できるなんて。

「その反応は図星ととらせてもらうが？」

「……今さら君にたいして隠し事は無駄なようだな。その通り、今日の大統領との会談は非公式によるもので、君に対する対策を立てていたのだよ」

「ほぅ、俺が発見されてから今の時間まで凡そ五時間。搬送されてから俺様のＩＳの解析を差っ引けば、会談的にはそれほど進んではいないな？　差し詰め、三日を猶予にして会談を行えば十分な対策を執れると思うが」

「……凄い」

そして、彼は国防総長に対して自分の力を誇示した。暗算と推測、自身の知識に証明によって大体の時間を推理していく。彼のニヤニヤとした顔を見るかぎり、これにも打算があるに違いない。おそらくだが、自分の力を誇示することで、アメリカ政府にたいして圧力をかけるつもりなのだろう。正直この程度ならさして問題はない。そんなにアメリカは柔じゃない。

「くっ！　この程度の逆算なぞ、俺様にとっては簡単なものだ。俺をその辺にいる群れるだけの衆愚と一緒にしないでもらおうか」

今もう一つ彼について分かったことがある。彼は自己顕示欲と自尊心が高いことだ。正直に言うと人間的には好きになれない。だが、今のアメリカを変えるためには必要な悪かもしれない。私は彼を見てそう思わざるを得なかった。そう思ったのは私だけじゃなく、アメリカ政府高官である彼ら二人もらしい。猫の手も借りたい、と言うことか。

「さて、私たちアメリカとしては君を保護して「アメリカの力を示すための広告塔にしたい、だろう？」――その通り。私たちアメリカは君も知っているだろうが、世界の警察を名乗っていた頃から、ＩＳの出現によって弱体化している」

「くくっ……、だろうな。アメリカは第二世代のＩＳ迄しか造れていないのに対して、イギリスはＢＴ兵器、ドイツはＡＩＣの開発を始めている。未だにレーザー兵器も、イメージ・インターフェースすらも開発が始まっていないアメリカは確かに後進的といえるな」

「君の言う通りだ。我が国は世界経済の要とも言えるＩＳ開発が遅れている」

「そこで俺様という可能性が現れた、と言うことだな」

「そうだ」

アメリカ大統領補佐官は戸惑うこともなく頷いた。彼が大統領補佐官という地位についているのは、その潔さと求心力にある。利益を追求し、国民を幅広く見る目はアメリカを何度も救ってきた。

「核兵器をも越える破壊力、男がＩＳを使ったという話題性、そして未知なる次元連結システムという技術。どれをとっても私たちア

メリカの地位を急進させるにはもってこいだ」

「つまりは俺をアメリカの広告塔と技術革新のために使いたい、そういう事だな？」

「そうだ」

だが、今度ばかりはうまくいくとは思えない。秋津マサトは利己的で傲慢で不遜で、現実主義者だ。彼に利益が無いのならこの話に乗るはずが無い。だが、彼は肩を奮わせながら、

「くっくく……、はーっはっはっは！！！！！　この冥王を使うだと？　笑わせるな！！　たとえ自由の国であろうと、天を縛ることは出来ん！！！！」

「「「……っ！！！！！」」」

十歳の少年が発しているとは思えない圧倒的な覇気を高笑いと共に溢れださせる。それに私たちは恐縮するしかなかった。本当に十歳なのか、疑わしい。彼は高笑いを止めて大統領補佐官を見る。なんだろうか？

「だが、お前は面白い。この冥王たる俺様を堂々と使うといった。余興として、貴様らに使われるのも、吝かではない」

……まさか秋津マサトがアメリカの力になることを許可するとは。大統領補佐官も国防総長もびっくりしている。

「……君には利益が無いはずだが……」

「ふん、利益なぞ後からついてくる。力が有るというのに怠惰を貪るなぞ愚の骨頂。俺は言ったはずだ、そこらの衆愚と同じと思うな、と。ならば俺様、冥王と『天の』ゼオライマーの力を貸してやろう」

「「「……」」」

わたしは正直彼が冥王には見えなかった。彼が悪魔に見えてならないのだ。私たちは、悪い悪魔と契約をしてしまったのではないか。でも、今さら逃れることができない。私たちは、アメリカは引けない所まで来てしまった。
まだ五時間だ、あの焦土から彼を保護して。これが、彼の悪魔たる力。

「ん？　どうした貴様ら。この俺様が力を貸してやろうというのだ。喜ばぬか」

喜べるはずがないだろ、悪魔。

冥王様の本領発揮の巻（前書き）

ナターシャとかイーリスがいるとマサト（マサキ）の毒舌が中和されてギャグになってしまう不思議。

八卦衆相手なら相当面白いんだけどな～

てか、マジで美久をいつだそう……。いっそゼオライマーの人工知能か真相心理の意思で出そうかな……

冥王様の本領発揮の巻

「……ちぃ！！　どうした、ゼオライマー！！　くそっ……、反応が鈍い！」

「おいおい、冥王がその程度かよ。笑わせてくれるな」

「黙れっ！！！」

こんにちは、ナターシャ・ファイルスです。今回も前回同様、私が物語進行をさせていただきます。

さて、今私の眼前では私の親友であり国家ＩＳ代表選手のイーリス・コーリングと冥王こと秋津マサトがアリーナでＩＳ戦をしているわ。三日前、秋津マサトがアメリカに利害関係を結んでアメリカの地位は急激に上がった。十歳ながらも男のＩＳ操者というのは話題性が高かったのか、世界がアメリカと秋津マサトに注目をした。秋津マサトは卓越したＩＳ操縦センスがあり、今現在行っているＩＳ戦でもイーリに対して善戦を繰り広げている。

さて、ここで今までの三日間の空白を語るとしましょうか。まずあの日、秋津マサトは大統領と大統領補佐官、国防総長と共に秘密会談を行い、正式にアメリカのＩＳ操縦者になり広告塔になることを決めた。それに対してアメリカは彼に対して衣食住の確保、給金の付与、アメリカ政府に対しての口利きを与えた。その後、ゼオライマーと秋津マサトの戦闘能力を知るために、一部の人間に秋津マサトは次元連結システムの概要を与えた。直ぐ様アメリカは次元連結システムの開発を開始し、秋津マサトに少尉の官位を与えた。その代わり、彼のゼオライマーに対して出力五十％オフが言い渡されたけど。

そして三日たち、今に到るわけだ。マスコミやらが秋津マサトにしつこく付き纏うため、実際に全世界にＩＳ戦闘を見せよう、という目的により始められたこれはアメリカの地位を固めるのに一役買うかもしれない。

「ほらほら、こっちへおいでー」

「ふざけるな！！　貴様なぞが俺様に適うはずが無かろう！！」

「甘いぜ！！」

今、ゼオライマーの手の甲に付けられた光球が光り、イーリが乗る機体、ファング・クエイクに光線が迫る。大出力のそれは亜光速で迫ったが、イーリには擦りもしなかった。

「くっ……！　ならば、次元連結システム発動！！！」

「おっ、本命ご登場。てか？」

「そういっていられるのも今のうちだ」

秋津マサトは空中に停滞し、次元連結システムを作動していく。端目には変化は分からないが、今ごろ天のゼオライマーのエネルギーは無限に近いものに変わっているはずだ。

次元連結システム。アメリカにもたらされた新システム。アメリカ国内の、メイオウ攻撃によって焦土に変わった場所にあった研究所で開発されたもの。あらゆる異次元から無限のエネルギーを引き出してこれるシステム。今、秋津マサトには制限が付けられているか

らエネルギー量は無限に近しいだけだが、ＩＳ界においてこれほど恐ろしいものはない。ＩＳで一番悩まれているのが、ＩＳ自身の火力と燃費の悪さだ。それを二つともカバーする次元連結システムは敵に回すと恐ろしい。メイオウ攻撃の威力がそれを裏付けているから。

「うぉっ！！　次元連結システムはずりぃぞ！！」

「所詮ＩＳ程度では天には届かんということだ！！　死ね！！」

「ちょっ、おまっ！！」

秋津マサトが手の甲の光球に集まったエネルギーを収束してイーリに放つ。先程よりも太いビームがイーリを飲み込もうとする。イーリはそれを避けるが、次々とゼオライマーからビームが飛んできて、自慢の多脚を使用できていない。一方ゼオライマーはアリーナのバリアギリギリまで上に飛び上がり、目に見えるほど分厚く全方位バリアを張り、下を見下しながら攻撃していた。……外道だ。

「ちょっ、てめっ！！　降りてこい！！」

「ふん、弱い虫ほど五月蝿く飛び回る。死ね」

「おーおーおー、やってやろうじゃねーか！！」

イーリはマサトに挑発されて物凄いスピードでマサトに近づいていく。ビームの被弾も気にした様子は無く、ぐんぐんとスピードを上げていく。

――これは、イーリの負けだろう。

正直、親友の負けは認めたくないが負けるだろう。

何故なら。彼女は秋津マサトが得意とする土俵に無策にも上がっていったからだ。彼の戦い方は、次元連結システムを使い、全天方位バリアを展開したまま高火力で敵を殲滅すること。彼の戦い方に距離は無く、彼とまともにやりあうのなら、ゼオライマーとマサトが反応できないようなスピードで攪乱しながら、隙を見て一撃必殺の攻撃を放つ事だけ。どう考えてもイーリとファング・クエイクでは無理な戦い方だ。

「おらぁぁぁぁぁ！！」

「くっ……！」

しかし、私の考えが彼女に通じるわけもなく彼女はマサトに近づいていく。そして、多脚の一つで彼を突き刺そうとしたとき、

「くくっ……はーっはっはっは！！！！　近づけばなんとかなるとでも思ったか！！！！！」

「……！！！！」

彼は消えた。

……え？　ちょっと待って……、消えた？　消えたの？

嘘でしょ……

「えっ……、あれ？　ロスト？　あいつどこ行って「ここだ、ガラクタ」んな！？」

マサトが消えた事実に私とアリーナにいるイーリ、報道陣が驚愕していると空間が歪み、ゼオライマーを展開したマサトが出てくる。

マサトは不敵な笑みを崩さぬまま、イーリのＩＳを掴む。ミシミシ、とこの場所でも聞こえるぐらいの力でファング・クエイクを掴んでいる。……イーリの生命のピーンチ……。

「よくやった、と褒めてやる。だがな」

「あ……、ああ……」

今頃になってイーリが自分が絶体絶命の状況にいることに気が付いたらしい。もう凄い真っ青になっている。……絶対マサト、メイオウ攻撃するわー……

イーリが諦めたようにマサトを見ると、マサトは自虐的な表情を消さぬまま、口を開いた。

「天に触れたものは、消え去るのみ……！」

「ちょっ、おまっ！！　やめろ！！」

「くくっ！！　出力は特別に最小限にしてやる」

「全然安心できねー！！！！」

イーリの魂の叫びも虚しく、イーリはマサトによって投げ飛ばされて、地面に激突する。イーリは激突した衝撃で動けないようだ。一方、マサトはゼオライマーの光球を輝かせながら、両腕を頭の上に掲げる。そして、

「くっくく……。安心しろ、塵一つ残さず、消滅させてやる」

『天』、とゼオライマーの胸にある一際大きな光球に浮かび上がり、

彼は下ろした腕を胸の前で打ち付けた。

ギュオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！

瞬間、イーリの周りで核爆発のような爆発が巻き起こり、イーリがエネルギーの奔流に包まれていく。……ヤバイ、レベル３に設定してあるアリーナのバリアが軋んでいる。どんだけ威力あるんだよ、あのメイオウ攻撃……。

「くくくっ……、はーっはっはっはっはっは！！！！！！地にひれ伏して、死ぬがいい！！！！！」

……いや、既に地についてるし。……てか、イーリ！？ちょっと、生きてる！？　衛生兵、衛生兵ーーー！！！！！

＊

「はぁ……、ひでぇ目にあった……」

「ふん、知るか」

「あ、あはははははは……」

「笑い事じゃねーぞ、ナタル」

あれから数時間後、私たちは医務室にいた。イーリが全治二週間の打撲や打ち身をあのメイオウ攻撃で負ったので、見舞いに来たからだ。マサトは終始嫌そうだったが、私が強引に連れてきた。

「それにしても、あのメイオウ攻撃のインパクトは偉大だったみたいだな」

「確かに話題性はどの国が造っているＩＳよりも大きかったわね。……その分ＩＳの修理費がかさんだけど……」

「損壊レベルＣ、だもんなぁ」

「国防総長が頭かかえながら、胃薬飲んでいたわ」

「ふん、ガラクタが意気がるからだ」

さて、あのメイオウ攻撃。イーリに怪我を負わせたのみならず、様々な影響を各国に与えた。今現在、ＩＳ業界でトップを走り続けているのはドイツだ。第三世代ＩＳのみならず、レーザー兵器、ＡＩＣを開発し、様々なライセンスを取得している。二番目がイギリス。第三世代は勿論、ＢＴ兵器を開発しているため、こちらも世界の影響力が強い。しかし、今日の一戦でその評価が覆された。

ゼオライマー。直線のみだが高い機動性、ＩＳを一瞬で破壊する攻撃性、何物も通さない防御力、無限大に近いエネルギー……、どれもこれも世界の目を引くには十分過ぎる代物だった。特に、目を引いたのが瞬間移動だ。瞬時加速（イグニッション・ブースト）を使わずに遠くにノーモーショ

ンで表れたそれは、世界中に衝撃を与えた。と、同時に流石は世界の警察アメリカだ、と世界の信用を取り戻した瞬間でもあったわけだ。アメリカらしい巨大で強力なゼオライマーは世界に一気に認知された。

……その代わりといってはなんだが……、イーリのファング・クエイクが中破、アリーナが小破したけど……。負債金額占めて三百万ドル。利益的には儲けているといえど、なんか失った感が否めないのはどうしてだろう……。

「……全く、マサトくんは～。その口の悪さは治さないといけないわよ～」

「おい！！　やめろ！！　俺様の頬を突くなガラクタが！！！　止めろといっているだろう！！！」

少し、ほんの少ーし苛々したからマサトのホッペをつんつんして遊んでみたが、私は悪くないだろう。

――ただ、彼に殴られて少しお腹が痛くなったのは苦い思い出だ。

イーリス・コーリングの変化（前書き）

はっはっは！！　短いじぇ！！

テスト期間だからこんなもんだじぇ！！

テスト期間なのに囮物語買っちまったじぇ！！

……目もあてられねぇ

イーリス・コーリングの変化

ＩＳ。世界に突然表れ、世界中を席巻したマルチパワードスーツ。高速機動、従来の兵器を圧倒する火力、シールドバリア、絶対防御、ＰＩＣを持ったそれは、登場と同時に華々しい戦果を上げて世界をある意味崩壊に導いた。それから五年、世界中のありとあらゆる技術力は底上げされて人々の生活は豊かになった。その代償に女尊男卑が巻き起こり、世界は女性中心に回りだしたと言っても過言ではない。

さて、ここで秋津マサトについて話そう。

秋津マサトは現実主義者で能力主義者で利己的で残忍だ。それはある一種の指導者と取り上げる事ができる物である。彼ほど人間を超越した人間はいないだろう。

生まれは決して不幸だったわけではない。一般的な家庭に生まれ、二歳までは普通に生きていた。だが、そこで一族全員が強盗に殺された。運良く生き延びた彼は、ある研究所に連れ込まれる。彼の地獄はここから始まった。日夜続けられる人体実験、軍隊顔負けの調練、過酷な生活を強いてこさせられた彼はいつしかゼオライマーという力を手に入れていた。

もしかしたら、彼が二歳で孤児になったのは運命だったのかもしれない。

ゼオライマーは彼によく馴染んだ。まるで彼のためだけに生まれてきたような、それほどに彼に適合した。

ゼオライマーは彼のために破壊と再生を繰り返す。天の名を背負いしゼオライマーは名に恥じぬようその力を増大させる。

まるで神であるかのように。

＊

「人は能力で差別されるべきだ。性別では差別するべきではない、区別するべきだ」

これはあるガキが、ふと口にした言葉だ。私ことイーリス・コーリングは妙にそれに納得した。

確かに

人間は性別で差別してはいけない。その人間が、男か女に生まれてくるかなんてフィフティ・フィフティ。五割だ。そんな二通りしかない、二つしかないもので差別をしたって、何の利益も生み出さない。男が優秀か、女が優秀かなんてその個人の力に寄ってくる。それを踏まえると、今の世界はなんて歪なのだろうか。

「この世界は愚鈍だ。冥王たる俺様にとって見下すべき価値も見当たらない吐き溜めに過ぎない」

あのガキ、秋津マサトは次のようにも言った。ふむ、確かにな。さっきの意見を踏まえると、マサトがこのように言うのもわかる。この世界は性別で差別されている。国防力になるＩＳは、女性にしか操れない。そこから女尊男卑が生まれたのだった。本来なら能力で差別されるべき世界が性別によって差別される世界に変わった。言いたいことは分かる。確かに、女性は国を護るための力になる。

だが、それは一部の人間の話だ。女性が力になるからって女性全員が威張っていい事じゃない。世界は能力で差別されるべき。それはこの世界で、密かに顔を覗かせている。例えばだが、ＩＳが世界を席巻してから五年経った今でも、議会の実権は男が握っている。ＩＳの管理にしてもそう、国の手綱を握るのもそう。殆どが、男性によるものだ。これは男が女より国政に強い、と言うことを示している。

ＩＳ神話論、というものが世の中の女を中心に広がっている。これは国の要であるＩＳ操縦者が実際に国の政治をするべきだ、と言うものだ。はっきり言おう、こんなもの成功するはずが無い。今まで国政に関わってこなかった、戦うしか能が無い女が国を動かせるわけが無い。万が一にもそうなったら、巻き起こるのは世界の利権をかけた戦争だ。まずＩＳを持たない発展途上国が先進国に吸収され、次第に勢力がシンプルに区分けされていき、最終的に全国を降したものが世界の覇者になる。確かにそれは最終的に平和になるかもしれない。が、そこに至るまでの犠牲は計り知れない。

さて、私が今までこうやってつらつらと考えを張り巡らせているのには意味がある。何、簡単な事だ。

———秋津マサトが来てから、私はよく考えて動くようになった。

たったそれだけ、本当にそれだけ。それだけ言いたいがためにこんなにもの前置きを使ったのだ。

千四百文字。

うん、我ながらかなり語ったな。ま、これもマサトのお陰といえばそうなのか。

なぜ考えるようになったかって？　代表選手なのに模擬戦で負けたうえに、会うたびにガラクタと言われていたら嫌でも考えるように

なるぜ。

まぁ、単純にこれが言いたかっただけだ。それではイーリス・コーリングの変化を語り終えたいと思います。

次元連結システム複製計画始動！！（前書き）

今思うと、この二次創作書くの難しい……

マサトくんの一人称は難しすぎる、そのため三人称になるが、三人称も苦手。だからこんなに字数が少ないのか。

因みに最後に小ネタを盛り込んでみました。超適当です、あまり気にしないでやってください

次元連結システム複製計画始動！！

秋津マサトがアメリカ軍少尉になって一年。アメリカ軍、アメリカの有力研究所は提携して新たなる研究を始めていた。

「これより次元連結システム複製計画を始める！！」

『ワアアアアアアアアアアア！！！！！！！！』

一人の男が壇上に立ち、大勢の研究員の前で声高らかに宣言した。それに合わせて、五十人ほどの人間が雄叫びあげる。彼らがなぜここまで盛り上がっているのか、それを今から説明するとしよう。

＊

研究員達の雄叫びがあげられた日から半年ほど前。冥王こと秋津マサトは大統領庁、いわゆるホワイトハウスへと呼び出されていた。

「よく来てくれた、秋津マサトくん」

「ふん、愚民どもの願いを聞くのも、冥王の運命だ」

秋津マサトと握手をして彼を執務室に招き入れたのは大統領補佐官。彼は大統領補佐官が開けた扉を潜り、堂々と部屋の真ん中に配置された一人がけのソファーに腰掛ける。

「突然の召集、済まないな、秋津」

「俺様も暇ではないのだがな」

「重々承知しているよ」

彼が腰掛けたのちに彼に話し掛けたのは国防総長。彼はマサトに豪快に笑いながら、握手を求める。マサトはそれに無表情ながらも応えた。

「それで？　この俺様を呼び出したのは、なんのようだ？」

「それを今話そうとしていたのだよ」

マサトは握手をかわした後、不機嫌そうな顔つきで、目の前に座る大統領補佐官と国防総長を睨み付ける。その時の彼は足を組み、背もたれに背を預けている。瞳には嘲笑の色が見えるところを鑑みるに、この召集は急なものであったと見える。国防総長はそれを感じ取ったのか、手短に彼に資料を渡した。

「……次元連結システム複製計画、だと……？」

「そうだ」

資料を受け取り、目を通した彼の瞳には珍しく戸惑いが生まれてい

た。国防総長の考えを読めない、というよりは計りあぐねているかのようだ。なにが目的だ、と。

「君が来てからのこと、アメリカと言う国は目まぐるしい発展を遂げてきたのはこの間申したと思う」

「あぁ、把握している」

マサトはあらゆる仮定を頭のなかに構築していた。アメリカが反旗を翻す、は無いとしても、それに準ずる何かを企んでいるのかと。しかし、国防総長はマサトの肯定に満足したようにして首肯した。

「我らがアメリカの国としての威厳を整えることが出来た。次は他国に対しての牽制力が欲しいのだよ」

「牽制力？　……成る程、ゼオライマー程ではないが次元連結システムを応用したＩＳを量産したい、そういう事だな？」

「あぁ……、その通りだ」

国防総長の言い分はこうだ。全世界にゼオライマーという究極のＩＳがいることを知らしめ、世界にアメリカの強大さを再認識させるのが第一段階。次にその威厳を保つための戦力を実際に保有するのが第二段階、と言うのだ。確かに威厳だけでは、世界に対しての牽制力には為らない。今の世界においてＩＳはかつての核兵器のように各国の力を互いに牽制させる力を持っている。現在ではＩＳ理事会と、国連により核軍縮が締結された今、核兵器というのは土壇場での最終手段に成り下がったためだ。しかしかつて世界一核兵器を含む兵器を保有していたアメリカはその力の強大さゆえにＩＳという波に乗り遅れ、結局ＩＳと言うものに関しては後進的な国に成り

下がってしまったのだ。しかし、そこに表れたのがゼオライマーだ。スポーツ様に改造されていったＩＳと違い、完全に大量殺戮を目的とされた機体コンセプトは各国を圧倒するに十分過ぎた。アメリカは予見していたのだ、ＩＳと言うものでいつか戦争が起こるであろうことを。

そして、思い至ったのである。次元連結システムをアメリカ独自の技術として確立しよう、と。

次元連結システムの力は強大だ。無尽蔵のエネルギーを異次元から引き出してこれるのは、ＩＳだけではなく、世界のエネルギー事情を一気に解決することが出来るのだから。

そして、劣化でもいいから次元連結システムを造り出せたなら、それを全ＩＳに組み込んで国防力をあげる手立てにするのだろう。

「だから、次元連結システムの技術が欲しいと。それで俺様をこの場所に呼び出したのか」

「その通りだ」

秋津マサトは思考する。実はマサトとしてはアメリカに次元連結システムの技術を売るのは吝かではないのだ。彼はこの軍に入ってからの半年間にはそれなりに充実していた。ゼオライマーと言う力を任務で惜し気もなく使える、イーリスやナターシャといういつでも遊ぶことが出来る玩具も出来た。それに何より……、天という絶対的神話は崩されない自身があったから、だから彼は次元連結システムの開発を協力するのを決めたのだ。

天というものは自分以外には触れることが出来ない神たるもの。破壊して、再生を促す。自分にしか使えない絶対的存在だと彼は自負していた。アメリカ程度では到底辿り着かない、彼はそう安心していた。それに、既に唯一次元連結システムを確立した研究者は彼が

消し去っているのだ。だから彼は許可をする。アメリカという質量主義の国に、次元連結システムというバグを落としたらどうなるのか、と、まるでゲームを楽しむように。

「ふん、構わん。貴様らの要請だ。俺様は余興として、せいぜい楽しませてもらうとする」

――――そして、冒頭に移るわけである。アメリカ中の企業が保管していた研究用のＩＳコアを全て集めて、アメリカ中の選りすぐりの研究員を導入して。
ついに次元連結システム複製計画が指導した。

おまけ　―マサトがもたらしたアメリカの利益―

・ＩＳ技術の向上→アメリカ中の企業の力が世界に通じる程度に。（十三億ドル）

・世界初、ビーム兵器、エネルギー攻撃の確立→ビーム兵器の確立によりアメリカの企業が実弾系統からビーム系統にシフトチェンジ。ビーム系統のライセンスはスゲー高い。（十五十億ドル）

・秋津マサトへの取材費（十三万ドル）

・秋津マサトの給金（一三十万ドル）

・秋津マサトのご機嫌とり→賄賂とも言う（一三百万ドル）

・世界に対するアメリカの威厳。→世界の警察の名目を取り戻したよ、やったね♪（プライスレス）

・秋津マサトの訓練での修理代→アリーナやらＩＳやら毎度毎度ボコボコにされています（一三千万ドル）

・大統領、大統領補佐官、国防総長の胃薬代→経費では落ちません♪（一六万ドル）

冥王と国防総長の語らい（前書き）

まだまだ序章じゃー！！

でもこの時点で世界の命運が決まるという不思議。アメリカ以外の諸国、亡国機業涙目です

冥王と国防総長の語らい

アメリカ軍に秋津マサトがやってきて一年と二ヵ月ほどたった頃、冥王こと秋津マサトはアメリカ空軍によって行われる訓練を眺めていた。アメリカ軍の訓練は流石に国家代表や代表候補生がいるためか、レベルが高いものになっている。イーリスのファング・クエイクを先頭に、ナターシャ達が隊列飛行をしているその様は、戦闘機のそれより美しかった。さて、その訓練に秋津マサトが参加していないのは、単純に障に合わないからである。彼は集団でチームプレーをするよりも、断然ワンマンアーミーで殲滅戦をするタイプだ。この訓練をする必要はないのだ。最も、もしも彼に必要な訓練であろうと、社会不適合者である彼には共に訓練など、無理であろうが。

「ふん、やはり次元連結システム複製計画は難航しているか」

「あぁ、少尉に渡された基礎構成を元にしても実現に到るのはまだ先だと思われる」

「前にも言ったと思うが、俺様は貴様の計画に不必要に加担するつもりはない」

「わかっているよ。天に近づくためには人類は天に到達するための高き（バベルの）塔を自ら構築せざるを得ないのだ」

さて、そんな社会不適合者である彼は現在、イーリス達の訓練が直に見られる場所であるアメリカ空軍作戦司令室にて国防総長と共に語らっていた。彼らが話すのは専ら次元連結システム複製計画について。彼らアメリカ政府上層部にとって次元連結システムとは何物にも変えがたいものなのだ。昨今、不景気と言われる中、ゼオライ

マーと秋津マサトがもたらした利益によって国民平均所得が増加し、経済成長が著しいアメリカは国防費を前年に比べて1，5倍に増やしてまで次元連結システムを複製しようとしているのだから。

「さてな、貴様ら衆愚が天に到れるか。そんなもの幻想だ。やはり愚民は有りもしない幻想を見るのが好きだな。無駄だと分かっていても止めることはしない、そんな暇があれば現実を見据えるべきだ」

「人は誰しも夢を見たがるものなのだよ。誰もが、優れた能力を持ち合わせているのではないからな」

「ふん、やはりお前達は俺を飽きさせないな。貴様の顔からはありありと見えているぞ、能力を持たない人間を淘汰する冷血が。貴様は俺様寄りだな」

「君に似ているなんて、悪魔と同類に例えられるぐらい光栄だと思うな」

「くくっ、やはり貴様は俺様を飽きさせない。いいだろう、少し貴様らに手心を加えてやろう」

彼らの会話はまさにアメリカの今後の命運を分けるものに違いは無かった。皮肉を言い合い、持論をぶつけながら必要と思われることに――秋津マサトについてはわからないが――真剣に討論する。秋津マサトはアメリカ空軍少尉でありながら大統領への口利きがある。まるで中世ヨーロッパのノルマンディー公ウィリアムと西フランク王国のような関係だ。

「しかし、貴様らはこれだけの戦力を造りだし何をする気だ？　まさかとは思うが、戦争なぞ、するつもりではないだろうな？」

「そんな無駄なことはしない。やる必要が無いからな」

「ふん、それもそうか」

だが、彼らはかつての百年戦争のような無駄な行動はしないだろう。彼らにとって戦争とは、ＩＳとゼオライマーが表れた時点でゲームと化したからだ。彼らにとって戦争なぞルーチンワークとして成り果てた。慢心しているわけではない。確信があるのだから。マサトは、

「貴様ら衆愚にとってこれだけの戦力を集められたならば、戦争に勝ったも同然だからな。いや、各国の戦争に〝勝つ〟という概念が消え去るからか」

「その通り。各国はアメリカと言う国に逆らうことが出来なくなる」

「核抑止でもＩＳ抑止でもなく、さしずめ冥王抑止。アメリカの力は一層増すだろうな」

彼はそう言い捨てながら手に持っていた資料を机に投げ出す。机の上に散らばった資料のタイトルは『次元連結システム複製計画』。彼は一つの項目を指差し言う。

「アメリカ国内にある全ての研究用ＩＳコア二十四を使い、次元連結システムを八機造るのだ。貴様は相当な野心家だ」

「なんのことやら」

「白を切るなど、貴様も殊勝な事をするものだ」

国防総長は研究用ＩＳコアを全て使い、次元連結システムを複数作成しようとしていた。彼は、ＩＳコアのブラックボックスを解明しＩＳを自主作成するという手段を捨て、次元連結システム複製に金を掛けたのだ。相当な野心が無ければ、出来やしない。

「だが、貴様には期待をしている」

しかし、それを知ってなお、秋津マサトは国防総長とここにはいないもう一人の野心家、大統領補佐官を期待している。彼らが自分という天にどれだけの人間を犠牲にして近づくかを。達成するためにどれだけの人間を犠牲にするのを厭わないのかを。

「君に期待されるとは、悪魔と契約した気分だ。だが、それもアメリカ、引いては世界に必要なことだ」

「失望させてくれるなよ」

「あぁ、分かっている」

そこで国防総長が言葉を切り、この語らいは終了した。国防総長は秋津マサトに礼をして出ていく。それを冥王と言う名の悪魔は顔を歪めて笑み、見送った。バベルの塔を建築する人間を見下す神のように。

閑話――冥府への案内人――（前書き）

今回は秋津マサトがＩＳ学園にいくまでの閑話です

読まなくても、正直物語に進展はありません

閑話――冥府への案内人――

「特殊、任務だと？」

「あぁ、そうだ」

秋津マサトがアメリカに来てから二年と少しがたった頃、秋津マサトは国防総長と大統領補佐官の元へと呼び出されていた。彼らはテーブルを挟んで顔を向き合わせて話している。

「君にしか出来ない任務だ」

「ほう、話してもらおうか」

国防総長の言葉に顔を歪めるマサト。国防総長は彼の様子に第一段階は突破したか、とぼやいて彼に向き直る。

「先週、ＣＩＡの諜報員から違法研究所を発見した、と報告があった。詳細を見るに、人体実験、クローニングを手掛けているらしい」

「なるほどな……、政府の思惑に反している組織は潰しておきたい、そういう事だな」

「話が早くて助かる」

国防総長の言葉ににやりと笑い言うマサト。マサトは、

「ふん、アメリカ合衆国も一枚岩ではない、ということか」

「恥ずかしながら、な」

「アメリカ政府が裏で手心を加えている企業や研究所は数多くある。そのどれもが表ではクリーンなことを掲げているが、裏では汚い事をしている。しかし、その意義を理解できないガラクタがアメリカ政府の思惑に外れた行動を起こした。そのような人間に対して見せしめにこの研究所を潰し、アメリカ政府に研究所を集約させたい、か。やはり貴様が考える事は俺様を飽きさせない。何より、その計画に俺様を使うなどな」

「……」

マサトの推論に国防総長は押し黙る。

「図星、だな」

マサトは国防総長の様子を見てにやりと笑う。彼の言うことは全て的を得ていると言ってもいい。何度も言うようだが、アメリカ政府は今、急進的な技術開発が進んでいる。全ての分野に於いて着々と技術力が上がっている。しかし、それでも今のままでは次元連結システムを複製する迄には至っていないのだ。世界には次元連結システムに遠く及ばずにも革新的な技術力が数多くある。今の現状において、アメリカ合衆国にはゼオライマーは一機しかない。亡国機業などという組織も表れ始めた今、国防力をゼオライマーに頼らない現状を造り出さねばならない。だからアメリカ政府は有力な企業や研究所と裏で連携を執ることにより高い水準を目指しているのだ。しかし、それが公になれば賄賂行為などの必要悪が邪魔になってくる。だから、アメリカ政府は研究所等にクリーンな目標を掲げさせて、それを隠れ蓑にしているのだ。

しかし、それを履き違える人間がいる。政府に巣食うマサトが言うところのがらくただ。自らの利権や権力のためだけに、アメリカ政府の思惑から外れる人間はアメリカ政府にとっては目のうえのたんこぶでしかない。彼らがへまをしてしまえば自分たちアメリカの首を絞めることになる。ならば、その前にその人間やガラクタと繋がる研究所を潰してしまおう、と言うわけだ。秘密裏にゼオライマーを用いて潰してしまうことで、アメリカの評判を落とさないまま、他にそのようなことをしている人間に牽制を掛けようというのだ。アメリカ合衆国も一枚岩じゃない。国防総長はそれを強制的に一枚岩にすることで中央集権を果たそうとしているのだろう。

「そして、この任務に一般の兵士を使うわけにはいかない。そこで俺様に白羽の矢がたったと」

「その通りだ」

しかし、この会話内容から分かるように、この会話が他の人間に聞かれれば違法研究所よりもアメリカに不利益になる。だからマサトに白羽の矢がたったと言うことだ。一般の兵士では軍隊と言えど情報の漏れ口が少なくとも発生する。それはＩＳ部隊も同様だ。確実に情報が漏れないことを前提としている彼らアメリカ政府にとって、研究所を一撃で壊滅させられるマサトは好都合な人間だったのだ。彼らの手足であるＣＩＡでは研究所を完全に消しさるのは無理だろうし。

国防総長はマサトがこの任務を理解したと見て、彼を再度見やる。そして、

「君にはこの任務を遂行してもらいたい。してくれるか？」

国防総長の頼みに秋津マサトは口元を歪めて笑い、
「ふん、今ちょうどヒマしていたところだ。少しからかってやるとしよう」
資料と天のゼオライマーの待機状態ペンダントを手に取り、立ち上がった。そしてそのまま、彼らが会談をしていた場所から出ていく。
「……」
国防総長は彼の背中を見て、違法研究所に対して合掌した。

＊

「ふん、アレがガラクタの言っていた研究所か」
彼、秋津マサトは現在ゼオライマーを展開して空中に停滞していた。背中や装甲のあちこちにある小型スラスターから熱を小刻みに噴射して姿勢制御をしている。彼は両手の甲にある光球を眺める。
「少しからかってやるとしよう」
彼はそう呟いた後、右手の甲の光球を頭の近くにまで持ち上げて、研究所の方へと光球が見えるように掲げる。そして、
「次元連結砲、発射」

彼の口から出たキーワードにあわせて光球が三回まばゆい光を発した。瞬間、

ドォォォォォン！！！

という爆発音が研究所内で三回起こり、研究所の屋根が吹き飛ぶ。研究所と言えど、東京ドーム十五個程の面積があるのに、たった三回の攻撃で屋根が吹き飛んだ。彼は何をしたのか。彼は次元連結システムを使うことにより、エネルギー波を転移させて屋根付近で爆発させたのだ。

「な、何事だ……！」

「敵襲……！？」

「上からの砲撃だ！！　索敵急げ……！」

「索敵終了……！！　敵は一機……、これは、ゼオライマーです！！」

「なに！？　……まさか、もうアメリカ政府に気付かれたのか！！」

「くそっ、対空砲火急げ！！　あの悪魔を打ち落とすのだ！！」

突然の敵襲に慌ただしくなる研究所。やはり一介の研究所にしては過剰な程の戦力が備蓄されていた。ＩＳこそ無いものの、地対空ミサイルや、戦闘機など、前時代に栄華を誇った兵器が数多く投下さ

れた。
「ほう、天をミサイルで打ち落とせると思ったか！！　馬鹿め……！！！！」
秋津マサトの前方から地対空ミサイルが迫る。しかし彼は動くことはせず、腕を前に突き出すだけだ。
「国防総長は出力五十％オフを暫定的に凍結させた。ならば……！！！」
彼はそう呟いて、右手の甲にある光球にエネルギーを蓄めていく。
そして、
「次元連結システム最大出力！！　うるさい蝿を、破壊する……！！」
一気に収束、解放した。彼の右手から解放される破壊光線と紛うことないエネルギー砲。それは前方のミサイル凡そ五百を一撃で破壊した。
「ふん、手緩いな。興醒めだ」
彼は、違法研究所の対応に心底がっかりした。そして、
「だが、貴様らガラクタにプレゼントをやろう。特別にメイオウ攻撃で葬りさってやる」
戦闘機が発進しようとする中、彼は両手の甲の光球を輝かせ、胸の一際大きな光球、次元連結システムにより瞬間移動して上空に飛び

上がる。
彼はその両腕を胸の位置まで持ってきて、そして、
「塵一つ残さず、消滅させてやる」
両手の甲の光球を打ち付けた。途端にまばゆい光が研究所を包み込み、研究所はメイオウ攻撃の膨大なエネルギーの奔流に包み込まれた。全出力を込めたその攻撃は研究所のみならず、地面、空を焼き尽くし、戦闘機は余波で爆発し、辺りは焦土と化していく。悪魔の如き攻撃に研究所の人間は断末魔もあげる間もなく死んでいった。
「くくっ、ざまぁないな」
彼はそう呟いてアメリカ空軍基地へと進路を取った。

ガールズトーーーク！（前書き）

今回も閑話。銀の福音事件に持っていくには結構必要な話です、多分……

ガールズトーーーク！

「最近さぁ……」

「ん？　どうしたの、イーリ」

こんにちは、ナターシャ・ファイルスです。今日は秋津マサトがアメリカに来てから丁度二年半経った日です。そんな、記念すべきか、それとも恐れるべきか分からないような日でも私たちの訓練は変わらず続けられ、今、イーリと共に空軍基地内の食堂にて食事を取っています。しかし、さっきからイーリは溜息ついたり、頭を掻き毟ったりと落ち着かない様子です。……マサトの悪い病気が移ったのかな……。

「いやさ……、マサトが遠いなぁ、って思ってさ」

「は？」

さっきまで落ち着きの無かったイーリが突然そんな事を言い出した。私は勿論困惑するのみ。彼女の目はどこか遠くを見ていた。……ほんとどうしたんだろう……。

「え？　あぁ、えっと……、急にどうしたの？」

私が再度そう聞くと、イーリは遠い目をしたまま呟いた。

「だってさ……、アイツはここに来てまだ二年なのに既にあたしに次ぐＩＳ操縦者になって、さらに次元連結システムで世界を作り替えようとしてるだろ？　高々二年しかここにいないのに、あたし

達なんか及ばないような高みにまで上り詰めたじゃねーか」

「あぁ……、そういう事ね」

なるほど、そういう事ね。なんだ、遠い目をしていたからマサトに思いを馳せていたわけじゃないのね。つまらないわねぇ。もしも思いを馳せていたのなら、趣味が悪いって笑ってあげたのに、残念。ま、とりあえず話くらいは聞いてあげますか。

「つまり、イーリは悔しいわけね？」

私は昼食のカルボナーラをフォークでくるくると巻き取りながら言う。食事中に話すのはナンセンスだけど、たまには楽しく食べるのも大切よね？　私はイーリに意地悪く笑うと、イーリは珍しく真顔で食べていたサンドウィッチを皿に置いた。

「いや、そうじゃねーんだよ」

「え？」

「ただな、アイツの事をスゲーなと感心してんだよ」

「……」

「だってよ、偶然だとしてもＩＳを使えて、あんなピーキーな機体を乗りこなして、さらにはその技術を理解してるんだぜ？　並みの人間が出来ることじゃねーよ」

「……」

「だから、アイツが遠い、と思うんだよな」

驚いた。単純に驚いた。前からイーリの行動に思慮深さが表れ始めていたとは思っていたけど、ここまで考える事が出来るようになっていたとはびっくりである。

「確かにね、私たちもＩＳを動かすことはできる。だけどその仕組みを全て理解しているわけじゃない。だって、私たちはＩＳ操縦者で技術屋じゃないもの」

まぁ、私も驚いていないわけじゃない。イーリの言うことは最もだ。なぜなら。私たちは確かにＩＳ操縦者だけれども、なぜＩＳが動いているのか、どのようなシステムが組み込まれているのか、全てを知っているわけじゃない。だって技術屋じゃないから。勿論ＰＩＣで浮いていることや、シールドエネルギーでシールドバリアを出しているくらいは知っている。だけどその仕組みを全て知っているわけじゃないのだ。

その点、マサトは凄い。彼は自らが駆るゼオライマーを全て知っていると言っても過言じゃないぐらい、ゼオライマーを理解している。アメリカの科学者が集まっても理解できない次元連結システムを自分で開発したわけではないのに知っているのだ。私たちには到底無理なことだ。

「それにさ、一般人じゃ知り得ない事も知識として持ち、それを利用できてやがる。ただの一般人があの魑魅魍魎を突破してきた国防総長や大統領補佐官を論破できるはずがねーんだ」

「一理あるわね」

そう、イーリの言うとおり。マサトはあの年齢ながらやり手の政治

家であるあの国防総長、大統領補佐官にまともにやりあえるのだ。
当時十歳には見えないわよね。

「だろ？　アイツがこれからどこまで上り詰めていくのか、楽しみじゃないか？」

「そうね、でも今は私は複製次元連結システムを初めて搭載させる『銀の福音』のデータ取りで忙しいからね。自分ので精一杯よ」

「ずりーよな、ナタルは。新型専用機のテストパイロットになるなんて」

「あなたもファング・クエイクを改修して複製次元連結システムを搭載できるようにしたイメージ・インターフェース搭載ＩＳ『ファング・クエイクＭＫ－？（仮）』があるじゃない」

「正式に名前が決まってない奴なんて、嬉しくねーよ！！！」

さっきまでマサト凄いよマサト、なんて話していたのに、いつの間にか自分達のＩＳの話にすりかわっている。うん、楽しいなぁ。

でも、この楽しさもあの悪魔（マサト）がもたらしたと考えると、少し複雑ね。またガラクタ、なんて言われて遊ばれるんだろうな。はぁ、欝だ……。

ガールズトーーーク！（後書き）

ガールズトークと言いながら、そこまでガールズトークをしていない事実。マサトくんに浮いた話？　あるわけないでしょう

天の系譜と天の賛美歌（前書き）

今回は初マサトデレ回！！！！

ツンツンツンツンツンツン、そしてちょっとデレのマサトを楽しみに！！

天の系譜と天の賛美歌

「銀の福音……、私の専用機」

ある日ある時、アメリカ空軍基地の地下格納庫にて一人の女性が一機のＩＳに手を置いて目を瞑っていた。ナターシャ・ファイルス。それが彼女の名前。そしてＩＳは銀の福音。

「複製次元連結システムを初めて搭載した純アメリカ製のイメージ・インターフェース搭載型ＩＳ。世代にして第三，五。アメリカ主力のＩＳになる予定、か」

彼女、ナターシャは慈悲深い視線を銀の福音にぶつけ、天を仰ぐ。この銀の福音は元来、アメリカ・イスラエル共同で製造される予定だった。だが、アメリカの技術力、国防力がここ二、三年で急激に上がったためアメリカのみで造られるようになった初めてのＩＳだ。そんな記念すべきＩＳのテストパイロット兼専用機持ちになったナターシャはどことなく浮かない顔をしていた。

「銀の福音……、あなたはそれでいいの……？」

ナターシャが銀の福音に対して慈悲深い視線を送っていたのも、彼女が銀の福音に乗ることを躊躇っているのも、彼女のＩＳに対する母性愛にある。

銀の福音は先程も言ったとおり、アメリカ・イスラエル共同製作されるはずだった機体だ。その機体コンセプトは広域殲滅、高機動攪乱となっている。しかし、アメリカの複製次元連結システムによりその本質は変えられてしまった。次元連結システムは複製であろうと、オリジナルであろうと、エネルギーを引き出してくる先は異次

元だ。しかし、その異次元へと開く扉を開けるためにはＩＳコアが必要になる。その際に、ＩＳコアはその代償として意思を奪われる。彼女が銀の福音に慈悲深い視線を送っていたのはそれが原因だ。ＩＳというのは搭乗者との絆を作り、搭乗者とともに成長していく。だが、複製次元連結システムを搭載したＩＳに自己進化の決定権は無く、常に搭乗者のあるがままに動くのだ。秋津マサトは言うだろう。『兵器に感情、意思などいらない。ＩＳは所詮道具だ』、と。ナターシャ・ファイルスも軍人であるからマサトの言は正当性があると思っている。だが、彼女の母性が許さないのだろう、意思を破壊してあるがままに動かす事を。だからナターシャ・ファイルスは銀の福音に乗るのを躊躇っている。

「……」

ナターシャが銀の福音の装甲に額を着けて目を瞑る。祈るように。その様子を端から見ている人間がいた。イーリス・コーリングと国防総長だ。彼女等は地下格納庫に続く廊下の壁に背を預けて立っていた。

「ナタルの気持ちも、少しわかる気がする」

「……そんな事を言っていると、またマサトにガラクタと侮辱されるぞ？」

「……構わねーよ」

イーリスは祈るように膝を折って銀の福音に額を着けるナタルの後ろ姿を見ながら言う。彼女の顔には感情は見られない。彼女は軍人として既に割り切っているのだろう。そんな彼女の様子を見て、国防総長は懐から一枚の紙を取り出して渡す。彼女はそれを怪訝そう

な表情で受け取ると、その場で開けて見る。

「これは……」

「君の新ＩＳ『ｇｅｎｅａｌｏｇｙ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｈｅａｖｅｎ』（ジェネアロジー・オブ・ザ・ヘブン）、日本名『天の系譜』と『銀の福音』（シルバリオ・ゴスペル）の詳細だ。君に渡しておく」

「……開発予定期限二年半。どちらもオリジナルの六割の出力を誇る複製次元連結システム搭載。搭乗者は正式にナターシャ・ファイルス、イーリス・コーリングに、か」

「正式な辞表は後日個々に渡すが、君たちはアメリカ空軍少佐に任命されるはずだ。なおいっそうの活躍を期待する」

「……」

国防総長は詳細を読み驚愕を顕にするイーリスを余所に、口早に要件を伝え、立ち去ろうとする。だが、

「あぁ、そうだ」

「……？」

いきなり立ち止まった彼はイーリスの方を向き、彼女を見つめる。イーリスは突然立ち止まった彼に戸惑いを隠せていない。彼はイーリスに笑顔で、

「彼、秋津マサトが君たちに伝言だそうだ。『天に触れれば何物も消え去るのみ。だが、人というものはガラクタであろうと時として天に到達する。貴様らは天に至る高き塔（バベル）駆使して天に触れる権利が

ある。その権利を持ちしバベルが、そう易々と崩壊するなど思うな。その程度で崩壊するなど、天の系譜と天の賛美歌、ゴスペルを名乗る資格などない』とな」

「な……」

「伝言にしては物凄く長くて覚えるのに苦労したよ。さて、私からの用件はこれだけだ。あとは君たちで頑張りたまえ。君たちの背後には自由（アメリカ）と冥王（秋津マサト）がついているよ」

「……」

国防総長はそういって今度こそその場から立ち去った。イーリスは彼の背を見て、そして直ぐ様ナターシャの下へと駆け出した。イーリスの顔には歓喜が現われていた。

＊

「よう」

「ふん、貴様か」

アメリカ空軍基地の作戦指令部に国防総長と秋津マサトはいた。秋津マサトは目を閉じていたが、国防総長が部屋に入ってくるなり、

目を開けて一瞥する。国防総長はそれを受けて、笑みをこぼしながら彼の対極にあるソファーに座る。秋津マサトは、

「貴様、伝言に付属して余計な事を言いすぎだ」

「別に構わんだろう」

「ふん、ガラクタが付け上がったらどうする」

「君としてはそれが本望なのにか？」

「……、ちっ」

秋津マサトが国防総長の言葉に詰まり、舌打ちをする。国防総長は彼の様子に意地悪く笑う。

「君ももう少し素直になればいいものを。彼女等は君曰く天に至れる人間なのだろう？」

「……ガラクタにしては優秀だった。それだけだ」

「素直じゃないね。ま、君の素直な様子など見たくもないが」

秋津マサトは国防総長の言葉に苦々しく笑い、そして乱暴に立ち上がり部屋を出ていった。国防総長は彼の様子を見て更に笑みを深くした。

「……まったく、やつといったら。本当に、素直じゃない」

彼はそこで一区切り、

「だが、私に息子がいたらあのようなのかね？　……あんな生意気なガキは私の息子には産まれないな。全く、奴のせいで変な想像をしてしまった」

百面相の如くコロコロと表情を変えて笑う国防総長。そして彼は作戦指令部から出て、自分の政務に戻っていった。

＊

『複製次元連結システム搭載実験』

◇搭載機
？銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）
？天の系譜（ジェネアロジー・オブ・ザ・ヘブン）

◇被験者
　？ナターシャ・ファイルス少佐
　？イーリス・コーリング少佐

この実験を以て成功となった場合、正式に次元連結システム複製計画を始動。最終的に量産型ゼオライマーを十機製造する予定である。なお、この書類は機密書類故、手に取って三十分後に爆発する。覚えられたし。

バンッ！！！！！

ブリュンヒルデ墜つ（前書き）

今回はついに一夏誘拐回です。

まぁ、一夏の影も形も出ていないけどね！！

ブリュンヒルデ墜つ

秋津マサトがアメリカに来てから四年が経った。次元連結システム複製計画はあれから無事に軌道に乗り、着々と開発は進み、八割方終了している。そして、今秋津マサトと国防総長、大統領補佐官はアメリカ政府の政庁にて国際ＩＳトーナメントを観戦していた。

「……ブリュンヒルデが決勝戦で途中棄権。アメリカのイーリス・コーリングが優勝、か」

「嬉しくない勝ち方ですね」

「……」

そのトーナメントは既に終わっているが、速報でブリュンヒルデの途中棄権が全世界に放映されていた。国防総長と大統領補佐官はイーリスの決勝戦での活躍を見れなかったのと、決勝戦なのに不戦勝なのが気に食わないらしく、顔を顰めている。そんな中、マサトはテレビを睨んでいた。マサトのその様子に気付いていないのか、国防総長と大統領補佐官はさらに話を続けていく。

「折角、この国際ＩＳトーナメントのためにジェネアロジー・オブ・ザ・ヘブンの開発を急ピッチで進めて唯一複製次元連結システムを完成させたというのに。これではアメリカの力を各国に知らしめることが出来ないではないか」

「まぁ、イーリス少佐もよくやってくれましたよ。決勝戦までのイーリスの活躍を見た理解ある人間は今年の優勝者はイーリスが相応しかったという人間もいるのですから」

アメリカは実は初の実戦配備型の複製次元連結システムを既に完成させて、ジェネアロジー・オブ・ザ・ヘブン――天の系譜に既に搭載させていた。平均出力はオリジナルの半分、最大出力はオリジナルの七割と、当初の六割から大きく上回る成果を残していた。大きな資本と人材があるアメリカらしい成果と言える。
ナターシャ・ファイルスの銀の福音は現在八割まで完成しており、来年の夏ごろまで最終調整を行い、実戦にロールアウトする予定だ。量産型ゼオライマーはまだまだ時間は掛かると見られているが、完成するのは目に見えている。
そんな話を国防総長と大統領補佐官が話していると、マサトが急に沈黙を破った。
「……このトーナメント、裏があるな」

「「……なに……？」」

先程まで自国自慢を繰り広げていた国防総長と大統領補佐官はマサトの言葉を耳ざとく聞き、すぐに真剣な顔をする。マサトは独り言のように続けた。

「今回の国際ＩＳトーナメントの開催国はドイツ。最近ドイツ軍上層部に不審な動きが見られるとＣＩＡから報告が上がっていた。ブリュンヒルデの途中棄権に何か、裏があると推測できる」

「……あぁ、私だ。今すぐにＣＩＡにドイツ軍上層部を探らせるように指令を。あぁ、健闘を祈る」

マサトの推論を聞き、大統領補佐官がＣＩＡに指令を出す。マサトは既にアメリカ国内で高い地位に上り詰めていた。国防総長、大統領補佐官との親睦も深く、二人はマサトを信頼しきっていた。

「まぁどうせ、ガラクタどもが考えた浅はかな計画だ。特に気に留める必要もない」

秋津マサトの様子は冷めていた。彼にとって技術大国ドイツであろうと、気にも止めない程度の存在でしかないのだ。

＊

「ドイツ軍上層部の狙いが分かったぞ」

「……」

「それは本当かね」

テレビの速報を見ていたときから数時間後。ドイツ軍に潜入していたＣＩＡの構成員から報告が上がった。ドイツ軍はアメリカとは違い、今まで軍の規律と情報を守っていた男性が、ＩＳ登場とともに女性に変わったため運営効率が男性の時から低下していた。今まで男性が行ってきたものを、なにも慣れてもいない女性が引き継いだのだ、情報漏洩も酷いものだった。これもＩＳ登場からの弊害とも言えるが、今回は好都合だといえる。因みにアメリカ軍は今でも上層部、兵士ともに男性が多い。核というものが最終手段に成り下がったとしても、アメリカには多数の兵器が存在する。今まで軍に従軍していなかった女性が操れるとは思わなかったアメリカ政府は、今でも男性雇用を止めてはいなかった。飛行機乗りは例外ではあるが。それはともかく……、秋津マサトは無言で、大統領補

佐官は驚愕を顕にしながら国防総長からの報告書を手に取った。

「あぁ、秋津少佐の言うとおり陳腐な策だったが、ドイツにとっては大きなスキャンダルになること間違いなしだ」

国防総長は自らもソファーに座り、書類を読む。

「ほう、やはりドイツ軍上層部鷹派は亡国機業と繋がっていたか」

「これは……、なんとも馬鹿げた計画だ。ＶＴ（ヴァルキリー・トレース）システムは条約違反だというのに……、それを剰え使うなど、馬鹿馬鹿しいな」

「あぁ、私も見たときは目を疑った。だが、どうやら事実らしいからな。どうしても信じられなかったが」

彼らが読んでいる書類に書かれている内容は、簡単に言うとこうだ。技術大国ドイツはアメリカの粒子ビーム技術と次元連結システムにあらゆる面で遅れを取り、技術大国としての面子を保てなくなってきた。しかし技術大国ながらこれ以上の技術革新は時間が掛かり、失った技術大国の名前は遠退いていく。ならば条約違反だがＶＴシステムを使ってドイツを国際ＩＳトーナメントで優勝させよう。ならばＶＴに相応しいパイロットの戦闘データが必要だ。そこでドイツに滞在しているブリュンヒルデに目を付ける。自演するのはリスクが高いから亡国機業に協力してもらおう。亡国機業にブリュンヒルデの弟を誘拐させて、ドイツ軍がいち早く助けることで恩を作り、ドイツに特別顧問として一年来てもらい、その間にブリュンヒルデの戦闘データを採っちまえ。と言うことだ。国防総長や大統領補佐官が馬鹿だ馬鹿だと、ドイツを罵っているのは、当然とも言えるだろう。アメリカはまだしもＩＳによる行政、経済、軍の混乱はまだ

世界で燻っている。ドイツの首相は女性だったから行政はまだしも、軍隊は未だに規律がきちんと整備されていない。そんな状態で、違法実験やテロリストと繋がるなど、世界中に痴態を曝しているに等しい。まぁ、ドイツのこれらの計画を出したのがＩＳ推進を進める女性中心の鷹派だったからこそ、この痴態なのかもしれない。

「……問題はこれをどうするか、だな」

「下手に公表したら、暴動、戦争が始まるな」

国防総長と大統領補佐官はドイツに恨みの言葉を言外に含めながら、書類を見て舌打ちする。

しかし、それを見ても冷めていたのは秋津マサトだ。

「放っておけ。こんな茶番、気にする価値もない」

「ふむ……」

「こんなガラクタが考えだした計画に馬鹿みたいに乗ってやる必要はない。下手に乗ればアメリカもある事ないこと疑われる。ガラクタに気を遣うくらいならゴキブリに殺虫剤をかけない慈悲のほうが大切だ」

「……国一つとコックローチを引き合いに出すなよ……」

秋津マサトは興味を無くしたのか、書類を焼き尽くしながらそう言い部屋を出た。部屋に残った二人もマサト同様、書類を焼き尽くして部屋を出るのだった。

原作開始秒読み

「……ほう」

暗い暗い部屋。一つの光源以外何も見えない暗い部屋で、我らが主人公秋津マサトはただ一つの光源、パソコンのモニターを見ながら口の端を吊らせて笑う。彼の目線の先には今年のＩＳ学園入学者の個人情報がモニターに映っていた。

「…多少興味があったから調べてみたが……、」

なかなか有意義だった、と含み笑いをしながらマサトは言う。彼は今年で十六歳。本来なら軍隊から一時除隊してＩＳ学園に入学するべき年齢ではあるが、彼は何かと理由をつけて入学日を延ばしていた。理由は明確。ＩＳ学園などという物の存在意義を見出だせなかったからだ。ＩＳというものに関しても政治・経済、その他勉学に於いて優秀な彼にはＩＳ学園の入学は必要ないものだった。もっとも冥王たる彼がＩＳ学園等に言ったら学級崩壊どころか学園崩壊が物理的にも、精神的にも引き起こされる。そうなった場合の責任問題はアメリカにあるため、アメリカ側自体が彼にＩＳ学園に行かないようにもしている。

しかし、そこで引き下がらないのもＩＳ学園だ。彼らは何としてでも彼を入学させたいのだろう。虎視眈々と機会を窺っているのは周知の事実だ。

さて、ここで彼が何をしているのか説明しよう。今から二ヶ月前、全世界にあるニュースが流れた。

『二人目の男のＩＳ操縦者現れる。アメリカの次は日本で！！』

という世界的観点から見れば重要で、冥王的観点から見ればただの

有象無象のニュースは冥王とアメリカ政府高官以外には大きな反響をもたらした。アメリカはマサトという前例がある以上、二人目の可能性を考慮していたし、出来る男と女が多く政務に関わっていたためか、この自体がさほど重要なものでは無いことを見抜いていた。かたや世界を相手にして戦える戦力冥王を手にしているアメリカ、かたやＩＳに関しても人間性的にも未熟な一般高校生。どこにこの事実を危惧する要素があるだろうか。世界の警察という確固たる地位に、急激に伸びた経済、軍事的イニシアチブ、単純な話題性、国力の違い。様々な論点からアメリカはこの事態を考察して、問題無と判断した。ブリュンヒルデの弟？　そんなものメイオウ攻撃の前に塵一つ残さず消滅できる現状でブリュンヒルデもその他有力者も、彼らアメリカの前では全く意味を為さなかった。

「ふん、ＩＳ学園も大変だな」

マサトは全く心配しているような気配もなく、むしろ悪魔的な笑みを浮かべながら学園のデータを見る。学校というものはその保有する情報量とセキュリティのバランスが崩壊している。特に日本の学校は顕著であり、セキュリティが甘い。マサトがそれを見逃すはずもなく、学園のサーバーにクラッキングを仕掛けて、ＩＳ学園の情報を手に入れていたのだ。

「デュノア社社長と愛人の間に出来た遺児、オルコット家の無能、ドイツ軍の負の遺産、篠ノ之束の妹、ブリュンヒルデの弟にして二人目のＩＳ操縦者、さらには学園を襲った無人ＩＳ、ＶＴシステムの露見……。これらの情報を隠すためにどれだけ奔走したのか、想像に難くない」

ニヤリ、と笑いながら彼はクラッキングしていたデータを痕跡を残さないように自分のパソコンから破棄をする。既に彼はそれらの情

報を記憶しているし、紙媒体に保存も怠っていない。だから今見ているデータにはなんの価値もなかったのだ。

「まぁ、俺様は関わらないだけだ。あんな茶番に関わっただけ無駄。ＩＳ学園等、弱いものの逃げ場所に過ぎん」

彼はそういって、暗い部屋の中を歩いて大統領補佐官の元へと向かった。これから、彼を巻き込む事件が起こることも知らずに。

銀の福音（前書き）

今回が今のところ一番最長の文字数だ……

銀の福音

それは、秋津マサトがアメリカ空軍特殊ＩＳ研究所に出向したとき発生した。

『ぎ、銀の福音が暴走……！！』

『ハワイ沖、地図に載らない研究所から飛び出していきます！！』

『官制！！　緊急停止信号プログラムを打ち込め！！』

『銀の福音、信号受け付けません！！』

『くそっ……！！　どういう事だ……！！　天の系譜は成功したぞ！！』

鳴り響くサイレン、飛び交う怒号。官制室は慌ただしく蠢く人間の熱気に包まれていた。一方、官制室よりも上の階層に存在する特殊防壁搭載官制室では大統領補佐官、国防総長、秋津マサトが大型モニターで暴走して水平線に消えゆく銀の福音とナターシャ・ファイルスを苦々しい表情で見ていた。

「……何だというのだ、これは……！」

「官制室！！　至急実験を止めろ！！　何ッ！？　止められないだと！？」

「……」

大統領補佐官は唖然とした表情で銀の福音を見つめて、国防総長はインカムで官制室に声を荒げて指示を出す。しかし、彼らの行いも虚しく、銀の福音は水平線に飛び去った……、かに思えた。

『官制室より国防総長殿へ！！　銀の福音がハワイ沖十？で緊急停止、……こ、これは……！！！！』

「どうした！　早急に報告を！！」

『銀の福音の武装、銀の鈴に高エネルギー反応……！　メイオウ攻撃です……！！　目標は……、ここ、地図に載らない研究所です！！』

「なんと……、銀の福音が牙を剥くか……」

「なんとかしてナターシャに通信を……！！　攻撃を止めさせるのだ！！」

『ダメです！！　通信受け付けません！！』

「……万事休す、か」

暴走した銀の福音は搭乗者の意志を無視して地図に載らない研究所をロックオンしてメイオウ攻撃の準備を始めたのだ。大統領補佐官、国防総長は特殊防壁搭載官制室にいるため安全ではあるが、メガフロートの上に造られたこの研究所と研究所員は無事では済まされないだろう。それに攻撃すればナターシャはその意志関係なく犯罪者になる。二人はこれを危惧しているのだ。今回の不祥事が世間に露見すれば、世間の信用が崩落し次元連結システム複製計画が中止になる。そうなれば銀の福音は愚か、天の系譜、ゼオライマーすら封

印指定を受ける。それだけはなんとしてでも回避したい。しかし、方法が無い。ゼオライマーとは違い、出力が七割しかない銀の福音はメイオウ攻撃にチャージが必要といえど、すぐに対策など立てられないのだ。そんな時、秋津マサトがゼオライマーを展開した。

「……ふざけるなよ」

「「……」」

急にゼオライマーを展開した秋津マサトに二人は茫然として彼を見つめる。彼は獰猛な笑みを浮かべて、特殊防壁を殴り付けた。銀の福音のメイオウ攻撃では傷もつかない防壁はマサトのパンチにひび割れる。彼はそのまま、モニターに目を向けた。彼は銀の福音と、その向こうにいる〇〇〇を睨み付けた。

「天の眷属が、この俺様に楯突くだと……？　ふざけるなよ、ガラクタが！！」

バリンッ！！！

秋津マサトが激昂した瞬間、特殊防壁がDブレイクにより割れる。外との気圧差による吹き荒れる風により棚引く髪の毛も気にせず彼は遥か十？先にいる銀の福音に狙いをつける。

「次元連結システム発動。チャージなど、させるものか！！！！」

そして右手の甲にエネルギーを最大限に収束させて、放つ。黄色いエネルギー砲は真っ直ぐに銀の福音へと向かい、直撃……しなかった。

―敵性反応、オリジナルの次元連結システム搭載型ＩＳ『ゼオライマー』の攻撃と思われる。直ちにエネルギー収束を解除し、急加速、現宙域からの緊急離脱を最優先項目にします―

圧倒的熱量、エネルギーを誇るゼオライマーのエネルギー砲。空気中でも減衰しないそれに銀の福音は恐れを為して避けたのだ。銀の福音はそのままメイオウ攻撃を実行する事もなく、ハワイから日本方面へと飛び去った。

「ふん、他愛もない」

秋津マサトはモニターを見ながらそう呟くと、ゼオライマーを解除して地に降り立つ。そして二人を見据えた。

「さて、予想外の事件が発生した。銀の福音が飛び去った方向にはＩＳ学園の合宿島があるはずだ。そこには篠ノ之束、さらに新型ＩＳが確認されている」

「……まさか……！！」

「今回のこの暴走事故は仕組まれた可能性が高い。俺はこの事故の真相を直ぐ様調べる。その間、ＩＳ学園の専用機持ちに事態の阻止を要請しろ。所詮奴らでは銀の福音の壁にしかならん」

「分かった。直ぐ様ＩＳ学園の学園長に要請をする」

秋津マサトの表情には今までに無い怒りの色が深く刻まれていた。彼の怒りは最高潮に達しているのだ。

バタバタと、国防総長と大統領補佐官がホワイトハウスにいくための攻撃ヘリに慌ただしく乗り込む。それを端目に見据えながら、彼

は官制室に繋がるインカムに向けて声を荒げながら指示をする。

「今すぐ俺様の端末に今回の研究データを全て送信しろ！！！　五秒で終わらせろ！！」

『は、はい！！』

官制官は秋津マサトの様子に怯えながらも、今回の実験の開始から暴走するまでをマサトの端末に送信する。マサトはそれを確認するとインカムを荒々しくデスクに叩きつけ、端末へと向かう。

「ふざけるなよ、篠ノ之束……。たとえ貴様がＩＳの創始者であろうと、天に触れる事は許さん……。創始者は神になどなれぬのだよ！！」

彼はそうとだけ呟くと、端末のキーを素早く叩き始めた。

＊

一方、暴走した銀の福音はＩＳ学園の合宿島から凡そ５？離れた場所で滞空していた。銀の鈴と呼ばれる頭蓋部に付けられた可変ウィングをはためかせて。先程まで彼女はアメリカの要請を受けて出動した織斑一夏、篠ノ之箒と戦闘し両者を圧倒していた。次元連結シ

ステムを発動しないでも持ち前のスピードと火力で破壊したのだ。
そして現在は夕方。

―凡そ5?先より敵性と思われるＩＳ反応を五機確認。戦闘フェイズに移行します―

銀の福音は次元連結システムを利用した粒子間通信を応用したレーダーを用いて自らに向かってくるＩＳの情報を素早くキャッチする。と、同時に次元連結システムを発動して万全の対策を取る。そして、五機のＩＳの姿をとらえた瞬間、

―これより戦闘を始めます―

右手のひらに収束した粒子ビームを解放した。

＊

同時刻、秋津マサトは自身の端末により、研究所の全システムをクラッキングして洗い出し、篠ノ之束のＩＳコアへの介入の証拠を手に入れていた。巧妙に手口が隠されていたが、秋津マサトはそれを持ち前の能力で見つけだし、篠ノ之束という犯罪者の関与を証明するに値する証拠を手に入れた。

「よし、国防総長！！　俺に銀の福音阻止のための出動許可を」

「了解した。今すぐに発行する……、よし、許可証を発行した。いつでもＩＳ使用による戦闘を承認する」

秋津マサトは国防総長にそうとだけ言うとすぐにゼオライマーを展開してＤブレイクにより開けられた穴からメガフロートの上空に躍り出た。現在の時刻は午後四時。まだ銀の福音と五機のＩＳが戦っていないときだった。

「次元連結システム発動。急加速で銀の福音の停止任務に当たる。目的は銀の福音阻止の際の機密漏洩の防止、及び国際指名手配篠ノ之束の拘束」

マサトは瞳に怒りの色を滲ませ、ゼオライマーの背部にあるスラスターへエネルギーを充填する。そして、

「天に触れたものは消え去るのみ」

秋津マサトの身体は音速を超えてＩＳ学園の合宿島へと飛んでいった。

＊

ＩＳ学園の専用機持ち達セシリア・オルコット、凰鈴音、シャルロット・デュノア、ラウラ・ボーデヴィッヒ、篠ノ之箒にＩＳ学園の職員である織斑千冬、山田真耶は今までに無い恐怖感を味わっていた。

「……なんだ、あの強さは」

「規格外過ぎる……」

「僕の攻撃がすべて弾かれた」

箒、鈴音、シャルロットは口々に銀の福音を睨みながら言う。彼女ら五人の前には彼女らの攻撃でも傷一つつかず悠然と滞空している銀の福音がいた。銀の福音との戦いはこれ一回のみではない。一度目は一夏と箒による高機動の奇襲作戦だった。しかしこれは銀の福音の全方位バリアにより阻止され、密輸船もろとも二人はメイオウ攻撃の餌食となった。

そのような前例があるにも拘らず、懸命に銀の福音へと向かうその心はまさしく愛だろう。しかし、秋津マサトにとってそのような物はまやかしであり、くだらないものだ。彼女等の行いも、全て否定されるに違いない。

それはさて置き、五人と千冬と真耶は銀の福音に、そしてこれを造り上げたアメリカに恐怖感を抱いていた。十？にも及ぶ範囲を破壊し尽くす攻撃、何物も寄せ付けない防御力、そして何より何時間も戦うことのできるエネルギー量。全てが彼女等に平等に恐怖を与え

ているのだ。

―敵対機の硬直を確認。メイオウ攻撃のチャージを開始―

「ま、不味い……！！」

「全機、攻撃を銀の福音に集中！！」

「ダ、ダメ…。エネルギーがもう……！」

好機と見た銀の福音がメイオウ攻撃のチャージを開始する。それを見て五人の間に戦慄が走る。この場所は合宿島から五？と離れていない。今メイオウ攻撃を放たれたら、自分達だけではなく、何も知らないクラスメート達まで危険に晒すことになる。五人はなんとしてでも銀の福音を阻止しようとするが、エネルギーが底を付いている。もう無理かと思ったその時……、

「チャージなど……、させるものか！！！！！」

銀の福音の背後から、白、が現れた。月夜をバックに現われたそれは彼女らが待ち望んだ一夏ではなく……、

「死ねぇぇぇぇぇ！！！」

銀の福音を正拳突きで吹き飛ばしたのは、アメリカ最強にして世界最強のＩＳ、ゼオライマーであった。

＊

―敵性効果により機体制御システム破損。直ちに状況回復すると同時に現宙域より一時離脱します―

ゼオライマーのDブレイクを受けて銀の福音は急旋回をして宙域から離脱した。その様子を冷めた目で見つめるマサト。そんな彼に背後から近づく五人がいた。

「あ、あの……」

「黙れ、ガラクタ」

「「「「「……」」」」」

シャルロットが恐る恐るとマサトに話し掛けようとしたが、マサトのガラクタ発言に五人が固まった。通信で様子を聞いている二人も固まった。

「「「「「（え、えぇぇぇぇ！　ガ、ガラクタだとぉぉぉ）」」」」」

そして五人の脳裏には彼の発言に対する同じ気持ちがあった。彼はそれに気にすることもなく、合宿島の千冬に回線を繋ぐ。

「こちらはアメリカ空軍特殊ＩＳ部隊秋津マサト少佐だ。まずは我がアメリカの失態の尻拭いをしていただき、感謝する」

『ＩＳ学園教諭の織斑千冬だ。貴殿が秋津マサト少佐だったのか』

「そのような事はどうでもいい」

『……』

秋津マサトは織斑千冬の言葉には全く耳を傾けていなかった。それを感付いた千冬は彼にたいして疑念を孕んだ視線を向ける。しかし、秋津マサトはそれを気にすることもなく続けた。

「だが、この感謝と今回の命令違反は別だ。任務の枠を超えて、国家のＩＳに手を出す事は越権行為だ。本来ならばこの五名をアメリカに連行して軍法会議にかけるところだが、今回は不問にする」

マサトの言葉に五人の表情が強ばる。アメリカ政府が任務を要請したのは確かにＩＳ学園であるが、彼女達生徒には単独行動に対する権利を与えられていない。その状況で指揮権を持つ織斑千冬の命令を無視して国家のＩＳに攻撃するのは明らかに犯罪だ。しかし、マサトは意地の悪い笑みを止めない。

「これよりアメリカ政府はＩＳ学園への要請を撤廃。それと同時に今回の事件の首謀者である篠ノ之束の身柄を拘束する」

「「「「「……え？」」」」」

秋津マサトの言葉に、今度こそ全員の表情が強ばった。

復活の白、破壊の白

『ＩＳ学園の要請を撤廃？　篠ノ之束の拘束、だと……？　何を言って……』

「とぼけないでいただこうか。今回の暴走事件を引き起こした銀の福音のＩＳコアに不正な介入があり、銀の福音が操られている電気信号パターンがあったことが確認されている。遠隔地よりＩＳをハッキングできる人間は篠ノ之束のみだと考えるが？　それに、この合宿島に篠ノ之束がいることは既に調べがついている。証拠もあるのだが？」

『……』

秋津マサトの言葉に織斑千冬が食って掛かった。今は秋津マサトがこの合宿島に来て約三十分ほど経った頃だ。秋津マサトは証拠を空中投影システムで次々と提示していく。アメリカには世界中のありとあらゆるネットワークからアメリカに仇なす存在を特定するシステムがある。秋津マサトはそれを使い、篠ノ之束を特定したのだ。秋津マサトは表の顔、つまり軍人としての偽りの笑みを浮かべ、織斑千冬に言う。

「それとも何か？　貴殿らは国際指名手配犯である篠ノ之束を擁護すると？　貴様らも犯罪者の仲間入りだが？」

『篠ノ之束は犯罪者などではない。それは国連が勝手に決めた事で……』

「そうか、貴様も共犯者だったな白騎士。自らが犯罪者だという意

識すらないか」

『……』

秋津マサトの白騎士、という言葉に織斑千冬は動揺してしまった。もし、これがマサトやアメリカ政府高官ならば顔に動揺の色を滲ませず、嘘を何事もなく言えるだろう。織斑千冬がいくら世界最強のＩＳ操縦者であっても、政治的交渉は秋津マサトに劣ると言える。

「篠ノ之束、そして白騎士は犯罪者である。世界各国のコンピュータにハッキングをし、ミサイルをジャック、手続きも踏まずＩＳという武力で世界を混乱させ、世界の支配態勢を崩壊させた。これは立派なテロ行為であり、指名手配をするに足りると思うが？」

『……』

「確かに今現在の世界はＩＳというものの恩恵を受け、幸せを享受している。かくいう俺もＩＳを操縦出来るゆえにこの少佐という立場についている。しかし、これは各々が自らの立場を理解し世界のルールと支配態勢に則った正当なる報酬だ。自らがルールの下、生きれないからと世界を破壊する事とは同意義足れない事は馬鹿でもわかるはずだが？　そうは思わないか？　ガラクタ」

『……』

織斑千冬は秋津マサトの言葉に何も言葉を返せなかった。彼の言っていることは偽りでも虚言でもなく詭弁でもなく、正当な意見だ。織斑千冬は反論する言葉を持ち合わせていなかったのだ。

「なぁ？　そうは思わないか？　……篠ノ之束」

『え……？』

織斑千冬、それに五人が顔を俯かせて秋津マサトへの言葉を考えていると、秋津マサトは急に虚空を睨み、そして瞬間移動、何かを掴んだ。

「へぇ、束さんの迷彩を見破るんだ。流石冥王だね」

「黙れ、ガラクタ」

秋津マサトが掴んでいるもの、それは急に世界に溶け込み、姿を現した。篠ノ之束だ。篠ノ之束は迷彩装置で自らの姿を隠して逃げようとしていたのだが、秋津マサトに見破られて首を掴まれていた。

「それに、あの瞬間移動も凄いね。それも次元連結システムの恩け―「黙れと言っている、ガラクタ」―……」

ギリギリギリ、と秋津マサトが篠ノ之束の首を掴む力を強める。篠ノ之束は彼女にしては珍しく顔を顰めた。

「冥王とも…、あろうモノが…、器量が小さいね……」

「ふん、貴様に発言を許した覚えはない。別に貴様など世界には必要が無い社会不適合者だ。殺してその辺に捨て置いても構わないのだが？」

「……束さんを、殺している暇など……、あるのかい？　銀の福音をあのままにしちゃってさ……」

「あの程度、貴様を掴んだままでも倒せる」

篠ノ之束は必死でゼオライマーの拘束から逃げようとしていた。しかし、いくら織斑千冬と同じだけの身体能力を持っていようとゼオライマーの拘束を逃れる術は無かった。彼は篠ノ之束も、銀の福音も些事であるかのように合宿島を見た。キラリ、と何かが光り、猛スピードで秋津マサトに向かうものが見えた。

「束さんを……、離せぇぇぇぇ！！！」

『止せ！！　一夏！！！』

秋津マサトに向かっていたのは織斑一夏だった。彼は怪我によって病床に臥していたが、先程目を覚ましてすぐさまＩＳを起動。状況を見て、篠ノ之束を救うことを選んだのだ。織斑一夏は雪片弐型を振りかぶり、秋津マサトに接敵する。

「近づけばどうにかなると思ったか？　甘いのだよ」

「なっ……！」

しかし、マサトは振りかぶった雪片を片腕で掴み、そのまま篠ノ之束を掴んだまま空中で制動、織斑一夏の脇腹に回し蹴りを打ち込んだ。

「くっ……！」

「ふん、ガラクタが……。ガラクタが教育すれば、出来上がるのもガラクタと言うことか。つまらん」

「ふざけるなぁぁぁぁ！！！」

回し蹴りにより吹き飛んだ一夏だが、マサトのガラクタ発言に激昂。怒りに身を任せたままマサトに猛進する。下から一夏を制止する声が飛ぶが一夏には聞こえていないらしい。マサトは失望の念を込めたため息をつき、

「んなっ……！　……てめぇ！」

「ふん、どうした？　攻撃しないのか？」

一夏の攻撃ラインに手に持った篠ノ之束を盾に置いた。一夏はあわや篠ノ之束を斬り付ける一歩手前で制止した。秋津マサトは厭らしい笑みを浮かべる。

「人質がいるにも関わらず突進して攻撃。まるで人質を殺してと言わんばかりではないか？　まぁ、このガラクタは指名手配犯だからな。殺すことも世界では容認されている」

「こ、殺すって……！」

「何を驚いている、ガラクタ。貴様はさっきもこのガラクタを殺しかけたではないか。なにか？　貴様らガラクタは自分の手に持つＩＳが兵器であることを知らないのか？」

「あ、あぁぁぁぁ……」

秋津マサトの厭らしい笑みは止まらない。一夏に周りにいる五人も今ごろ何かに気が付いたようだ。

「ＩＳがスポーツのためだけの物だと今まで思っていたのか？　愚かな。ＩＳはどこまでいっても兵器であることは変わりない。まさか、今まで人を殺すことも覚悟していなかったのか？　ガラクタ以下だな、貴様らは」

秋津マサトは更に織斑一夏を含めた六人を見下すように見つめる。篠ノ之束は未だ首を掴まれたままである。

「ふん、興味もない。この程度でしかないのかＩＳ学園というものは。所詮は世界の屑が集まっただけの学園というわけか」

篠ノ之束を掴んだまま彼はそう言う。彼は篠ノ之束すらもガラクタを見るような目で見つめる。

「そして、貴様もそんなガラクタをデビューさせるくらいにしか能が無いガラクタというわけだ。ふん、貴様のようなガラクタはアメリカには必要が無い」

「私を……、どうする……、つもり……？」

「そうだな、貴様を海に投げつける。死ねばそれまで、運良く生きれば生き恥を晒すだけ。とても合理的だろう？」

「流石、冥王だね……。類を見ない鬼畜っぷりだよ……」

篠ノ之束は精一杯の反抗をしたつもりなのだろう。しかし、そんなものは秋津マサトには一切の効果も示さない。

「ふん、天たる俺の直々の罰だ。その身に精々刻んでおけ」

『や、止めろぉぉぉぉ！！！！！』

「天に近づくものは消え去るのみ。……死ぬがいい！！」

織斑千冬の制止の声が飛ぶが、マサトは意にも介さず篠ノ之束を海へと投げつけた。音速に近いスピードで飛んでいく篠ノ之束は海へと叩きつけられた。秋津マサトはまるで海へと産業廃棄物を捨てたような、まるで罪を感じていないような目で海を見つめて、そしてにやりと笑った。

「（ふん、なんとか生き延びたのか。つまらん）」

他の人間には見えていないが、彼の目には迷彩装置と潜水機能付きツールで海の中を逃げていく篠ノ之束が見えていた。

「まぁ、話はこれで終了だ。あいにくと俺様はガラクタと話す気兼ねも耳も持っていないのでな、貴様らと話すつもりはない」

「てめっ……！」

「苦情はアメリカ国防総省長官、大統領補佐官にしてくれ。今回の事は俺様の一任ではないのでな」

「世界の警察自体がこの事件を容認している……。苦情なんてしたら、逆に外交問題を傘にこっちが訴えられるよ」

「ほう、ガラクタのくせにそれなりに頭が回るようだな。流石デュノアの遺児と言ったところか」

秋津マサトは言葉とは裏腹に全く興味もなさげにシャルロットを見

る。シャルロットはマサトの威圧感と眼力に顔を伏せた。

「ふん、つまらんな」

マサトはそういうとゼオライマーを後ろへと向ける。その顔は既に一夏達の方を向いていなかった。

「銀の福音の暴走も止めねばならぬし……、つまらない。次元連結システムを破壊することはほぼ不可能。ゆえに止めるしかないのか」

彼はそういうと、銀の福音が飛んでいった方向にスラスターを全開で吹かせて飛び去った。そのスピードは紅椿でも追い付けないようなスピードだった。

動き出すアメリカ

「銀の福音は機体損傷はあったものの暴走停止、か」

「あぁ、秋津マサト少佐がよくやってくれたよ」

「それでは、我らは彼の努力に報いるとしようか」

「あぁ」

＊

秋津マサトはＩＳ学園アンチを全開に押し出した後、銀の福音を捕獲し、ＩＳコアに対する篠ノ之束のハッキングを解除し暴走を止めた。やり方としては、銀の福音の四肢を次元連結砲で破壊、そのまま全方位バリアを中和、ハッキングツールでハッキングといった感じだ。簡単に言うが、これは並みの人間が出来る事ではない。銀の福音もゼオライマーも戦闘時のスピードは音速を超える。その状況で、ハッキングをするなど普通ではない。

まぁ、それは今は置いておこう。今現在のアメリカはさらなる成長

を遂げていた。先の事件でＩＳ学園からの追及を逃れるために彼らは先の事件の真相をいち早く公開した。それはアメリカの正当性を示すと共に、篠ノ之束とＩＳ学園というものの内情を映し出すことになり、日本政府は今回の責任でアメリカに賠償金を払う事になった。

「さすがは大統領補佐官。素晴らしいシナリオだ」

「えぇ、しかしこれは秋津マサト少佐とそして頭は無いが話術とカリスマだけはある大統領のお陰ですよ」

「……大統領に関してだけ辛辣だな、お前」

今回のこの茶番はまさに大統領補佐官の手腕によるものだ。彼は表に出ることはないが、彼がアメリカ政府を動かしていると言える。アメリカのためなら大統領ですら騙す彼は合衆国一の愛国者だとも言えるだろう。

「あのような大統領に忠誠を誓うなど、有り得ないことですよ」

「……おいおい、そんなこと言っていいのかよ」

「あの大統領は私に絶対的な信頼を置いていますから、私が辞めるのはあの大統領が落選したときですね」

「……魑魅魍魎だな」

彼らはそういっているが、確かに今の大統領は口先だけの存在とも言える。カリスマはあるが頭は無いのだ。大統領補佐官はそれに付け込んでアメリカの国政を握っている。だから国防総長の魑魅魍魎

という言葉は的を得ている。

「それよりも、秋津マサト少佐は？」

「アメリカ空軍の戦略編成をしている。戦争でもおっぱじめる気か？　アイツは……」

「うちの軍は男性雇用も止めていないが飛行機乗りは現状が厳しいと聞いています」

「あぁ、それを解決するためにＩＳと戦闘機の運用効率を上げているらしい。戦闘機でもＩＳに勝るところもある、とさ」

「成る程。まぁ、スピードは負けないでしょうからね」

「そう。スポーツのためのＩＳ運用ではなく、戦争時のＩＳ運用。アイツはそれを追求しているらしい。今、亡国機業とやらが活発になってきたからな。いつ戦争が起こるか分からねぇ」

「ままならないですね」

さて、秋津マサトが今何をしているのか。それはＩＳと現代兵器の共同化だ。今現在の世界ではＩＳという絶対の強者の登場により現代兵器は淘汰されつつある。それは、ＩＳというものをスポーツに変換し、戦争という交渉をトーナメントという平和的解決にしたことに他ならない。戦争というものがＩＳトーナメントに置き換えられたため、現代兵器が必要なくなったのだ。しかし、篠ノ之束の行動や、亡国機業の存在を深く考える事が出来る人間には用意に世界の行く末が解るだろう。今の平和は仮初め。いつ戦争が起こるか分からない綱渡りな位置に世界がある事を。さて。もし、戦争が始ま

ったときＩＳだけで本土や大切な国民を護れるか？　答えは否だ。ＩＳというものは絶対量が４６７と決まっている。そんな各国に平等数散らばっているものに国防を割けるはずが無いのだ。ＩＳなんかで戦争を始めても泥沼。無駄な犠牲が出るだけだ。それは国民だけでなく国庫という国民を養うための財政もである。ＩＳというのはただではない。修理や改造、維持に今までの兵器の何十倍もの金がかかる。アメリカに至っては量産型ゼオライマーが軌道に乗っているためその心配はないが、ゼオライマーだけで世界を敵に回したとき勝てるか、と言われると無傷では勝てないだろう。それ故のＩＳと現代兵器の共同化だ。ＩＳでは護れない穴を現代兵器で埋める。実はこんな簡単な事が出来ない国が多々あるのだ。それはＩＳ絶対神話を語るＩＳ推進国だ。一応ドイツやイギリス、ロシアはＩＳに頼らない国防を保持しているが、ヨーロッパ圏の諸外国は酷い有様である。イグニッション・プランというＩＳ神話を体現したかのような計画を遂行する国、そしてそれにすら縋り付けない国。戦争が始まれば直ぐ様墜ちるのはこのような国だろう。

「だからアメリカは戦争に勝つために国力と経済を発展させているのだ」

「えぇ」

アメリカはヨーロッパ圏という反面教師がいるからこそ、ＩＳと言うものに絶対の信頼を置いていない。ＩＳだけでは国民を護れないことを知っているから。

「しかし、今の戦闘機や戦車、兵器じゃＩＳの絶対的優位性には認めたくないが勝てないぞ？」

「秋津マサト少佐にはＩＳの究極を教えてもらいました。次は我々

が現代兵器の技術革新を促す番です」

「そうだな」

だから彼らは秋津マサトとは違うベクトルで現代兵器を革新させる。

ＩＳ同様、秋津マサト絶対神話なぞに縋らないために。

多角的視点からみた銀の福音事件

Ｓｉｄｅイーリス

ピッピッピ……

白い白い部屋。清潔感の溢れた病室には一つのベッドに一人の人間が横たわっていた。

「……」

白い肌に金髪。目は閉じられているが容姿端麗だと一目で見て取れる人間、ナターシャ・ファイルスだ。彼女の腕には点滴の針の他に吸盤の様な物でコードが付けられている。

「ナタルの様子は？」

その彼女が寝ている病室に二人の女性が入室する。一人は軍医、もう一人はイーリス・コーリングだ。軍医はカルテと経過報告書を眺める。

「そうね。呼吸、バイタル共に安定しているわ。大事にはならなそう」

「そうか、良かった……」

「秋津マサト少佐なら何かやりかねない、とでも思っていた？」

「……まぁな」

彼女等は勝手知ったるなんとやら、ズカズカと病室のベッドのもとまで歩いていく。ここは空軍基地（今まで描写が無かったが、ヒューストン）なので軍医の場合は彼女の城といっても過言ではないので勝手知ったるなんとやら、では無いのだが―まぁ、それは置いておこう。

彼女等はナターシャが眠っているのを見て一先ず安心する。

「外傷、内臓損傷、脳への影響は全く無いわ。今は麻酔で眠っているだけ。じきに目が覚めるわ」

「そうか……」

軍医は秋津マサトの事を勘ぐるイーリスに苦笑しながらカルテを読み上げる。秋津マサトのナターシャ・ファイルス救出は見事なモノで、アメリカの損害は一切無い。しかし、イーリスにはそれが不思議でならないようだ。彼女は眉根をひそめながらナターシャを見る。

「まさか、あのマサトがこんな手加減するとはな……」

「そうね、国防総長と大統領補佐官の話では銀の福音はマサト少佐にメイオウ攻撃をしたらしいからね。ちょっと拍子抜けよね」

「……その心は？」

「ナターシャの柔肌を色々出来ると思ったのに残念！！」

「変態が」

イーリスは真剣にナターシャとマサトの話をしているというのに、軍医は目をキラキラさせてナターシャの肌に触れようと手をニギニギしている。その様子にイーリスは呆れたように睨み付けた。

「お前は腕は良いのにマッドの上、レズビアンだからな。救われねーよな」

「失礼ね。私はどちらもいけるわよ。ただ、男にそんな対象がいないだけ。一番マシなのはマサト少佐かしら」

「趣味悪すぎだろ」

「そう？　うちの同僚はマサト少佐の事を神のごとく崇拝していたけど」

「……そっか、お前らはマサトの本性を知らないもんな」

イーリスは軍医の話にげんなりしたのか、話を続けながら部屋を出ていく。ナターシャがまだ起きないことを踏んで食堂にでも行くつもりなのだろう。軍医も後に続く。

「どういう事？」

「どういう事もなくマサトは超が付くほどドＳで性格悪ぃんだよ」

「そうなの？」

「あぁ」

軍医は彼女に続きながら驚きの声を上げる。軍医の驚きはもっとも

である。軍医たちは確かにマサトの考えがリアリストなのも理想を見ないことも知っている。だが、マサトのガラクタ発言や豪放磊落な性格は知っている人が少ない。アメリカではマサトの同僚である特殊ＩＳ部隊の人間と、国防総長、大統領補佐官くらいだろう。それは一重に彼がそれらの人間としか交流がないからに他ならない。実はマサトはアメリカ国民の中ではヒーロー的立ち位置にいるのだ。アメリカの地位と名誉、国防力を底上げして、尚且つ自身は世界最高峰の強さを誇り、さらに端的に言えばイケメンの顔立ちをしているのだ。人気が出ないわけが無い。

「あぁ。どうもあたしたちの事が嫌いなのか、ガラクタやら使えないやら酷い有様だ。中には調教もされていないのにドＭになる奴までいるんだからよ」

「……ありゃ、それは強烈だね」

「うちの部隊も信奉者が多くてよぉ、熱い視線を送る奴も少なくないぜ」

イーリスはやれやれと首を振り呆れる。軍医はドＳな秋津マサトという新たなキャラを知ることが出来て得した、といった感じだ。どうもアメリカには真性のマゾヒストが多いらしい。

「でもさぁ……」

「ん？」

「それって愛情の裏返しなのかも、知れないわよ？」

「ぶっ……！！　ゲホッ……、ゴホッ……！　てめぇ、変な事言う

なよ！！」

そのマゾヒストの言うことにイーリスは噴き出す。イーリスの驚愕はもっともだろう。秋津マサトに愛情？　そんなものは幻想だと、彼は切り捨てるだろう。軍医はしかし、確信を持った面持ちでイーリスに、

「でも、軍隊って元々罵倒とか凄いところじゃない。あれって一人でも強くなって生き残って欲しいがためのモノでしょ？　それなんじゃないの？」

「毎日、訓練じゃないところでも言うんだぜ？　そんなのたまったもんじゃねーぜ」

「それはきっと訓練の延長よ。それに、」

軍医はそこで言葉を切り、イーリスを笑顔で見る。

「私は他の人にそんなこと言ってる秋津マサト少佐を見たことないよ？　それってさ、貴方たちを特別扱いしてるんじゃない？」

「……えっ……、……はぅ！！！」

「あはは、顔真っ赤だよ」

「う、うるせぇ！！」

軍医の言いたいことがわかったのであろう、イーリスは顔を真っ赤にして俯く。

秋津マサトはいつでも自らのスタンスを変えない。それは不変の真

理のように概念化されていると言っても過言ではないだろう。そんな彼が真理を曲げてまでイーリスとナターシャに執心するのは、明らかに愛情であると見れる。実際は天の系譜に属する眷属（イーリス、ナターシャ）を配下に付けたい支配欲から来るものなのだが、イーリスという乙女には軍医の言うことはとても新鮮だったのである。それは、恋をしてしまうくらい。

「ま、頑張りなよ。秋津マサト少佐はどうみても難攻不落だからね」

「う、うるせぇな！！」

ここに、マサト的には不本意なフラグが軍医によって建設されてしまいましたとさ……。軍医ェ……。

ＳｉｄｅＯｕｔイーリス

ＳｉｄｅＩＳ学園

ある会議室に何人モノ人間が席について深刻な表情をしていた。

「……篠ノ之束め、厄介な事をしてくれたものだ」

「全くです。今回の銀の福音事件、うまくいけばアメリカに恩を売れたというのに……、此方が賠償金を払うなど予定外だぞ」

その人間たちの口々から出るのはアメリカ、篠ノ之束への怨念の声ばかりだ。ふと、一人の女性が立ち上がり、今の現状に喝を入れる。

「皆さん、今はこんなことを話している場合では――「黙れ、元はと言えば貴様の弟と生徒が考え無しの行動をしたから、この状態なのではないか！！」――――失礼しました……」

「そうだ、このままでは我々は笑い者の道化だぞ」

「なんとかせねばなるまい」

一人の女性は会議室のあちこちから上がる批判の声に苦虫を噛み潰した様な表情をして、席につく。しかし、そんな女性のことは無かった事のように話を進めていく。

「しかし、あの専用機持ち五人は二ヶ月間の監視にＩＳ使用制限、織斑一夏は二ヶ月間の監視付き謹慎処分、監禁ですんでよかったものですよ。アメリカなら極刑ですからね」

「あぁ、このＩＳ学園はあらゆる世界から治外法権化されて、法律は国連が定めた国際ＩＳ法のみが適応される。つくづく織斑一夏がＩＳ学園の生徒でよかったと思うよ」

彼らの言葉に会議室のあちこちから笑い声が上がる。彼らの言う通り、このＩＳ学園は治外法権化されているのだ。本来ならアメリカに害なした存在はアメリカが、日本に害なした存在は日本が自国の法律に照らし合わせて犯罪者を律する。しかしこのＩＳ学園は世界的不干渉地帯。この不干渉には法律など見えない制約も含まれている。だからアメリカは下手に織斑一夏を裁けないのだ。

しかし、この国際ＩＳ法はＩＳ推進派の馬鹿な官僚が定めたものであり、法律としての意味を為していない。そんなものでは人を律することは出来ず、人は歪み、堕落していくだけだ。織斑千冬はあの日秋津マサトとの会話により俯瞰して物事を見ることを学んだ。故に彼女は今回のＩＳ理事会官僚（今まで話してきた男たち）の罪意識の無さに落胆すると同時にかつての自分を恥じていた。彼女は考える。

「（このままではこの学園と生徒は近い未来堕落して変な先入観を持ったまま、社会に出る。嫌でも世界に関係する人間が歪んでいては社会もいずれ歪む……。どうにかせねば……）」

こうして物語は次の局面に移りゆく。

多角的視点からみた銀の福音事件（後書き）

さて、ここで皆さんにアンケートをとりたいと思います。前回、感想でマサトのヒロインは弱体化するからいらないよね、という話をしていたのですが、もし、ヒロインを出したいと思う人がいれば、ヒロインの片思いで出したいと思います。両思いになるかはヒロイン次第ですが……

ヒロイン候補

◇イーリス・コーリング

◇ナターシャ・ファイルス

◇楯無会長

◇のほほんさん

◇まさかの軍医一択

アンケートは適当に感想に書いていただければ結構です。アンケート結果が集まらなければヒロイン無し、もしくは作者が考えたヒロインと言うことになります

決意（前書き）

短いですが、投稿します

決意

世界ってなんだろう…、ルールってなんだろう…、約束ってなんだろう…、規律ってなんだろう…。

ある人はこういうだろう、『守るべきもの』と。

ある人はこういうだろう、『作られたもの』と。

ある人はこういうだろう、『破壊すべきもの』と。

しかし、私は思うのだ。どれも違うものだと。私は思う、世界もルールも約束も規律も全て『幻想』だと。私は知った、世界の裏側を。

＊

こんにちは、ナターシャ・ファイルスです。私が眠りから覚めて三日、銀の福音事件が収束して四日経った今日、日本ではどうやら夏休みというものに入ったらしい。アメリカは二学期制の学校が多いから夏休みという長期休暇は日本より長い。九月くらいまで有るのだが私達軍人には関係なかったりする。……というものの、私にもし夏休みがあったとしても今は気に掛けることは不可能であろう。私は、この世の本質を知ってしまったのだから。

私が、銀の福音事件の銀の福音暴走から解放されて気絶した後、軍の上層部—私が少佐だから国防総長や事務次官等の高官—から今回の事件の概要を聞いた。

唖然とした。

愕然とした。

そして何よりも絶望した。

ＩＳは本来は宇宙進出のために造られた慈善事業の延長だった。いつしか兵器の色が強くなり、そしてスポーツという限られた物にまで落ち込んだ。私は別にそれは構わなかった。無用な戦争をせずスポーツという分野で争うことは無駄の無いことだし、不必要に血が流れない。だけど私たちはＩＳ選手でありながら、国の防衛力であったのだ。スポーツであろうと、いつ戦争が起きても可笑しくない兵器を操るための覚悟も持っていた。

だけど、その覚悟もこの地位に来るまでの努力も無意味なものに変わった。

ＩＳはたった一人の『天災』が自らが生活しやすい世界を構築するためだけに造り出した玩具なんだ。彼女にとって、私たちが背負う使命感も、覚悟も、愛国心も、人生も全て彼女の都合のいい世界を作り出すための付属品でしかなかったのだ。

「今まで私たちが戦ってきた意味は？　私たちが背負っている命は？　私たちが破壊した世界は？　全ては天災の茶番だったというの？」

一人ごちりながら思う。ふざけるな！！　私たちは天災のために存在している駒でも、玩具でも、人形でもない！！　れっきとした人間だ！！　それを神の如く弄んで、破壊して、凌辱して！

「こんなの、絶対おかしいよ……」

私は泣き叫ぶ。私の手は血に濡れている。先進国との戦争は未だ経験した事はないけれど、小国との小競り合いで人を殺した事がある。当時は少佐などという官位についておらず、精々曹長止まりだった私は勿論上層部の命令に逆らう事が出来ず、汚い事もやってきた。それは一重にＩＳは兵器だという認識と、愛国心あってのものだったと思う。だけど、今まで私が葬ってきた死者まで冒涜するのか、天災は！！　死者の礎を理解せず、それを吹き飛ばすように戦いを上書きする。

「ＩＳなんて……」

私はもう嘆くしかなかった。天災によってもたらされたのは幸福でも自由でもない、ただの絶望だ。

「でも、私は戦わなくちゃいけない。操られて暴走した銀の福音（あのこ）の為にも」

そのためなら、私は篠ノ之束を殺す事も辞さない。

決意（後書き）

皆さん、アンケートの回答ありがとうございます。
結果はまだ受け付けますが、経過報告だけでも……

◇ナターシャ→七票

◇イーリス→三票

◇更識盾無→二票

◇のほほんさん→二票（愛玩動物的扱いで）

◇軍医→0票

◇ハーレム→三票

◇ハーレム無し→三票

随分多く集まってびっくりしています。……しかし、この結果はどれを参考にしようか迷うな……。まだまだアンケートは受け付けていますので、どしどし感想へ、送ってください。

最後にアンケートに感想で答えてもらった皆さんには個別にきちんと感想返しをさせていただきます。本当にありがとうございます。

変わる世界？（前書き）

今回は閑話です。ＩＳ学園も今は夏休みですが、先の事件で原作主要キャラは軒並み監視付き、一夏に至っては謹慎で監禁中ですから面白くないので基本、アメリカ組主体です。

変わる世界？

アメリカにとっての秋津マサトの印象とは何か。それは一重に表すことは難しい。救世主であり、ヒーローであり、または防衛力であり……。その扱いは様々である。

アメリカの大手ＩＳ部品メーカーは言う『彼は我が社の改革者である』と。

アメリカの一般市民は言う『彼はアメリカの救世主だ』と。

アメリカ軍男性士官は言う『彼は男性の地位を確固とした人間だ』と。

アメリカ軍女性士官は言う『彼は私達の目標である』と。

……アメリカにとって秋津マサトは何者にも替えがたい者であり、そして、何物でも代替できる物であるのだ。アメリカ市民の間ではアメリカの象徴、アメリカという枠組みの中であればどれだけ功績を挙げようと軍属している時点で部品であるのだ。そして、それ以上に彼は天にも勝る人間であると言える。

さて、前置きが長くなったが今回はそんな彼によって変えられた世界の今を見ていきたいと思う。

Ｓｉｄｅイーリス

イーリス・コーリングの朝は早い。朝は四時に起きて空軍基地の周りを走るランニング。終了したと同時に熱いシャワーを浴びてクールダウン。その後身嗜みを整えて食堂へと向かう。ＩＳ操縦者にとって肉体性能はそのままＩＳの勝敗へと直結する。そのためにイーリスは身体を鍛えているのだが、その肢体はしなやかで非常に女性的であった。基地内には他国とは違い男性軍人も多く、イーリスは多数の視線を集めていた。しかし、イーリスは暗鬱な表情をしたまま視線も気にせずため息をついた。彼女の目の前にはトレーに乗せられたサンドイッチとコーヒー、スクランブルエッグが有るのだが、食欲が無いのかチクチクとフォークでスクランブルエッグを突き刺している。

そんな彼女の頭上に影が差した。

「どうしたの？　イーリス」

「あらあら、随分ブルーな表情ね。何かあったの？」

「……ん？　あぁ……、ナタルにミレイナか。どうしたんだ？」

「どうしたんだ？　…じゃないわよ。アンタの様子が可笑しいんじゃない、イーリ」

「……そっか、あたしはやっぱり可笑しいのか」

「ほんとどうしたのよ」

イーリスの前に座ったのはイーリスと同じ階級で同僚のナターシャ・ファイルスと軍医であるミレイナ・エンフィールドである。その二人はイーリスの暗鬱とした雰囲気に怪訝そうに眉根を潜めながらトレーを机に置く。ナターシャのトレーにはブレックファーストの定番トーストにベーコン、目玉焼き、サラダ、コーヒーが、ミレイナのトレーには携帯食料の定番カ〇リーメイト、ライトミールが乗せられている。
ミレイナはライトミールの蓋を開けながら、

「貴女、まだ悩んでるの？」

「……うっ！」

呆れた表情のミレイナの言葉にイーリスはザクザクとスクランブルエッグに差していたフォークを空中で止めて呻き声をあげる。

「いい加減素直になったらどうよ」

「何がなの？」

「あぁ、そういえばナターシャは入院していたから知らないのよね」
さらに追撃をかけるミレイナはナターシャの疑問に追撃を一時中止してナターシャに向き合う。ナターシャはコーヒーを口に含んだ。

「イーリスったら秋津マサト少佐に恋をしたのよ」

「……、ぶっ！！！」

「キャッ、コーヒーかかったじゃない！！」

「エホッ……！　ゲホッ、ゴホッ……！！　き、気管にコーヒーが……」

「なっ……！　違うぞ！　これは断じて恋じゃねぇ！！」

衝撃発言をしたミレイナにナターシャは案の定口に含んだコーヒーをミレイナにぶっかけた。ナターシャは驚きで気管の中にコーヒーが流れ込み背中を丸めて噎び、イーリスは顔を真っ赤にして抗議に目に涙を溜めた。

「だからイーリスは素直になると同時に落ち着きなって、それじゃあ肯定してるようなもんだよ。ナターシャ、大丈夫？」

「うぅ……」

「ゲホッ、エホッ！　だい、じょうぶ……」

一気にカオスになった空気のなかイーリスは顔を赤らめたまま自席に座る。ミレイナはナターシャの背中を擦りながらイーリスを見た。

「全く、アンタが素直にならないからナターシャがむせたでしょ」

「てめぇの所為だ！　てめぇの！」

食堂の空気はさらにカオスになった。

＊

「それで？　イーリスがマサトにご執心ってどういう事？」

あれから数分。熱々のコーヒーが気管の中に流れ込むという地獄から脱却したナターシャはジト目でミレイナを見る。

「いやぁ、そんな目で見ないで。感じちゃう！」

「真面目にしやがれ！」

ミレイナはいやんいやンと頬に手を当てて頬を桜色に染めながら頭を振る。その顔は恍惚そうだったが、イーリスが食べ終えて空になったトレーで頭を叩いてその奇行をやめた。

「もう、冗談じゃない」

「冗談には見えねぇんだよ、てめぇの場合」

「それより、私はイーリの話が聞きたいわ」

イーリスとミレイナが漫才をしている間、ナターシャはコーヒーをチビチビと飲んでいたが、ふと気が付いたようにイーリスの方を見る。

「うっ……。いや、単に、アイツのちょっとした優しさっていう

か支配心に触れたらいつの間にかっていうか……。あたしってがさつだからさ、今まで恋をした事が無かったからさ、それで、ね」

「ふぅん、それでよりによってマサトに恋しちゃった訳か。ま、いいんじゃないの？　アンタに釣り合う男なんてマサトぐらいでしょ」

イーリスが顔を真っ赤にしながらボソボソというのを、何処か面白くなさそうに見つめるナターシャ。ミレイナはそれを何処か可笑しそうに見つめていた。

……なーんか面白くなりそうね……

ミレイナは内心大爆笑しながらそう呟いた。

ＳｉｄｅＯｕｔイーリス

変わる世界？（後書き）

Ｓｉｄｅ～、と付いていながら一人分しか紹介していない……。

あまり気にしないでやってください。

因みにイーリスとナターシャがヒロインみたいな事をしていますが、まぁマサトにとって彼女等は体のいい駒ですのであまり気にしないで下さい。アンケートの結果はこれから反映させていこうと思います。

一応ですが、マサトは恋をしないので悪しからず。

変わる世界？（前書き）

今回の話はゼオライマーと秋津マサトによる世界的変化の様子をある人の視点で見てみました。

楽しんでもらえると幸いです。

変わる世界？

世界は変わった。表面上では女尊男卑の風潮が蔓延しているが、裏の世界では水面下で男と女の争いが激化している。いや、男と女なんて小さな枠組みではない。アメリカと世界、と言ったところだ。これはアメリカという国の長い一日を記したものである。

Ｓｉｄｅ他国のスパイ

カタカタカタ、とパソコンのキーを叩く音が聞こえる。暗い部屋の中で唯一の光源であるパソコンのディスプレイがチカチカと点滅する。私はそれを確認してエンターキーを弾く。同時に私のパソコンのディスプレイにはアメリカの一番手に入れる事が出来る表面の大衆的情報が手に入る。

「ふぅん……、この世界的不景気の中、この好景気……。随分頑張っているようね」

私は他国、具体的な国は言えないがアメリカではない国のスパイだ。今現在、アメリカには多くの国のスパイが潜り込んでいる。何故か、それは今のアメリカの状況に因る。
アメリカという国はＩＳが登場した瞬間、その権威を急激に崩落させていった。核に留まらず、最新兵器を大量に保有していたのだが、それを総動員しても白騎士事件の時、白騎士を捕らえることは出来ず、その上白騎士に嘗められるという失態をした。そしてＩＳ至上主義の風潮についていけず、世界の警察という地位は消え失せた。

しかし、アメリカは不死鳥のようにその地位と権力、資本を携えて元の地位以上の場所に復活したのだ。これに各国は驚いた。アメリカの携えてきたモノに。

世界初の男のＩＳ操縦者。

それは女尊男卑の風潮を崩壊せしめる代物だった。
秋津マサト。男のＩＳ操縦者にして後の世界最強のＩＳ、ゼオライマーの所有者だ。彼はアメリカ軍に十歳にして所属し、五年前、世界中のマスメディアの眼前でゼオライマーの攻撃力とアメリカの力を見せ付けた。私も見たことがある。レベル３にまで引き上げたアリーナ専用のシールドバリアを最低出力のメイオウ攻撃で小破したのだ。さらにはゼオライマーのスペックも目を見張った。次元連結システムというＩＳ最大の弱点である燃費の悪さと破壊力を一気にカバーする傑作が搭載されていたのだから。しかし、世界はゼオライマーにだけ恐怖したのではない。それを上手く御し、自らの力に上乗せしたアメリカに恐怖したのだ。

秋津マサトの力は強大だ。天のゼオライマーというものは核兵器をコンセプトにしたＩＳらしく、何もかもが全ての兵器の上を行く。しかし、ミサイルや機銃、爆弾の様に大量生産出来るわけでもなく、秋津マサトというのは一人しかいない。つまりそれは天のゼオライマーも一機しか無いわけだ。ゼオライマー一機だけじゃとてもじゃないがアメリカ本土は守り切れない。だからアメリカはゼオライマーの技術を余す事なく流用した。

例えば、初期に開発されたのは粒子ビーム、つまり荷電粒子砲を搭載したＩＳだった。破壊力に加えて、空気中でも安定して直進する

ビームは当時も、今でもアメリカの大手ＩＳメーカーにしか作ることは出来ない。

中期になるとアメリカは次元連結システム複製計画を始動し、第二回モンド・グロッソに初の複製次元連結システムを搭載したジェネアロジー・オブ・ザ・ヘヴンを投入した。当時アメリカ空軍少尉だったイーリス・コーリングは華々しい戦果を挙げて、不戦勝で優勝だったものの、世界中のマスメディアでは織斑千冬に勝っていたとコメントするものが過半数をしめていた。

最近になると、銀の福音事件があったが見事な情報統制でアメリカの殆ど一人勝ちになっている。銀の福音という第二期複製次元連結システム搭載型ＩＳの性能を世界中に見せ付けるとともに、篠ノ之束の不正とテロリズムを糾弾、外交問題を刺激したドイツ、日本、フランス、中国、イギリスから賠償金を搾り取っている。特に損害が多いのはフランス、日本、ドイツだろう。フランスは第二次イグニッション・プランに完全に放棄され、多額の賠償金により財政難。多くの国民のストライキによって政治経済が貧窮している。

日本は五ヶ国の中で一番賠償金額が高く、元から多かった国債がさらに増えたらしい。

ドイツは賠償金額こそ低かったものの、アメリカに奪われた技術大国という称号がさらに遠退き、さらにはアメリカに手を出したのが軍人だったのが災いし、ＩＳコアを一機凍結することとなった。

そしてアメリカは手に入れた賠償金によりＩＳ開発・修理・補給を一手に手懸けるＩＳ発艦用メガフロートを一艦、国土防衛用荷電粒子砲『ダイダロス』、量産型ゼオライマーを一気に配備、最新戦闘機も多数揃えた。

「改めて見るとアメリカ恐ろしいわね……」

現在の大統領は学はないが話術とカリスマ、人心掌握術に長けており、その後ろに控える大統領補佐官は相当のやり手、国防総省長官は若手ながらも優秀。それにゼオライマーが加わるのだ。完璧な布陣である。

「これとやりあうには……、一国の力じゃ無理ね。まず資本と地盤が違うわ。こんな化け物とやりあおうなんて私の祖国は馬鹿ね。危険性を報告しないと……」

私はアメリカの頭脳部をクラッキングして手に入れた情報を早速専用回線にて送信する。本来なら直接手渡しのほうがいいのだけれど、足が付くようなへまは私はしないわ～。

「ふんふんふ～ん、今回の仕事もちょろかったわね」

私は祖国にデータを送信できたのを確認して夜食を買いに財布を持って部屋を出る。

……そこにはサングラスをかけた三人の黒服がいた……、へっ？

「えっ……？　あの……？」

「ロシア政府直属情報部所属のミコット・ブランだな。警察のものだ」

「貴様にスパイ容疑が掛けられている。ご同行願おうか」

「えっ？　うそっ……」

私はすかさずパソコンのディスプレイを見た。そこには……

『Ｗｈａｔ　ｔｏｕｃｈｅｓ　ｈｅａｖｅｎ　ｏｎｌｙ　ｄｉｓａｐｐｅａｒｓ．（天に触れるものは消え去るのみ）』

とあり、私がロシアに送った筈のファイルはアメリカに逆クラッキングされていた。

「やられた……」

私はそう呟き、警察のお縄にかかった。

ＳｉｄｅＯｕｔ他国のスパイ

変わる世界？（後書き）

皆さんに一つ聞きたいことがあります。前回のアンケートの感想返しも済んでいないのに質問は失礼な事は重々承知ですが、ほんの些細な事を質問したいのです。

実は最近思い付いたのですが、ＩＳ世界でＩＳの最大のネックは燃費と出力の悪さでした。しかし次元連結システムがあればＩＳを元にした空中戦艦が創れるじゃないか？　と気付いたのです。でもこのゼオライマーによる世界観を崩してしまう可能性があるのでアンケートを取りたいと思います。空中戦艦を創るか否か。どしどし感想に明記の上回答してもらえると嬉しいです。

それと、今回は本文の感想がある方にのみ感想返しをしたいと思います。アンケートのみの方は申し訳ありませんが、集計の後、後書きにて感謝をさせて頂きます。

長くなりましたが、最後に。前回のアンケートを踏まえてマサトくんは恋心無しのナターシャ、イーリス、サブとしてのほほんさん、会長をヒロインにした物語り展開にする予定です。マサトくんは一貫して支配をし、必要とあらばヒロインを切り捨てるものとします。アンケート回答ありがとうございました。

変わる世界？（前書き）

今回はナターシャ視点です。マサトは名前しか出て来ませんが、ラブコメ的展開にはならないので安心してください。

どうやらイーリスのラブコメで世界観が崩れるのでは？　と不安になった方がいたようですが、安心してください！　マサトに限ってラブコメは絶対しませんから。
不安にさせてしまい申し訳ないです。

変わる世界？

銀の福音事件から三週間。世界は8月という季節を迎えていた。日本では高温多雨の気候のためか日中三十五度を超える猛暑日が続くのが普通であるが、それはアメリカでも例外はなく、ナターシャ・ファイルスは炎天下の中、新造されたメガフロートの上空から検査を行っていた。

何度も言うようだが、アメリカという国は銀の福音事件以降、以前よりも強大な発言力と資本を手に入れていた。その中の資本を使いかねてより製造していたメガフロートを完成させていた。縦に５０？、横に２０？の長方形の新造メガフロート『バベル』はＩＳ開発・補給・修理を一手に引き受け、空軍、海軍基地も併設された世界一大きな基地である。実践配備されているのはアメリカ最新戦闘機Ｆ－２２ラプター五十五機、空母、駆逐艦、原子力潜水艦、基地防衛システム、対空バルカン、対空ミサイル、対ＩＳ荷電粒子砲台『ダイダロス』、そして銀の福音に量産型ゼオライマー五機である。このバベル基地に所属する事になった彼女は上空から航空官制の稼働具合を検査しているのだった。

「マサトは首都防衛のため量産型ゼオライマー七機をつれてワシントンＤＣで大佐、イーリは中佐に昇格して量産型ゼオライマー三機で前回同様ヒューストン空軍基地、私は中佐に昇格したものの太平洋上に浮かぶ世界と戦うときに最前線になるバベル基地、か……。正直イーリが羨ましいわ」

戦闘機離着陸のための航空官制を検査しながらナターシャは一人ごちる。実際問題、彼女の苦悩は的を得ていた。このメガフロート『バベル』は本来諸外国との戦闘時に中継地点として二十年前から製

造されていたものだ。故に、補給施設はあれど戦闘能力は低いといえた。だが、十五年前にＩＳが登場し、世界の戦争という外交手段はスポーツへと成り代わる。同時にアメリカは白騎士事件で多大な損害を被り、さらには不景気へと落ち込む。そのためメガフロートの建設は一時凍結されていたのだが、先の事件以降景気のいいアメリカはこのメガフロートをバベルと命名してＩＳ・空軍・海軍の基地が集約された軍事要塞に作り替えたのだ。その目的は太平洋より相対する諸外国への防波堤。故に最前線基地、なのだった。
ナターシャは親友と自らに戦う意味、復讐というものを与えてくれた上司を羨ましがりながら、しかし顔を引き締める。

「いえ、そんな事を言っている場合ではないわ」

彼女が直ぐに真面目になり気を引き締めるのは理由があった。それは二つある。

一つはこのバベル基地で開発が検討されている兵器に関する。その兵器とはＩＳコア、次元連結システムを利用した空中航行戦艦だ。現在の第三世代ＩＳまでの一番のネックは燃費の悪さとエネルギーに見合わない出力の低さだった。故にＩＳは実弾兵器以外の多武装化、汎用性、巨大化が思うように進まなかった。戦いにおいて原初より有利とされてきたのは大きさと堅さ、そして手数の多さである。今回検討されている空中航行戦艦はそのどれもを兼ね備え、さらにはＩＳ・戦闘機離着陸施設も取り付けられた傑作であった。技術水準的には十分に製造することが可能で、資本、人材ともにアメリカは十分過ぎるほど用意されていた。ここまで見ると魅力的で今すぐ製造が始まっているかと言うとそうでもないのだ。未だに製造ではなく検討のみが成されているのはＩＳコアが関係していた。先の銀の福音事件はＩＳコアネットワークを利用してハッキングが行われた銀の福音の意図的暴走が原因だった。それを鑑みるに今回のこの

戦艦もＩＳコアネットワークの干渉下におり、銀の福音の様にハッキングされて暴走したら目も当てられない。ＩＳコアは次元連結システムを作動させるための重要なパーツだ。空中航行戦艦を造るためには必ず用いなければならない。だからＩＳコアネットワークをアメリカ国内のＩＳのみで巡らせることが出来るか、が検討の題材になっているのだった。最も、次元連結システムを劣化といえど製造できたのだから不可能ではないだろうが。

だが、ナターシャが懸念するべきは別にあった。それはバベル基地への襲撃であった。これは二つ目の懸念事項である亡国機業の活発化も関係してくるが、ナターシャは他国の介入を恐れていたのだ。このバベル基地は最前線基地であるにも関わらず空中航行戦艦のためにアメリカの有力な技術者が集っている。まさにこの状況で襲撃があり、技術者が死にでもしたらアメリカにとっての大損害である。さらにこの基地では量産型ゼオライマーだけでなく製造が検討されている新型次元連結システム搭載ＩＳの試作品も多く存在していた。亡国機業は試作品であろうと国際法で違反とされているリムーバを使用してＩＳ強奪を繰り返している。現にイタリア、フランス、イギリス、日本、スイスは計七機のＩＳを強奪されている。もし仮に敵に次元連結システムが渡ったら目もあてられない。故にナターシャは常に敵の動向を警戒しているのだった。

「あまり過敏に警戒し過ぎるのも判断を鈍らせるから良くはないのだけど、警戒するに越したことはないわ」

ナターシャはそう呟き、ＩＳ用の格納庫に向かう。その際にナターシャは官制にレーダー範囲の強化と対空防衛システムの予備起動を要請していた。中佐である彼女は量産型ゼオライマーの指揮とある程度の権限が与えられている。それを利用し、基地の防衛を迅速にさせていた。

「変な事態にはならないでよね……」

ナターシャは不安げに呟いて、基地の格納庫へむかった。

＊

『第一種戦闘配置、第一種戦闘配置。速やかに対空システムはミサイルの迎撃にあたれ』

「……面倒くさい事態になったか」

こんにちは、ナターシャ・ファイルスです。さっきまで炎天下の中、バベル基地の最終検査をしていたのに、もう直ぐに戦闘開始です。用心して対空システムを作動させてよかったと思う。私はレッドアラートが鳴り響く中、基地内の廊下を走り、司令部へと向かう。

「敵は！？」

「あぁ、ナターシャ中佐か。今、敵を急いで確認しているよ」

司令部に入るなり大声を出してしまったが、通信士達は集中してい

るのか私を諌めることはなかった。私と対応したのはこのバベル基地の実質上司のミュラー准将だ。往年のベテランであり、様々な戦果を挙げてきている人間である。

「敵ミサイル全弾破壊を確認。旧式なミサイルを使っているのをみると恐らく亡国機業でしょう」

「そうか……、今すぐミサイルの弾道から発射地点を割り出せ。それに亡国機業はリムーバとＩＳを使用して電撃作戦を仕掛けてくる可能性がある。量産型ゼオライマーは全機、次元連結システムを起動、全方位バリアを最大出力で張り、敵ＩＳと相対せよ」

『『了解！！』』

「隊の指揮権はファイルス中佐に委譲する。銀の福音を使用して事態の迎撃にあたれ」

「イエッサー！」

通信士の報告を聞いて最適な指示を直ぐ様飛ばすミュラー准将。私はそれを見て感嘆するとともに亡国機業に憤りを感じていた。准将に敬礼をして司令部を出て、廊下を駆け足で歩き、格納庫へと向かう。

「……亡国機業」

私が亡国機業に憤りを感じるのは彼女等もまた篠ノ之束と同類だからである。社会に不適合だから世界を破壊した天災の様に、亡国機業は現在の世界のルールを享受できないテロリストだ。世界に争いの火種を撒き散らし、世界を崩壊に導く。その実態は第二次大戦か

ら存在していたらしいが、そんなもの関係ない。いつから存在し、存在意義が奴らにあろうと、奴らはテロリストだ。

「……殲滅しなくては」

私はあの日決意したのだ。世界の規律、ルールを理解できず無意味な闘争と反抗を繰り返す存在を、不当な差別や区別をする存在を、何より幻想に生きるあの天災を、殲滅するのだと。エゴだというのは分かっている。神の身ではなくただの人間である私が、同じ人間を断罪する権利はどこにもない。エゴイズムこそが人間や世界を崩壊させているのも理解している。だが、私は銀の福音（あのこ）の翼をもぎ取ろうとした奴らが許せないのだった。

「……亡国機業」

私は再度、敵の名前を呟いた。

変わる世界？（後書き）

アンケートはまだ受け付けておりますが、今回の話を読めば判るように戦艦の件は作中でも保留という事になっています。でも、おそらくは戦艦を造ることにはなると思います。

次の話は初めてともいえる戦闘オンリー。銀の福音がラーゼフォンに見えてならないです。もしかして原作者狙った？

変わる世界？（前書き）

本日二回連続投稿！

今回で閑話は終了だと思います。次は何をネタにしようかな……

変わる世界？

『デルタワンより各機へ。敵ＩＳは日本製ＩＳ打鉄、アラクネが確認されている。対空ミサイルを射出した後、直ぐ様旋回、量産型ゼオライマー、銀の福音到着までの中継ぎをする。各機、健闘を祈る』

『『『了解！！』』』

アメリカの新造メガフロート基地バベルより四機の戦闘機が発艦した。四機の戦闘機は最高速度でメガフロートがあるアメリカ領内太平洋より敵ＩＳに向かう。

『敵ＩＳを捕捉。ミサイルを発射せよ』

デルタワンの指示により四機からアラクネ、打鉄に向かってミサイルが八基飛んでいく。アラクネは余裕を持って避けようとしたが、ミサイルはアラクネに当たる前に爆発、爆煙と破片を撒き散らす。

『ちっ、しゃらくせぇ！！』

アラクネの操縦者は爆煙の中に含まれるチャフにより乱れたレーダーを修正して戦闘機を破壊しようと機銃を乱射するが、その場には戦闘機は既に居らず、バベル基地へと飛び去っていった。アラクネはそれを追い掛けようとする、だが、

『……！　敵基地より高エネルギー反応！　荷電粒子砲です！』

『なんだと……！』

アラクネ達亡国機業が動きだす前に物凄いスピードで粒子ビームが飛来する。大気を焦がし、轟音をたてながら飛んできたものはある打鉄を掠めていく。打鉄のシールドエネルギーはそれで六分の一削られていた。

『くそっ！！　粒子ビームの情報なんて聞いてねぇぞ。ゼオライマーか？』

『いえ……、バベル基地に設置されている荷電粒子砲台『ダイダロス』と思われます』

『ＩＳに匹敵する破壊力を持った陸上兵器か……、アメリカめ』

アラクネ達は突然の電撃攻撃に足を止めてしまった。いや、それがアメリカの狙いであった。

『……！　隊長！！　海底より熱源反応……、アメリカの原子力潜水艦です！　数は四！』

『私たちを包囲するように……、まさか気化爆弾か！！』

突如、海底から姿を現した原子力潜水艦は上空に四つの爆弾を発射する。それは広域空間制圧を目的とした気化爆弾だった。

『隊長！！』

『くそっ！！　全機シールドエネルギーを最大出力に！！　凌ぎきるぞ！』

アラクネの操縦者が打鉄に指示した瞬間、ＩＳを囲むように四方か

ら気化爆弾の熱風が迫る。そして亡国機業のＩＳは爆風に包まれた。

＊

「気化弾頭炸裂、敵ＩＳ爆煙に包まれました。一時的にレーダーよりロスト」

「銀の福音を早急に発艦、量産型ゼオライマー五機による複合メイオウ攻撃をさせよ。出来る限り、敵ＩＳを捕える」

「敵ミサイルの弾道より敵基地を捕捉しましたが……」

「ふぅむ……、仕方ない、敵ＩＳは量産型ゼオライマーに相対させ、敵基地攻略は大陸弾道ミサイルによる施設制圧後、銀の福音により基地全体を制圧する。銀の福音、聞こえるか」

『はい、聞こえます』

「敵基地の場所が特定できた。中佐には敵基地制圧を行ってもらう」

『了解しました』

所変わりバベル基地。バベル基地の司令部では様々な情報が飛び交い、亡国機業のＩＳと相対していた。司令部の通信士達より一段高い位置に座るミュラー准将は飛び交う情報から最適な選択を選び、敵ＩＳを翻弄していた。

「敵基地はアリゾナ州の荒野に存在する。規模が小さい事から支部だと思われるが気を抜くな」

『了解しました。ナターシャ・ファイルス中佐、敵基地制圧の任、着任いたします』

「ファイルス中佐が発艦した三分後に大陸弾道ミサイルをアリゾナ州にある敵基地に向けて発射する。万が一打ち落とされぬよう、対空砲火の手を緩めるな。量産型ゼオライマー部隊はシーリン中尉が指揮をとれ」

『サーイエッサー！』

ミュラー准将の指示が通り、銀の福音はそのまま本国アリゾナ州に向けて音速で飛んでいき、それに追従するように大陸弾道ミサイルもアリゾナ州に向けて発射された。本国にも要請が飛んでいるため、近隣住民（荒野なので殆ど居ないが）の退避も済ませてある。

「敵ＩＳ一機鹵獲。アラクネ及び打鉄はユーラシア大陸方面に後退していきます」

「深追いはさせるな。量産型ゼオライマー部隊は敵ＩＳを持って撤退。ゼオライマー部隊は作戦を終了させろ」

銀の福音が発艦してまもなく、あらかじめ空中に布陣していた量産

型ゼオライマー部隊が敵ＩＳを一機捕えた。剥離剤（リムーバ）も全方位バリアの前では無力であり、気化弾頭によって手傷を負ったアラクネはすぐに撤退していった。量産型ゼオライマーは宙域を警戒しながらバベル基地へと降り立った。

「量産型ゼオライマー部隊着艦」

「レーダーによる敵影確認ありません」

「後は銀の福音が戻ってくるのみか」

ミュラー准将は通信士の言葉に余裕を持った笑みで呟いた。

＊

―後方より自軍大陸断道ミサイルが接近。……敵基地に着弾―

「……現時刻より敵基地制圧を開始する」

私は銀の福音の報告に耳を傾け、銀の福音の武装、銀の鐘（シルバー・ベル）を展開する。頭蓋部のみならず肘や膝にも小型の翼が展開されて、光り輝く。

「銀の鐘、最大出力」

―銀の鐘、最大出力で展開。エネルギー弾による基地施設制圧を開始します―

私はその場にとどまったまま、眼前のバイザーに現れたレーダーに映る敵基地の防衛システムや発電施設をロックオンしていく。瞬間、銀の鐘から無数のエネルギー弾及びエネルギー砲が発射される。右目端に映ったエネルギー量が一瞬減少したが、すぐに最大エネルギー量に戻る。次元連結システムから無限のエネルギーが供給されているからだ。私はさらに銀の福音に指令を出し、銀の鐘にエネルギーを供給していく。銀の福音はその場で嬉しそうにクルリと回り、ララララ、と歌うように声を上げた。瞬間、先程の攻撃の二倍以上のエネルギー弾が射出されて、基地が爆発していく。

―基地施設八割を破壊完了。残りは基地中央司令室です―

「……あそこに今回の黒幕が……」

銀の福音の報告を聞いて、基地の中央司令室を睨む。私の心の中に黒い気持ちが渦巻いていく。

「……殲滅、する」

―殲滅対象、基地中央司令室。メイオウ攻撃チャージ開始します―

私の呟きから銀の福音がメイオウ攻撃をチャージさせる。バイザーに発射シークエンスが表示され、頭蓋部の翼が大きく広がり、一段と輝く。

―チャージ完了まで、三……、二……、一……、完了。発射可能です―

そしてバイザーの中央にメイオウ攻撃という文字がキーとして現れる。私はそれを見つめ、

「メイオウ攻撃発射、全てを消し去ってやる」

メイオウ攻撃を発射した。基地中央司令室を爆心地にエネルギーと熱、光の奔流がドーム状に広がっていく。大気を焦がし、地面を焦土に変え、そして、

「作戦完了、帰投します」

その場には瓦礫すら残らず全て消滅した。

変わる世界？（前書き）

前回で閑話はおわるといったのに、まだ変わる世界編から抜け出せません……

書いていて楽しいからいいんですけど……

変わる世界？

「ＩＳ学園への視察だと？」

「あぁ、毎年この季節にＩＳ理事会立ち会いの元、国際条令や国の方針、ＩＳの情報開示が不可侵地帯で行われるのは知っているだろう？」

「あぁ」

時は８月。猛暑の過酷な暑さが日増しに酷くなりつつある、ある日、秋津マサトはワシントンＤＣにあるホワイトハウスにて大統領補佐官、国防総長とともに会合を行っていた。公式の物ではなく、会食をしてのモノゆえか秋津マサトも大統領補佐官も国防総長もラフな格好をしている。秋津マサトは話をするため布巾で口元を拭う。

「我らも毎年大統領とともに会合に赴くのだが、今年はアラスカではなくＩＳ学園で行われてな、君に護衛を頼みたいのだよ」

国防総長はマサトが布巾で口元を拭うのを確認してから切り出した。マサトは国防総長の言葉に眉根を寄せる。

「ふん、俺様は公式の立場では大佐、国防総長の言には断れない。護衛の任については喜んで着かせてもらおう」

マサトはどことなく満足そうに国防総長に言う。しかし、マサトは怪訝そうな顔をして、

「だが、なぜ護衛がいる？　不可侵地帯で他国の干渉はないはずだ。

そしてなぜ俺様なんだ？　俺様ではなくナターシャ・ファイルスやイーリス・コーリングがいるだろう」

「君が質問とは。おおよそ予想は付いているのだろう？　言ってみたまえ」

「……ふん」

質問を質問で返すな、と言外に睨むマサト。だが、国防総長はそれを気にすることもなくワインに口をつける。

「まず最初に護衛が俺様なのはイーリス・コーリングは南アメリカＩＳ連合とヒューストン基地で睨み合い、ナターシャ・ファイルスは太平洋諸外国との戦いの上で必要になるバベル基地での指揮で召集には応じれなかったから。護衛が必要なのは諸外国ではなく亡国機業を注意する必要があるからだな」

「正解だ。さすがマサト大佐だ」

「ふん」

マサトと国防総長が睨み合っているのを見つめる大統領補佐官。マサトはそれを知りながらも、さらに口を開く。

「そしてＩＳ学園で会合が行なわれるのは、アラスカで会合が行なわれた場合、アメリカが主導権を握る。それを恐れた諸外国が『対等』な立場で会合を行うため、だな」

「あぁ、私たちもそう踏んでいる」

マサトはまだ見ぬ他国の代表を見下すように冷たい目を自分の前に置かれているステーキに向ける。

「愚かな。今ごろアメリカと対等な位置に立てると幻想を抱いているとはな。アメリカに義理立てするつもりはないが、この俺様がいるのだ、奴らが追い付ける要因など一つもない」

そして彼はステーキに向けてナイフを思い切り振り下ろした。ナイフで一刀両断されたステーキはレアに焼かれていたのか血のように赤い肉汁を垂らす。

「だが、慢心するのは良くない。彼らが南アメリカＩＳ連合のように太平洋連合を組めば厄介極まりない存在になる」

「ふん、どうかな」

マサトは大統領補佐官の言葉に不敵に笑い、さらにステーキを賽の目状に切り裂いていく。

今、世界情勢は大きく動いていた。アメリカの急成長に亡国機業の活発化、技術革新が頻繁に繰り返され、ついに第二次イグニッション・プランに続く連合が生まれはじめたのだ。まずは南アメリカ諸国にメキシコ、周辺諸島を纏めた南アメリカＩＳ連合、通称『ＳＡＩＵ』、次にアフリカ諸国に中東を含めた中東アフリカ二国同盟、通称『ＭＥＡＬ』、そして日本、中国、ロシア、韓国、インドの五ヶ国とその周辺諸国で結成されたユーラシアＩＳ連合、通称『ＵＩＵ』。どれもイグニッション・プランの二番煎じ、三番煎じでしかなく、行っているのはＩＳの稼働データを含んだ技術情報共有で、戦争を起こすための軍事同盟ではないがそれは確実にある一国を追い求めるための一つの人類の可能性でもあった。しかし、マサトは賽の目にされたステーキをざくりとフォークで突き刺し、笑う。

「ふん、所詮蟻のようなちんけな存在が仮初めの蟻塚を築いただけだ。風雨という時間で自然に瓦解するような脆弱な存在でしかない。現に、足の引っ張りあいをしている愚かな連中ではないか」

「まあな」

しかしこれらの連合は利害関係もメリットもデメリットも鑑みず、ある一国を追い求めるためだけに造り出された踏み台でしかない。質で勝てないならば数。一昔前のアメリカを見ているようだった。

「奴らの今の体制ではこれ以上の技術革新は行われない。人を纏める上で必要な意識の統合と大義名分が足りないからな」

「ふん、そんなものは人を纏める上での前戯、媒体でしかない」

「それすらも足りていない、と言うことだよ」

求めるべきモノは決まっている。だが、それは末端の人間にまでは伝わらず、大義名分も脆弱であり、そして上の人間ですら意見のまとまりがない。その最低条件ですら満たされぬまま組まれた同盟、連合に意味はあるのだろうか。マサトは賽の目のステーキを見つめる。賽の目にされたステーキは三つ又の串に疎らに刺さっている。だが、刺さっているステーキはどれも大きさ、形が疎らだった。

「そして、そのような国はそれよりも大きな国に、」

———喰われる。

彼は、マサトはそう言い放ちフォークを口に含んだ。口の中でステ

ーキを引き離し、噛み、咀嚼し、飲み込む。口から出てきたフォークには何も付いていなかった。そしてマサトはしかめっ面をして、

「不味い。やはり身も実益もないものを口に含むべきではないな」

そう呟き、フォークを机に置いて席を立つ。

「詳しくは食事後、改めて煮詰めるとする」

そして、マサトは部屋を出ていった。大統領補佐官と国防総長は彼の後ろ姿を見、そしてステーキ皿に乗ったステーキを見る。賽の目にされた肉は全て転けて、どれも血のように赤い肉汁を流していた。

変わる世界？（前書き）

今回は難産だった。

変にこじつけているところがありますが、気にしないでください

変わる世界？

ＩＳ学園。次代を担うＩＳ操縦者を育成する唯一の高等学校であり、敷地は何者も干渉できない不可侵地帯。日本に存在し、各国の高校生が一同に集う。しかし、ＩＳ学園の存在に必要な経費の八割は日本政府が負担し、ＩＳでもっとも利益をえている日本がもっとも負債を抱えている状態であった。その理由が世界に二人目の日本の男性操縦者なのであるから笑い話にはならない。

「これがＩＳ学園か。ふん、金の無駄遣いとはこの事か」

「まぁ、そういってやるな。今はアメリカも少しは負担してやっている。日本の財政悪化も少しは和らぐだろうよ」

「ふん、一番借りを作りたくない相手に作ってしまったな、日本。やはり今の日本の政治家は人とは思えないほど愚かだな」

「今はそのような話は止めておいたほうがいい。ＩＳ理事会の目は免れておいた方がいいからな」

「ふん」

秋津マサトは鼻を鳴らしてＩＳ学園の敷地を踏み締める。その前には大統領補佐官、国防総長、そして黒服のＳＰが四方を固めて守る大統領がいた。大統領の警護にはアメリカのやり手ＳＰが何人もついており、万が一がない限り、それは鉄壁と言っても過言ではなかった。

「まぁ、いい。どうせくだらん事をうだうだと話し合うのみなのだ

ろう？　愚かな人間の足を引っ張りあう姿を見るのも、良いかも知れんな」

マサトはそう呟き、ＩＳ学園の校舎を睨みながら口角を吊り上げた。

＊

Ｓｉｄｅシャルロット

一昨日からＩＳ学園は騒然としていた。教員も生徒も誰もがあちこちを走り回り、そして誰もがこの前代未聞の事態を重く受け止めていた。

定期ＩＳ管理報告。

一般的にそのように呼ばれている、世界各国の代表が集いＩＳ関連の事項をＩＳ理事会の監修のもと報告するものだ。各国が一年間の間に出した成果を条約に従い出しあうだけなのだが、今年のそれはいつもと違い、酷く重々しいものだ。今年に勃発した銀の福音事件に、亡国機業、そして篠ノ之束。ＩＳ関連の情報を共有するためにこれほどの事例を検討しなければならない。そして今年は一般傍聴を実施していた。これは一般人……、といってもＩＳ学園の人間だ

が、その人間にも定期ＩＳ管理報告を聞いてもらうのだ。建前は大人の世界と世界の情勢を客観的に見せること、しかし本音はアメリカの失言による失脚を狙い、アメリカへの風評を悪くする事だ。アメリカが失脚すればＩＳ理事会及び、日本などの国々の評判を一定水準に戻すことが出来る。

「……アメリカは……、秋津マサトはそんなに甘くないと思うけどね」

しかし、一度アメリカと、秋津マサトと対峙した私には分かる。秋津マサトはＩＳ理事会の後手に回るようなへまはしない。彼に付け入る隙などないのだ。だから、私は今回の定期ＩＳ管理報告は自国の方針を聞いたら、秋津マサトを注目するとしよう。出席名簿に護衛として名を列ねていたから出席するのだし。

「シャルロット」

「ん？　あ、ラウラちゃん。どうしたの、こんなところで」

「シャルロットの姿が見えなかったからな。私が探しに来たのだ」

「監視があるから、無用に歩き回るのは得策じゃないよ」

手に持っている資料をパラパラと捲って目を通していると、ラウラちゃんが私の後ろにたっていた。私たちには先の事件の後、ＩＳ理事会から監視を付けられている。あまり私たちが固まって話をするのは駄目なのだ。

「いや、ＩＳ理事会から達しがあったようでな。私たちが今回の定期ＩＳ管理報告を傍聴する場合、私達五人は一部屋に纏められるら

しいからな。今は気にすることはない」

「……」

もしかして、ＩＳ理事会は馬鹿なんじゃないだろうか。私達には今はＩＳの待機状態のアクセサリーは渡されていないけど、一応軍属を一定期間修了した人間だ。ＩＳ理事会の監視員のような一般人に遅れを取るとは思えないし、五人いればＩＳの奪還が簡単だとなぜ気付かないのだろうか。

「どうした？　シャルロット」

「……ううん、何でもない。部屋に行こっか」

「あぁ」

私はＩＳ理事会に疑問を持ちながら皆が待っているだろう部屋に向かう。

――まだ、情報は少ない。確定することはまだ、無理でも一つだけ分かることがある

今回の定期ＩＳ管理報告は、どうもきな臭い――

私はそう呟いて窓の外を見る。窓の向こうには今回の定期ＩＳ管理報告の会場となっている第一アリーナがあった。

＊

「これより定期ＩＳ管理報告を行います」

会議用に特設されたＩＳ学園第一アリーナにて、議会委員が壇上に上がり声を上げる。壇上は他の位置より随分と高い位置にあり、各国代表及び護衛はそれぞれの席に座っていた。壇上より後ろにはＩＳ理事会の重鎮たち、会場の管理室には学園の教諭が詰めていた。

「まずは最近になって頭角を表してきた亡国機業について各国より何かありましたら報告を」

壇上に上がった人間が声を上げると、各国代表から数々の声が出る。

「我が国はＢＴ兵器搭載型ＩＳ『サイレント・ゼフィルス』を強奪された」

「我が国は打鉄を」

まず最初に報告をしたのはイギリスと日本の代表だ。イギリスのサイレント・ゼフィルスはブルー・ティアーズに続く最新鋭機であるが剥離剤によって奪取されている。日本の打鉄は各研究所が襲撃されて盗まれていた。その他にも新たにロシア、ドイツ等の新生ＩＳ連合所属国からも声が上がる。どれも量産機ばかりだが、剥離剤によって奪取されていた。その数は十数機に及ぶ。

「アメリカ政府代表は、何かありませんか？」

その中で何も話さないアメリカ大統領にＩＳ理事会は声をかける。大統領は立ち上がり、壇上を見た。

「我が国は新設メガフロート基地『バベル』を亡国機業の物と思われるミサイル、ＩＳ七機に襲撃された。しかし、我らはこれを航空戦力、海上戦力、ＩＳ五機によって撃退。さらには一機のＩＳの奪還を成功させた」

大統領は手元の資料をチラッと見ながら話をする。ポーカーフェイスが上手く、カリスマ性と話術だけはある大統領の言葉は海上を震撼させた。ミュラー准将や男性航空戦闘機パイロット、原子力潜水艦を巧みに使う戦術を記録した映像により信憑性が増したそれにより、他国は唖然としたのだ。

「そして、我らは支部ではあるが亡国機業の基地を特定、これを殲滅した」

最後の大統領の言葉に各国代表は口々に感嘆の声を上げた。それに満足した大統領は席に座るが、後ろに座っていた大統領補佐官、国防総長、秋津マサトは無表情に撤していた。

「我がアメリカが奪還した打鉄は日本政府へと返上する。ＩＳ理事会にはその仲介役をしてほしいのだが」

「え……、あぁ、後日公式の場でＩＳ返上を行います」

そして、唖然としていたのは各国代表のみではなくＩＳ理事会もだった。各国のＩＳが亡国機業に手を拱いている中、アメリカは見事それを撃退したのだ。それもＩＳを使わない戦法で。予想外の展開

に思考回路が停止したのだろう。未だに信じられないような顔をして書類にあらゆる事項を書いていく。秋津マサトはそれを見て初めて、嘲るように笑った。

＊

「……上手いわね」

鈴が呟いた。それに私は賛同するように頷く。

「ＩＳのみならず航空戦力、海上戦力を巧みに使い、ＩＳのみでは埋まらない穴を埋める。その上で成果を上げて日本にまた恩を売る。……何枚も上手だな」

ラウラちゃんの呟きにも全員が揃って首を縦に振った。私達は五人揃って今回の定期ＩＳ管理報告を見ていた。画面一杯に映るのはＩＳ理事会の役員でも、私達の祖国の代表でもなく、アメリカ一色であった。アメリカのやり方は正当性があり、非の打ち所のない綿密な作戦を立てていた。

「合理的であるけど、なんだか嫌な気分ね」

「そうですわね。軍事ＩＳ一辺倒の国が被害を被り、旧世代の軍事兵器を使う国が利益を得る。それは普通逆の立場であって然るべきですわ」

しかし、私達の表情は暗いままだ。昔からＩＳを倒すにはＩＳを当てるしかない、と言われていた。だけど、今回の事件でそれが揺らいだ。ＩＳを倒すのは何もＩＳではない、と。旧来の兵器でも戦い方でＩＳに大きなダメージを与えられるし、何より男性雇用が増えて軍需で経済が回るから実際はこの戦いの方が良いのかもしれない。

「女が強くて、男が弱い。今の考え方だけど、それが傾いた。それだけで世界はこうも変わるとは」

女が台頭してきた世界が破壊されつつある。もしかしたら男のＩＳ操縦者などはきっかけとしてはきっと些末な事で、今は非常にどうでも良いものに成り果てているのかもしれない。つまりは……、ここでのアメリカのアピールで一夏の処遇が粗方決まるということ……、

「……まさか！！」

「どうした、デュノア！！」

「これは、一夏が危ないかもしれない！！」

僕の予想が正しければ、秋津マサトはこの場でＩＳの優位性の皆無と、自分とは違う男のＩＳ操縦者が引き起こす弊害を提出して、ＩＳ優位の世界を、本格的に潰す気だ。それによるメリットはアメリカがさらに世界の強者として伸し上がること。他国にはデメリットしかない。ＩＳに金を使いすぎだ他国に他の軍事を整備する余裕な

んてない。唯一アメリカは法整備も資本も何もかもが揃っている。
そして、邪魔者は……、
「アメリカにはいらない考え無しの一夏を……、殺す気だ」

変わる世界？（前書き）

今回はシャルロット死亡フラグ、の巻です。

後、初めて冥王様視点を入れてみました。

変わる世界？

「どうゆうことよ」

鈴が聞いてくる。僕はそれに頷いて、

「今回の定期ＩＳ管理報告は何だか匂うと思っていたんだよ。そこで考えてみたんだ。秋津マサトは何がしたいのか、ってね」

「……うん、それで？」

「秋津マサトがしたいのは恐らくもっと磐石で、確固とした地位と権力を得ることだと思ったんだよ」

「それがどうして一夏を殺すことに繋がるんだ？」

「秋津マサトはそれを得るためにアメリカの正当性をアピールすると共に、一夏という二人目のＩＳ操縦者を殺して一夏という弊害を無くしておきたいんだよ。僕のはあくまで推論でしかないけどね。」

僕がそう言うと、ラウラちゃんが顔を顰めながら、

「確かにあの秋津マサトなら有り得るかもしれないが、秋津マサトはそこまでして何がしたいんだ？」

ラウラちゃんの言葉に全員が頷いた。秋津マサトは私的な事で行動を起こさない。だから何が目的かを推理しているんだ。

「僕はＩＳ優位の世界を壊すことだと思う」

そして、僕が自分の意見を言うと皆が目を見開いた。

「そっか……、ＩＳ優位の世界が壊れて一番得をするのはアメリカだ」

「アメリカ以外の国はＩＳ以外の軍需が整っていない。亡国機業やアメリカからの進攻を止めるための武装を得るには敵であるアメリカから軍需を買うしかない。アメリカはさらに軍需が回り、経済と地位が上がるのか」

僕が考えていた事を皆が理解し、さらに目を見開いた。そして、顔を青ざめさせる。

「その時に不祥事を起こした男性ＩＳ操縦者と同じような存在がいることがあれば世界の世論はアメリカを低く見る」

「それを回避するために、一夏を殺して二人目のＩＳ操縦者を無かったことにするか、差を確定させるのですわね」

皆が口々に推論を言っていく。ただの推論であるが、秋津マサトの事を考慮に入れて考えた高確率の推論だと思う。

――そして、ここに至った皆の考えは手に取るようにわかる。

「……ねぇ、皆。

――一夏を助けにいこう」

だから、私はこういった。アメリカの、秋津マサトの好きにはさせれないから。

＊

――馬鹿どもめが

俺は耳のイヤホンから聞こえてくるこの会場に潜入しているＣＩＡの報告に内心ほくそ笑む。

――やはり動きだしたか、屑共（代表候補生）。愚かだな、やはりＣＩＡの報告はこうだ。ひとまとめにされていた代表候補生が警備を振り切り、ＩＳが保管されている格納庫に向かっているというものだ。

――くくく、予定の範囲内だ

俺は他の人間に見えぬよう、口角を吊り上げる。今回の定期ＩＳ管理報告、ＩＳ理事会の浅はかな策略が働いている事は予想の範囲内だった。事前に蒔いていたＣＩＡの報告にもＩＳ理事会の役員の不自然な会合があったことや、クラッキングによる裏付けからの確定的な情報だった。俺はそれを利用させてもらった。奴らはアメリカを利用して地位を上げるつもりだ、ならば俺はそれを利用して、こ

の際だから邪魔な人間を消すことにする。

――――それが貴様らだ、屑共（代表候補生）

俺は再度口角を吊り上げて、にやりと笑う。

精々無様にあらがえよ。屑共が。

＊

ＣＩＡ報告。

・五人の代表候補生がアリーナの管理室から飛び出し、警備員を振り切り、ＩＳ保管庫に。ＩＳを手にして、外へと飛び出した。

・同時に亡国機業がＩＳ学園へ襲来。五人の代表候補生と亡国機業相対にＩＳ理事会直属国連ＩＳ軍が出動するも、撤退。

・亡国機業が天のゼオライマーに剥離剤を使おうとする。

故に……、天のゼオライマー及び秋津マサトが国際法に則り、五人の代表候補生、亡国機業をテロリストと認定。報復に出撃する。

変わる世界？（後書き）

次回は漸く代表候補生粛正及び世界の本格的な破壊を。

楽しみです、自分も書くのが。

変わる世界、そして世は冥府に（前書き）

今回で一区切りです。

若干、『こんなのでいいのか』という気持ちがありますが、一応連続投稿です。

中傷ではなく、作品に対しての批判ならどんどんと申し付けてください。

変わる世界、そして世は冥府に

「ふん、馬鹿が」

青い晴天の空。その空に七機のＩＳが飛んでいた。五機はＩＳ学園に通う代表候補生のもの、一機は亡国機業のＩＳ『アラクネ』、そして最後の一機は天のゼオライマーだ。七機のＩＳは三竦みの状態で滞空していた。

「貴様はっ！！　秋津マサト！！」

紅椿の操縦者、篠ノ之箒がＩＳを展開して上空に飛んできたマサトを見て睨む。同時に四機のＩＳが彼を睨んだ。

『君たち！　何をやっている！！　直ぐに降りてくるんだ！！』

彼らの足下の第一アリーナに詰めていた教師陣が代表候補生に向けて注意を飛ばす。彼らの祖国の代表は顔を青ざめさせてモニターを見ていた。アメリカの代表はどこ吹く風とモニターを無表情で見つめていた。

「僕達は、こんなところで止まれないんです！！」

しかし、ラファール・リバイヴを展開したシャルロットは教師陣の注意を無視して重機関銃『ガルム』を秋津マサトに向けて構えた。同時にこのチャンスを生かすべく、とアラクネも多脚の一つをゼオライマーに向けた。

「ふん、考え無しのゴミ共めが。この俺様に勝てると思っているの

か！！！」

マサトはそれを見て口角を吊り上げて、ゼオライマーを彼女等に向けた。そして、

「塵一つ残さず、消滅させてやる」

エネルギーの波が膨大な質量と共に溢れ出た。

＊

「ふん、甘いわ」

ゼオライマーに向けて一条のレーザーが迫る。しかし、それはゼオライマーの全方位バリアによって防がれた。

「くっ、堅すぎますわ！」

レーザーを放ったセシリアはレーザーライフルを構えたまま呟いた。彼女の周りを極太の粒子ビームが通り過ぎる中、細かく制動を行い、避けていく。

「まずはあの厄介なバリアを破らねば！」

「あたしの圧縮空気砲じゃ厳しいわね……」

「私がなんとかする！！」

紅椿を駆る箒が二振りの刀を構えてゼオライマーに向けて猛進する。そのスピードは音速に近いが、ゼオライマーはしかし、それを見切って刀を掴んだ。

「くっ……！！」

「甘いと、言っているだろうが！！」

マサトは二振りの刀を掴んだまま、握力を上げていき、そして、

「消えろ！！！」

刀を圧し折った。

「んな！！」

箒が驚く中、マサトはゼオライマーを制動させて、右足を後ろに引く。

「死ね！」

そして右足を回し蹴りで振り抜いた。

「ぐっ……！」

ゼオライマーの右足にはバリアが張られておりＩＳのシールドバリアを打ち砕いて脇腹に刺さる。箒は轟音をたてながら空中を飛んでいくが、なんとか態勢を立て直す。

「てめぇが、死になぁ！！！」

その隙をついてゼオライマーの背後から尖った脚を突こうとアラクネが突撃する。しかし、マサトは無言のまま回し蹴りによる反動を殺さぬまま反転、カウンター気味にアラクネの胴体を拳で殴る。

「がはぁ……！」

拳の衝撃はアラクネを貫いて、中の人間にまで影響を与えた。アラクネが吹き飛ぶ中、五人は秋津マサトを睨みながら相対していた。

「……手強いわね」

「強すぎる！！」

五人の様子は開戦前と違いボロボロになっていた。紅椿の刀は両方無くなり、ラファールの銃機は三分の二まで消えて、甲龍の双天牙月はボロボロに、シュバルツェア・レーゲンの高射滑腔砲は蹴りぬかれて、ブルー・ティアーズのビットは全て打ち落とされていた。しかし、ボロボロな彼女達には一様に共通点があった。

「ボロボロだけど……」

「シールドエネルギーはそんなに減っていない……」

そう、アラクネを含めた彼女等のＩＳのシールドエネルギーは百も減っていなかった。

「舐められている、か」

ラウラが呟く。同時に彼女等は今ごろ目の前で相対している秋津マサトに恐怖した。六機のＩＳを相手に圧倒する冥王に戦慄を覚えた。

「だが、ここで逃げれば一夏が……」

彼女等はしかし、箒の言葉で気持ちを奮い立たせてそれぞれの獲物を取る。アラクネは剥離剤を切らしたため、多脚を八本全てゼオライマーに向ける。しかし、マサトはモニターを見ながら呟いた。

「……そろそろ、か」

瞬間、

『世界各国、今の人生を謳歌しているだろう皆さんに言いたいことがある。私の話を聞いていただけないだろうか。……』

世界中のモニターというモニター、空中モニターにアメリカ大統領の顔が映った。

＊

『皆さんに一つ聞いてもらいたいことがある。それは今、ＩＳ学園で起きている事件についてである。私たちは今日、毎年行われている定期ＩＳ管理報告というＩＳ理事会が仲介として行われる会議に会場であるＩＳ学園に来ていた。我々にたいして、ゼオライマーの情報開示と亡国機業の対策についてを求められたからだ。我々はできうる限りの情報を携えてこの場に来た。……』

「これは……！！」

空中に映るアメリカ大統領の顔。演説台に立ち、話し掛けているのだ。

「ふん、漸くか……」

六人のＩＳ操縦者が何事かと驚く中、マサトはにやりと六人を見て笑う。

『しかし、我々を待ち受けていたのは学園に通う〝他国〟のＩＳ操縦者による攻撃である。彼女等はいわれもない罪を私たちアメリカに押しつけて私たちに無差別に攻撃してきた』

全世界に放映される悲痛な表情をした大統領の言葉。

『我々は一つの情報を得ている。それはＩＳ理事会の画策である。彼らはＩＳによって技術力、資本を高めている我らの利益を掠めようと我らの地位をいわれもない罪で低くし、陥れようとしていた。……』

同時に映し出されるのはＩＳ理事会が秘密裏に交わしていた書状だ。アメリカ大統領は決して地位を上げた、等の高圧的な言葉をけして使わない。世論の同情を得るためだ。

『我々は悲しみに暮れている。本来ＩＳを正しい使い方に導くはずのＩＳ理事会が、よりにもよってＩＳを使用する未来ある子供たちの前でＩＳで悪事を働こうとしていたことを。そして、未来ある子供たちをテロ行為に導いたことを。……』

「……っ！！！　まさか！！」

アメリカ大統領の言葉に何かを気付いたシャルロットは秋津マサトを見やり叫んだ。秋津マサトはにやりと笑い、彼女等を見た。

「漸く気が付いたか、屑共」

「まさか、私たちが行動する事を知って……！」

「ふん、大変だったぞ。貴様らを騙すためにアメリカをも騙していたのだからな」

マサトはすべてを予想の中に入れていた。理論的に事を考察し、対策をたてる彼は理論的が故に、不確定の行動を起こす恋慕を考察に入れていた。そして、無用な混乱をアメリカ大統領に与えるのを避けるために、この予想を黙り、そして自らで動いていた。ＣＩＡを五人の監視にあて、裏付けを取らせていたのだ。そして、彼女等が動いたと同時に大統領補佐官に大統領が演説するシナリオを書かせて、自らはその時間稼ぎに六機のＩＳを食い止めていたのだ。だから武装破壊という殺人ではなく制圧を目的とした戦いをし、後に世

論を獲得しやすくしていたのだ。

『我々はこの機に乗じて攻めてきた亡国機業、テロ行為を働いた五ヶ国のＩＳ操縦者が所属する国、そして我々を嵌めて不当な利益を上げようとしたＩＳ理事会に対して徹底抗戦をすることをここに宣言する』

そして、他国に対して大義名分も立場も有利な状態のまま、『戦争』への火蓋が切っておろされた。

「貴様らが引き起こした行いの重さを思い知るがいい」

同時に銀の福音が大統領護衛のためにマサトの背後から音速を越えて、轟音を立てながら第一アリーナに飛んでいった。

恥と外聞と、戦争と（前書き）

今回も難産だった。

一夏、なんか違うかも……？

恥と外聞と、戦争と

人間は理論的に行動する動物であるか、というのは誰もが一度は考えた事がある題材であろう。だがこの題材はしかし、結局はシチュエーションによって結果が変わるものだといえる。

確かに理論的に、打算的に、倫理的に人間は行動している。常に人の表情を伺い、何が得で何が損かを計算し、殺人は駄目だと偽善ぶる。

しかし、人間は本当に理論的に行動する動物なのか。先程も言ったようにこれはその人間が対面する状況によって変わってくる。突発的に憤怒し殺人、又は執念から計画的に殺人、何も考えずに快楽的に殺人。殺人は駄目だと偽善ぶっていた人間ですら、対面した現実に打ち拉がれ殺人、強盗、拉致、自殺に追い込まれていく。

それは恋慕によっても影響される。

愛する人間のためにテロ行為を働く人間がいるのだ。恋愛感情というのは何を起こすか分からない。そしてそれを観測し、理論の中に組み込める人間は、恋愛感情というのを、知らない人間に違いなかった。

時はアメリカが世界に宣戦布告してから一週間経った頃だった。

＊

「織斑一夏」

声が聞こえる。暗い暗い部屋、明かりは有るものの部屋全体を照らす事はなく、窓も無い鉄格子によって閉ざされた部屋に俺は閉じ込められていた。

今から二ヵ月前に、ある事件で千冬ねえの命令を無視して国際法に抵触どころか、国際法の全く逆の行動をしてＩＳ理事会によって裁判にかけられて三ヶ月の監禁を言い渡された。反論するもこちらにしか非がなく、アメリカの法に照らせば極刑は免れないらしかった。

許せなかった、束さんを犯罪者呼ばわりする事を。

許せなかった、皆を屑呼ばわりする事を。

だから激情に任せてあの冥王に迫り、攻撃し、そして現実を見た。

――――ＩＳが兵器。考えてもみなかったが、アイツの言うとおりなのかもしれない。ＩＳは所詮は兵器であり、絶対防御があろうと人を殺せてしまう。俺はその意味すら考えずに、その場しのぎでＩＳを操縦していた。ラウラの時も、無人ＩＳの時もスポーツの域を抜けていなかったから、そうやって腑抜けていたのだ。銀の福音に殺されかけて、ゼオライマーに圧倒されて、監禁されて、ようやくそれが分かった。

「甘かったのかもな」

外にいる人間が誰かは分からないけど、今は外の人間に返答できるほど落ち着けていない。独白が口を突いて出てくる。

「いつもその場で行き当たりばったり。歪な整備が行き届いた箱庭で犯罪行為を犯罪とも知らず、ＩＳについても深く考えず、一方の面からしか物事を見れない。人を犠牲にするということを知らず、そしてそのくせ正義を語り、その正義で知らず知らず犠牲を出している」

冷淡で家族すらも切り捨てるほど冷酷になれ、とは言わない。だが、責任のない正義はただの害悪でしかない。偽善的で傲慢で不遜で……。

「ほんっと……、この世界は前より生きにくいよ、――――束さん」

束さんはテロリスト。それに加担した千冬ねえもテロリスト。終には友達もテロリスト。世界は戦争。綱渡りも良いところ、一歩踏み外せば崖へまっ逆さま。

「ＩＳって、結局は束さんが面白半分に造った独善的な代物だもんな。今は法整備がされて、ルールのもとなら幸せを与える存在。だけど、意味を違えれば……」

――――それは、世界を住みにくくするただの兵器だ。

結局は革新的なＩＳも今までの核や戦闘機や、戦車といった兵器に違いないのだ。百式も紅椿もブルー・ティアーズも甲龍もラファール・リヴァイブもシュヴァルティア・レーゲンも銀の福音も、もちろん天のゼオライマーも。種類が違うだけで、それはただの兵器なのだ。

「秋津マサトって、とんだリアリストだな……」

生粋の現実主義者。政治家向きで冷淡で非情で冷酷で残酷で……。それでいて、一番人間をしている。

「一（大切なもの）を捨て、九（国民）を救う。俺にはそんなの出来ねぇ。大切なものは大切だし、割り切る事なんて出来ない。なんせ、俺は高校生だ。自分の道は自分で切り開くもんだ」

そうさ、高校生だからアイツにはなれねぇ。だからって、自分の罪を正当化するつもりはない。罪と向き合って、そしてルールのもとあいつらを止めるんだ。

「そのためには勉強すべきだな。戦争までまだまだ時間はある。秋津マサトの好きにも、箒たちの好きにもさせねぇよ。戦争なんて悲しいこと、嫌だもんな」

さて、それならこんなとこでくよくよなんて出来ない。罪と向き合って、罪を償って……、

そして、幸せを掴むんだ。勿論秋津マサトの好きなルールのもとな。

「馬鹿は馬鹿なりに、屑は屑なりに考えて行動するんだよ」

＊

アメリカはついにアラスカを放棄。地球大統領府、国際連合所属のＩＳ理事会と完全に敵対して、カナダと提携、北アメリカ・カナダ合衆国を作る。軍事、企業、国の垣根を超えた組織となる。

日本は自衛隊とＩＳ部隊による新たなる軍を形成。憲法第九条を無視した強行だったが、日本の政治家の英断とも言える。

ヨーロッパは第二次イグニッション・プランの加入国にイギリス、ドイツ、イタリアの他にフランス、オランダ、スペイン、オーストリア、スウェーデン、ギリシャを加入させさらなる軍事を強固のものにした。

南アメリカ諸国にメキシコ、周辺諸島を纏めた南アメリカＩＳ連合、通称『ＳＡＩＵ』は北アメリカ・カナダ合衆国との睨み合いを強めた。

次にアフリカ諸国に中東を含めた中東アフリカ二国同盟、通称『ＭＥＡＬ』は戦争へ不参加。

そして日本、中国、ロシア、韓国、インドの五ヶ国とその周辺諸国

で結成されたユーラシアＩＳ連合、通称『ＵＩＵ』はロシアは戦争へ不参加を表明するものの日本への技術援助、資金援助を開始。しかし、更識家による日本とロシアの繋がりは強く、ロシアも戦争へ参加する可能性も。

その他小国、オセアニア連合は戦争を見守る態勢に入った。

ついに、戦争へのカウントダウンが始まった。

開戦（前書き）

正直この話がある必要はあるのか、と思いますが一応投稿。
作中に出てくる兵器はモデルがありますが、ＩＳ世界の科学力なら
あっても可笑しくない程度にしてあります。人型ロボットとか変形
戦闘機は出てきません

開戦

戦争。それは人類史上もっとも愚かな行為であり、動物的本能上もっとも正統的な行為である。
戦争にも様々な種類があり、直接戦闘のある熱い戦争、直接戦闘の無かった冷たい戦争など、細かく分類すれば多岐に渡る。その理由は戦争がもっとも愚かな交渉だから、なのかもしれない。

戦争において、もっとも重要なのは勿論資本、軍事、戦略、外交だ。それは常識的で一つも欠かすことの出来ないものに違いない。そして、それはＩＳがあったとしても常識的で不変の事実なのである。

＊

アメリカの軍事開発部。アメリカ陸軍及び空軍、海軍の新兵器を一手に開発する研究室だ。そこでは戦時下でも変わらず兵器が開発されていた。

例えばＩＳの粒子ビーム技術を流用した荷電粒子砲台『ダイダロス』が最たる例である。ＩＳの技術を余すところなく使い開発されたダ

イダロスは粒子ビームがＩＳを掠めただけでシールドエネルギーを六分の一削る程の高威力を誇った。チャージに三分以上かかるのを加味してもその性能は十分以上と言える。

このようにアメリカは現代兵器とＩＳの技術共有を進めていたのだ。ＩＳの武器規格と現代兵器の武器規格は現代兵器に合わせてもＩＳの性能を損なうだけで技術革新は期待できない。しかし、現代兵器を少しでもＩＳに近付けようとするのは大きな進歩であり技術革新は起こりえる。

アメリカはＩＳ優位の世界を破壊する事を掲げているが、ＩＳを使う事に意味を求めている。なのでＩＳを完全に撲滅する事はしない。単純にＩＳを絶対とし、他のモノが虐げられる世の中を変えたいだけなのである。だからＩＳで使えるものは余すことなく使うし、ＩＳも戦闘に使う。ＩＳは兵器であり、ＩＳ自身は造られたものである。使う人間によりその性質は様々なものに変わるのである。アメリカは大多数が傾倒している性質を正常に戻そうとしているのだった。

さて、そんなアメリカの理屈は強引な理由付けと宣戦布告、そしてＩＳ利益の減少などの理由により他国に受け容れられていない。しかしそれはアメリカ自身の隠れ蓑で、他国に理解されるのは戦争が終わってからでいいのだ。ＩＳ優位の世界を変えるのにもっとも有効で近道だったのが戦争であり、ちょうどそこに大義名分が転がってきたに過ぎない。他国にそれが理解されるのはまさしく戦争が終わってからになるのだろう。

話がそれたがアメリカの最たる研究施設、ヒューストン航空宇宙開発局とバベル基地ではそれぞれの分野を応用した兵器が開発されて

いた。

ヒューストン航空宇宙開発局からは本土制圧を高高度から行う超大型爆撃機が、バベル基地からはＩＳのマイクロミサイル技術を応用した航空制圧戦闘機の新武装がそれぞれ提出されていた。戦争が始まり、大きな費用がかかる航空戦艦は一時凍結になったものの、それを負って有り余る性能を実現した。

まずはヒューストンで開発された超大型爆撃機だが、名称を『スピリタス』という。戦闘機の凡そ十五倍以上の大きさを持ち、鈍重ながらも大型コンデンサを積み込み打ち出される超高圧電流砲は一条の雷のように都市を制圧できる。形状もステルス機の様に平べったく、電磁バリアとデコイによるステルス性能も高く、対ＩＳのハイパーセンサージャマーも搭載されていた。ＩＳのハイパーセンサーは人の視覚を大幅に延長し、広範囲にしたものだが、本来の人間の視覚との大きな誤差により認識が鈍くなる。そこをついて光の反射や視覚の死角を無意識に認識させるシステムが装備されていた。レーダーには巨体ゆえに映りやすいが、電磁バリアによりミサイルによるロックオンが不可能になっている。

性能は高いものの、コンデンサの都合上連続武装稼働時間は短いが、エンジンはＩＳよりも燃費が断然良かったりする。一番の問題はコストであると検討されている。

次にバベル基地で開発されているのは航空制圧戦闘機、有名なものならＦ－２２ラプターなどの新しい武装である。戦闘機とＩＳの最大の違いは機動力と火力だ。世界最速、世界最強と呼ばれる戦闘機であるラプターでも、白騎士事件の時には手も足も出ずに負けている。それは機動力の大きな差が関係している。

さすがにラプターに脚を付けるわけにもいかず、そのためには今以上の推進力があるジェットエンジンを造らなくてはいけない。それには時間がかかりすぎるため戦時下では不可能だ。そこで戦闘機はＩＳの火力に目を付けた。量子変換は無理でも小型で強力な兵器は多数ある。現にアメリカのＩＳメーカーの兵器は実弾系統が多く、マイクロミサイルや機銃などは戦闘機にも応用は可能であった。勿論、戦闘機という緻密な設計のもと造られたものに規格外の武装を付けるのは命取りだ。しかし、綿密な計算設計のもとにそれは可能になった。高火力で従来より小型のミサイルや機銃は十分にＩＳのシールドエネルギーを削るだけの威力だ。
また、海上基地ゆえに陸上兵器が少ないバベル基地だが、陸上兵器の開発も進み、今よりも巨大で高火力な戦車も造られている。ＩＳでは追い付かないような広範囲をカバーできる大多数の陸上兵器は脅威である。さらにはパワードスーツも鋭意製作中であり、それが実戦投入されれば多大な戦果を期待できるはずだ。

ＩＳというのは使い方が巧ければ巧いほど、飼い馴らせれば飼い馴らせるほどに有用な利益を生む。ＩＳのみではなく様々な観点から見ればＩＳに対抗しうる兵器も造れる可能性があるのだ。世界がそれを知るのは開戦してからのことだった。

＊

戦争が開戦したのは定期ＩＳ管理報告の三ヶ月後だった。開戦の日程がこれほど伸びたのはアメリカ・カナダ以外のＩＳ推進国の意思の違いと開戦準備の延長からだった。互いが互いに意思の違いから足を引っ張りあい、さらにはＩＳ学園に通っている生徒の自主避難にある。ＷＷ１、ＷＷ２での経験から戦力となりえる駒は自分のもとに置いておきたいのだ。ＩＳ学園は不可侵ゆえにそこに生徒が通う限り、手は出せないのだ。そうなれば戦力低下は否めない。そういった裏の腹の探り合いがあったから開戦が遅れたのだ。

しかし三ヶ月後、開戦の火蓋を切ったのはＳＡＩＵ（南アメリカＩＳ同盟）だった。メキシコ、ブラジル、チリ、アルゼンチンを中心とした同盟は三ヶ月の準備の後、メキシコに駐留していた陸軍とＩＳ同盟の全てのＩＳ十三による侵攻を開始したのだ。始めはメキシコ駐留軍のＩＳ三機によるヒューストン基地の攻撃だった。

ついに戦争が始まる。この戦争でアメリカは、篠ノ之束は、織斑姉弟は、世界は何を知り、何を思うのか。

開戦――陸軍（前書き）

連続投稿。
まだまだ序章です。

開戦――陸軍

メキシコ空軍との戦闘は未だに始まったばかりであるが、今までの戦争よりも早くに終了するだろうと予想が付けられていた。ＩＳの総数が決まっており、篠ノ之束がまだ介入してきていない状況ならば、ＩＳの総量＝戦力に換算される。つまりはＩＳ同士、ＩＳ対現代兵器でどちらかのＩＳが捕獲もしくは破壊された場合、戦力が無くなり戦争は鎮静化されるからだ。
その予想は外れる事はなく、この戦争にも当てはめられた。

アメリカ空軍対メキシコ空軍

＊

「デルタワンより各機。敵のＩＳがヒューストン、サンアンドレアへと接近している。我々は敵ＩＳへの陽動、スピリタス到着までの時間稼ぎをする」

アメリカ空軍ヒューストン基地。ヒューストン基地はメキシコからの先制攻撃に慌ただしく対応していた。滑走路からは何機もの戦闘機が離陸をしており、轟音が辺りを包んでいる。

「我らの機体には新兵器が搭載されている。実際なら何度ものテストを重ねてから実用化なのだが時間の都合上この戦闘でデータを収集する。生きて還ってこい」

『『『はっ！！』』』

そして、今まさに四機の防衛戦闘機が滑走路を走り離陸をした。離陸し、戦域に入った戦闘機は十三機。ついで、サンアンドレア基地から飛び立つのは量産型ゼオライマーだ。

『サンアンドレア基地官制よりゼオライマーへ。敵の戦力はＩＳが三機、陸上戦車が林間に十五、航空制圧戦闘機が十五機確認されています。戦域が狭いため味方への被害を最小限に押さえるために次元連結システムの使用は許可しますが、メイオウ攻撃は使用しないでください』

「……了解」

飛び立ったゼオライマーのパイロットは空中でバレルロールをしながら次元連結システムを作動させる。その顔には少し不満げな様相も浮かんでいるが、特に何も言わず戦域へ音速で飛んでいく。

「私たちアメリカに楯突いた後悔を、与えてあげる」

そのゼオライマーのパイロットの顔には凶悪な笑みが浮かんでいた。

＊

「……イーリス、出撃よ」

「わーってるよ」

所変わってヒューストン基地。そのＩＳ用の格納庫には軍医であるミレイナとイーリス少佐がいた。イーリスは目を瞑ったまま背中を壁に預けてたたずんでいる。ミレイナは空中モニターを見ながら心配そうに呟いた。しかしイーリスは、

「あたしは敵のＩＳを味方が引き付けている間に別動隊として敵駐留地の攻撃が任務だ。天の系譜ならすぐに追い付ける」

自らの腕に巻き付けられているリストバンドを触りながら言う。その顔はＩＳを信頼している安堵の表情があった。

「それでも時間にルーズなのはいけないし、戦場ではなにが起こるかわからないわ」

「それもわーってるよ」

ミレイナの苦言も飄々と躱してイーリスはバンドを触る。瞬間、光が格納庫を包み、

「だから、今から出撃するんだよ」
イーリスはＩＳ『天の系譜』に身を包んだ。
「ハイスピードバトルを可能にするＩＳだ。本来の戦争よりもずっとか早く終戦するだろうさ」
「……もう、全く。無事に帰ってきてね」
「あぁ」
天の系譜を見上げながらミレイナは言う。笑顔で返答したイーリスにミレイナは呆れたように笑った。

＊

戦闘はメキシコとアメリカの国境で行われた。
砲弾が飛びかい、あちこちで爆煙が上がる。
「これで三輌目……」
そしてそれは量産型ゼオライマーのいる場所でも起こった。―――

いや、ゼオライマーが起こした。ゼオライマーのマニュピレータの下にはひしゃげて黒煙を巻き上げるメキシコ陸軍の戦車だ。最新型であるが、ゼオライマーのDブレイクで破砕されたのだ。

「……後ろから敵戦車」

ゼオライマーが後ろに戦車をハイパーセンサーで感じ、後ろにエネルギー砲を放とうとした、その時、

「……！！　味方からの攻撃。凄い威力ね……」

砲弾が戦車の分厚い装甲を貫き戦車を破壊した。

「今回の戦争、どうやらすぐ終わりそうね……」

その様子を見たゼオライマーのパイロットはそう呟いた。

開戦――陸軍？（前書き）

まだまだ対メキシコは続きます。今回は半分戦車、半分ゼオライマーでお送りしております。

開戦――陸軍？

アメリカ陸軍から攻撃の轟音が響く。同時に林の木が薙ぎ倒されていく。そして爆発が遠くで起こった。アメリカ陸軍に最新配備された新型戦車の攻撃だ。

「ヒュウゥ……。やるねぇ、この最新戦車」

「……『ラーズグリーズ』。ＩＳに使われている大型ミサイルやバズーカ弾頭、艦載砲を発射できるようになった我がアメリカの最新戦車だ。旧式の戦車の装甲なんざ紙みたいなもんだ」

「ＩＳにもダメージを与えられるんだろ？　アメリカの希望の星だな」

アメリカのバベル基地で開発された最新戦車、『ラーズグリーズ』。従来の大型戦車よりも二回り以上大きな戦車だ。砲塔が長く、あらゆる砲弾を撃つことの出来る高性能なスペックを持ち合わせている。

「重いから沼地なんかには侵入できないし、コストパフォーマンス的にも採算が採れていないからどうかと思うがな」

「軍需で軍隊が採算とれたら逆に異常だぜ、それ。基地防衛には向いているから良いじゃねーか」

「まぁな」

この戦車は二人乗りで三人までならその大柄の図体らしく輸送が出来る。二人の操縦士はそれぞれ火器官制と操舵を担当していた。Ｉ

Ｓの高性能レーダーを利用しているためか、火器官制はなかなかのモノである。

「おっと、三時の方向に敵戦車発見だ。……どうやらブラジル陸軍の戦車らしいな」

「……徹甲榴弾で貫け」

「了解。それにしても最初十三輌しか居なかったくせにいきなり増えやがって……」

「敵のＩＳ部隊が苦戦しているからだろ？　奴さん、自分達の目的を見失ってねぇか？」

「あぁ、最初は偵察のつもりがバカスカやられて躍起になってんだろ？　目的を見失うようじゃ、ＳＡＩＵも地に落ちたな」

二人はＧＰＳや熱探知レーダーで見つけた敵機にロックオンし、砲塔を回転させ、砲塔に徹甲榴弾を装填した。

「ま、相手のことなんざ俺たちにはわからねぇ。俺たちの後ろには守るべき街と大切な国民がいるんだ。手加減なんざ出来ねぇさ」

「あぁ」

火器官制の人間は双眼鏡や各種機器で敵戦車までの最終的な狙いを目測で調節し、

「ま、死んで向こうで待ってな」

徹甲榴弾を発射した。

「……おぉ、相変わらずすげぇ威力だ」

徹甲榴弾は敵の戦車に突き刺さり、突き破り爆散した。火器官制の双眼鏡の先ではバラバラな破片と成り果てた戦車が黒煙を吹き出していた。

「……いい風だな」

火器官制はハッチを開いて頬を撫でた熱風にそういった。

＊

「これで八輌……。数が多すぎる……」

所変わってアメリカテキサス州の西海岸側。小高い丘にサバナ気候の入り混じった地帯に一個中隊程度の敵戦車が疾走していた。それを一輌ずつ破砕していく量産型ゼオライマー。彼女の顔には苦悶の表情が現われていた。

「メイオウ攻撃が使えないのは、きつい……！！」

絶えず飛んでくる砲弾を全方位バリアで防ぎながらエネルギー砲を放つ。黄色のエネルギー砲は地面を抉りながら突き進み戦車を凪ぎ払う。しかし、それでも砲弾は途絶えることはない。

「しつこい……！！」

また、手の甲に埋め込まれた光球にエネルギーを蓄めていく。光球が光り輝き、そして、

「死ねぇ！！」

放つ。だが、

「そうはさせないわ！」

「敵ＩＳの攻撃…！？　ちっ……」

突如とした上空からのレーザー攻撃にゼオライマーはエネルギー放出を中断。急速旋回をする。レーザーは地面に着弾しただけだったが、ゼオライマーの全方位バリアに一瞬の揺らぎが生まれた。それにより、ゼオライマーの装甲に傷が付く。それは、ゼオライマーのパイロットを動揺させるのには事欠かなかった。

「……ざけるなよ」

彼女の瞳には涙が映り、歯を、唇を噛みしめ血を流す。拳は強く握られ過ぎて装甲が破砕しかけていた。

「ふざけるなよぉぉぉぉ！！！」

「「「！！！！」」」

三機の敵ＩＳパイロットは急に豹変したゼオライマーのパイロットの様子に驚き、目を見開く。しかし、それすらも気にせずゼオライマーのパイロットは憤怒の色を隠さず、三機のＩＳに突貫した。

「私の、秋津大佐から貰った大切なＩＳに、傷を付けてさぁぁぁ！！」

「くっ、総員散開！！」

「「了解！！」

ただならぬ雰囲気に圧された三機は三方向に散開していく。何故、彼女があれほどまでに豹変したのか。それは以前、秋津マサトがヒューストンに居たのに関係する。秋津マサトはアメリカの目標とされる人間だ。マサトの部下には勿論恋情を持つ人間も少なからず存在する。その恋情が度を超す人間がいてもおかしくない。彼女もその一人なのだ。自分と秋津マサトをつなぐファクター。それに傷が付けられては怒るのも無理はなかった。

「死ねよぉぉぉ！！！」

彼女は次元連結システムの全開を持ってしてレーザーを放った存在にＤブレイクを行う。

「ぐぁ！！」

Ｄブレイクによりシールドバリアは破壊されて、敵量産ＩＳの腹に拳が突き刺さる。中に乗っているパイロットはその衝撃に顔を顰める。だが、気を保ってしまった。

「落ちろぉぉぉ！！」

拳による反動を制動に変えて上段後ろ右回し蹴りを敵ＩＳの顔に突き刺さる。絶対防御は発生したものの咄嗟のことでＰＩＣが発生せず、地面に轟音をたてながら落下し、小規模のクレーターをつくる。

「はぁぁぁぁぁ！！！」

轟音をたてて落ちていくＩＳに追撃をかけるゼオライマー。彼女は敵ＩＳに馬乗りになり左手で首をしめ、右手で彼女の顔を殴る。

「ぐう……、うぅ……」

苦しそうに顔を顰める敵ＩＳパイロットに気にすることもなく拳を振り下ろすゼオライマー。その姿は悪魔を思わせた。

「苦しいだろ！？　私もそれぐらい苦しいんだ！！　アンタは私的にも戦争的にも、殺してやる！！」

「……！！」

ゼオライマーのパイロットの凶悪な笑みに迫力、言葉のなかに含まれている『殺す』、という単語に目を見開いた敵ＩＳのパイロットはＩＳの本体ダメージがＤを越えたこともあり、自己防衛から気絶した。それを凶悪な笑みを浮かべたゼオライマーのパイロットは首を掴んだまま持ち上げ、首を締める手の力をさらにあげていく。

「隊長！？」

「隊長から手を離せ！！」

戦争において死は身近に存在する。ＩＳパイロットながらアメリカでマサトの罵詈雑言を受けて、訓練で死ぬ思いをしてきたゼオライマーのパイロットと戦争は無縁だと覚悟を決めていないメキシコのＩＳパイロットでは胆力が違った。ゼオライマーのパイロットは殺す気で首に力を入れていく。

「隊長から手を離せぇ！！」

それを見た二人の敵ＩＳパイロットはゼオライマーにレーザー攻撃を加える。しかし、それは再び張られた全方位バリアに防がれる。そして、ゼオライマーのパイロットは後ろを見た。

「うるさい」

たった一言、それだけで敵のＩＳが木の葉のように吹き飛ぶ。悲鳴をあげる間もなくメキシコ側に飛んでいった。運動エネルギーと熱エネルギーを含んだ衝撃波による攻撃だ。ゼオライマーのパイロットは二人が飛んでいった方向を睨み、次元連結システムを全開にする。

「お前らも、殺す！！！」

そして、二人がいる方に飛び立とうとするが、それは耳元から響く通信に遮られた。

『追撃の必要はないわ』

「……なんで？」

通信士からの指令に頭をクールダウンしていく。声にいつもの調子が戻ってきた。

『相手のＩＳはメキシコの領域ギリギリまで飛んでいった。スピリタスがもう少しで戦域に到着する。後はスピリタスに任せるのよ』

「空域は制圧出来たの？」

『あなたと飛行機乗り達のお陰でね。だから、もう帰投しなさい』

「……了解」

頭がクールダウンされて思考が戻った彼女は命令違反をするべきではない、と一瞬で考えに至り、左手に掴むＩＳを見た。

「戦果もあげたし、もう、満足、かな」

彼女は左手に掴むＩＳを見てにっこりと微笑み、空に飛び立った。音速でサンアンドレアにある基地に向かう。

「……あ、スピリタス。大きいわね」

その途中で彼女はスピリタスとすれ違う。スピリタスはその大きな黒い巨体を風に委ねながら、鳥のように小さい戦闘機に守られてメキシコに向かっていった。

開戦――空軍（前書き）

更新遅れて申し訳ないです。　リアルがあまりにも忙しくて何も出来ないでいました。資料探しなんかも積み重なって、さらに遅れてしまいました。

開戦――空軍

スピリタスが離陸する少し前、サンアントニオ、ヒューストンから飛び立ったＶ－ＴＯＬ機、航空制圧機、戦闘機は空中で敵の戦闘機と戦っていた。

「これでもくらいなぁ！！」

航空制圧機に搭乗している男は操縦桿についているスイッチを親指で弾く。

瞬間、ＩＳに使われているマイクロミサイルが空中に投下、しばらく落ちた後、推進剤を噴射して敵機に飛んでいく。赤外線センサーによる誘導弾のため、何個ものミサイルが敵機を追尾する。

「よし、三機目破壊だ」

マイクロミサイルの嵐は敵機の翼、胴、コクピットに着弾し破壊する。

「後何機だ？」

『敵機は後三機確認されています。僚機は二機墜とされました』

「そうか、スピリタスは？」

『今離陸から一定高度を保つために空中加速中です。後三十秒程でそちらに着くかと』

通信士との会話を終えて、男は全機へ繋がるチャネルを開いた。

「俺たちはスピリタス護衛の為にサンアントニオまで後退する。全機、後退せよ」

『『『『了解』』』』

男の言葉に十機の戦闘機がサンアントニオに後退するために針路を変えた。ジェットを吹かせながら後ろからのミサイルを防ぐためにチャフとフレアを撒いていく。

「実践データはまだ少ない。スピリタスと合流した後、空中給油、そのままメキシコシティに侵攻する」

男はサンアントニオ基地の司令官にそう告げた後、自らもチャフとフレアを撒きながらサンアントニオに後退をした。

＊

「計器確認」

「高度上昇」

「機銃正常作動しています」

サンアントニオ基地。その上空を黒い巨体が旋回をしながらスピードを上げていた。スピリタスだ。高圧コンデンサに四基のＳＡＭ、対空バルカン、超高圧電流砲を兼ね備えたその力はいまだに未知数だが、巨体は飛躍する鷹のように高度を上げていく。

「スピリタス、一定高度に達しました」

「電磁バリア、ステルス、デコイ正常作動。いつでも侵攻できます」

スピリタスのコクピットは戦闘機のそれとは違い、広く、五人の操縦士がいた。その中で主操縦桿を握る操縦士は皆からの報告を聞き、操縦桿を強く握り締めた。

「よし、これより本機はメキシコ合衆国に向けて侵攻。メキシコ駐留軍基地破壊を遂行した後に、メキシコシティに都市攻撃を仕掛ける」

そして、彼は足元のペダルを踏みエンジンのスロットルを上げていく。ジェットノズルから青い光が噴き出して、速度をぐんと上げていく。その後ろを空中給油機がスピリタスと十分距離をあけて追随する。

スピリタスは遂に空に飛び立った。空に飛び立ったスピリタスの姿は、悪魔の翼を思い出させた。

＊

スピリタスはメキシコ合衆国の領空に侵入した。前方には一個小隊級の戦闘機が存在している。その距離は約五千メートル。スピリタスはレーダーに映る機影を確認した後、超高圧電流砲を作動する。

「敵機捕捉。数、十。超高圧電流砲の射程に入るまで後二千です」

「超高圧電流砲の赤外線ロックを開始せよ。敵機を凪ぎ払う。チャージはどうなっている？」

「チャージ終了まで後五秒、四、三、二、一……、完了しました」

スピリタスの上部プリズム体から不可視赤外線によるロックオンが敵機に向けられる。敵の戦闘機はそれに気付かず、最高速で近づく。スピリタスのパイロットはそれを見て、不意に口元を吊り上げた。

「……敵の戦闘機は限界まで引き付けろよ」

「了解。敵機限界射程到達までの予測時間、後十秒です。それ以上はコンデンサが高圧電流に持ちません」

「よし、発射までのカウントを始めろ」

管制官の言葉に指示を出すパイロット。それに伴い、管制官からカウントダウンが始まる。十、九、……、とカウントが縮まるにつ

れて敵機がスピリタスに近づく。そして、

「コンデンサ限界時間です」

「よし、超高圧電流砲、発射！！」

「超高圧電流砲発射！！」

スピリタスの機体上部プリズム体から一条の光が迸る。雷とも思えるその光は電流を空中に放出しながら敵戦闘機の横を掠めていく。たったそれだけで、戦闘機は圧倒的熱量やショート、電圧により融解、火球と化していく。

「プリズム体回転を開始。射線電流を移動させていきます。射線上にいる味方戦闘機は至急退避を」

そして、電流は特殊な電流を流すプリズムが回転するとともにゆっくりと射線を移動させていく。電流は断続的に射出されて、電流により敵戦闘機が破壊されていく。

「敵戦闘機掃討完了」

「レーダーに反応なし。周囲十？に戦闘機の姿は無いと偵察機より報告もあります」

敵戦闘機が超高圧電流砲により破壊されて、通信士が状況報告をしていく。パイロットは操縦桿を握り、

「よし、これよりメキシコシティへ侵攻する。警戒は怠るなよ」

「「「「了解！！」」」」

スピリタスのエンジンに火を入れて急速加速して、メキシコシティに舵を切る。メキシコシティに悪魔の翼が向かっていった。

＊

アメリカ空軍、海軍、陸軍は新兵器であるラーズグリーズ、スピリタスを使いメキシコに侵攻を徐々にしていく。海軍は航空空母五艦、超弩級戦艦七隻、原子力潜水艦七艦、駆逐艦十二隻からなる大艦隊でメキシコ、ブラジル、アルゼンチン、チリの海軍を圧倒していた。天文学的な予算がかかる原子力空母をまともに運用できているのは実質的にアメリカのみである。ＩＳの武装では貫けないような分厚い装甲を持った空母は海上で無類の強さを誇った。

「圧倒的だな」

ワシントンＤＣにあるホワイトハウスで大統領、大統領補佐官、国防長官、秋津マサト大佐が空中投影モニターに映る地図を見ながら作戦を見ていた。今回の作戦の指揮官であるマサトは口元を少し吊り上げる。

「メキシコ空軍及び海軍は壊滅、ＩＳも二機捕獲した。他、ＳＡＩ

U加盟国の軍も同様に返り討ちにしている。ブラジル、アルゼンチン、チリのＩＳ捕獲も時間の問題だ」

「メキシコ合衆国首都メキシコシティも制圧出来たようだな。しかし、油断は禁物だ。今回は戦争を予期して領海内に待機中の空母や戦艦を巡回させていたから、このような早期制圧が出来たのだ。これからは敵の巡航ミサイルやＩＳによる戦闘が激化する。常に敵の動向を気にしなければなるまい」

アメリカの今回の戦いでの圧倒的勝利は、敵の焦りからくる考えなしの行動と事前から用意していた戦力がうまく機能したからに他ならない。これからはアメリカの戦力を把握した世界が総力戦で戦いを挑んでくるだろう。

「それくらいは分かっている。故に制圧した地域の意識統制をし、支配地域にアメリカの州制度を適用させている。メキシコ及び南アメリカはさほど混乱もなくアメリカ合衆国に組するだろう」

しかし、その程度のことを失念するマサトではない。戦争によって支配した地域は、すぐ様に復興を行い、戦争のアフターケアを進めている。今回の戦争ではＩＳと戦闘機による空中戦、海軍による海上戦が主であり、制圧は都市は都市でも軍事施設や軍港を中心にしており、一般市民への被害は最小限にしている。

前回の大統領による演説と、一般市民へのケアはアメリカに対して好印象を持たせるためのものだ。人間は自分の生活が変わらず、裕福になるのなら、自分達の上にいる人間が何になろうと気にしない動物だ。圧倒的カリスマがいたわけでもないＳＡＩＵの国民がアメリカを受け入れはじめるのは時間の問題でもあるのだ。

「それよりも問題はアラスカとロシア、イギリスなどのＥＵ諸国だ」

そしてアメリカの目下の問題はアラスカ、ロシア、イギリスとの警戒であった。アラスカは今やアメリカの州ではなく、ＩＳ理事会の支配地域だ。アラスカを攻撃するのは訳ないのだが、問題はその後だ。もしも戦争中にＩＳ理事会委員がロシアに亡命でもしたら厄介なことになる。ロシアの後ろ楯を得た彼らはさらに増長するからだ。それはなんとしてでも避けなければならない。

しかし、マサトの口元はまだ吊り上がっている。

「それに付いては既に対策を立てている」

マサトはそういい、邪悪な笑みを強めた。

次戦――亡国機業（前書き）

今回は前後編的な感じです。ＳＡＩＵが戦争を仕掛けましたが、その機に乗じたのは南アメリカだけではありません。これはそんな話です。

次戦――亡国機業

アメリカ対メキシコ及び南アメリカはアメリカの圧倒的勝利に終わった。破壊的かつ大量兵器による制圧戦により南アメリカの軍事的施設は全て制圧されていた。

太平洋艦隊、大西洋艦隊各々半分の戦力を使った制圧戦だ。南アメリカの諸国が勝てる道理は無かった。一隻で中小国の空軍と同程度の戦力が有るといわれる原子力空母が何十とあるのだ。その戦力は圧倒的であろう。例を上げるとするなら、カール・ヴィンソン、ジョージ・ワシントン、エンタープライズ、ニミッツだろうか。

他にもラーズグリーズ、スピリタスといった新戦力も大いなる戦果をあげている。

さて、北アメリカと南アメリカの戦争が終了し、南北アメリカは『ＮＳ（Ｎｏｒｔｈ・Ｓｏｕｔｈ）アメリカ連邦』と統一されていた。メキシコ、ブラジル、アルゼンチンなどの国はそのまま残されるも、それぞれの国の代表は戦争を引き起こした責任として自認し、各国は領内に置かれるアメリカ合衆国直轄地自治州により統治されることとなる。その際にアメリカは各軍港に艦隊を駐留させ、国民の意識統一を図る。一朝一夕に出来るものではないが、カリスマがいなかった南アメリカの統一は然程難しいものではなかった。

アメリカは南アメリカを統治する際に戦争の賠償金決定を国際連合本部のあるニューヨークで会議する。全ての南アメリカ諸国合わせて二兆三千億ドル。日本円で二百兆円である。その額の大半をアメリカは南アメリカ諸国――いや、各州のインフラ整備や福祉に当

てる。いくら戦争が短く終わると予想されていても長い目で見るなら戦争終了後の立ち直りを考えて軍備に金を使うよりも、有益である。

このように一先ずの戦争が終わったが、何も戦争をしていたのは前線基地であるヒューストン、サンアントニオのみではない。

――ワシントンDC、ニューヨーク、そしてバベル基地でも戦争は起きていたのである。

＊

場所はニューヨーク。都市としてアメリカ最大級の規模を誇るこのニューヨークは今、戦争の影に脅かされていた。空には常に空軍の偵察機が飛び、港にはタンカーに変わって原子力空母や潜水艦が寄港している。アメリカの精鋭とも言える特殊部隊がテロ対策に短機関銃を所持し街中を警備し、人々は改めて戦争を認識する。そのような緊張感のある街に、一つの脅威が襲い掛かろうとしていた。

亡国機業。

ＷＷ２の頃に、各国の思惑から作り出された秘密結社。その実態は

計り知れないが、強力な軍事力を誇る。幻影（ファントム）のように、陽炎のようにゆらゆらと自らの存在を隠す彼らは、この戦争に乗じてニューヨークシティに攻撃を仕掛けた。

「キャップ！！」

「どうした」

「アメリカ東海岸よりおよそ６５０キロの位置に敵別信号が感知されました」

「なんだと……」

ニューヨークシティテロ対策本部のレーダー技師はレーダーに映る敵影反応を目ざとく見つける。コンソールを叩き、敵の信号を特定していく。

「敵は亡国機業のようです。識別は……、ラファール・リヴァイブ５機、打鉄航空型７機です。どうしますか」

空中モニターに光学カメラが捕えた映像が映し出される。モニターにはデルタに編隊を組み飛行する亡国機業のＩＳが映し出される。キャップはすぐ様指示を出す。

「すぐにニューヨークシティ駐留軍軍部に通達。その後、我らはニューヨークシティに避難勧告を出せ！！」

「りょ、了解！！」

キャップの指示にレーダー技師は傍らの軍部に直接繋がるホットラインを使い、軍部に敵の補足を通達する。そして、ニューヨークシティ全域に設置された緊急避難警報を発するスピーカーのスイッチを押した。この出来事は、アメリカがメキシコを統治し始めてまだ一ヵ月経たない頃の事だった。

＊

ニューヨークシティ駐留軍軍部も亡国機業の接近を感知していた。ＩＳも兵器である以上、熱源反応を発する。常にレーダーを動かしていた軍部は先程通達にきた、アメリカ東海岸沿岸警備隊よりも先に敵影を捕捉していた。

「亡国機業が攻めてきたか……」

そう呟くのは若い士官だ。まだ大きな戦争を体験したことのない彼は、軍司令部の指示を待つ傍ら、自ら先頭に立って自らが出来る最大限の事をしていた。

「原子力空母及び潜水艦を出航できるものから随時出航させろ！メキシコに出張っている大西洋艦隊にも救援要請！！　救援が来るまではトマホークミサイル、量産型ゼオライマーで持ち堪えるぞ」

「「「了解！！」」」

原子力空母や潜水艦はその大質量故か、戦闘行動に入れるまでに時間がかかる。６５０キロの距離はＩＳでは遠い距離には為りにくい中で、原子力空母の出航を待つわけにはいかなかった。

「トマホークミサイル発射されました！」

「量産型ゼオライマー部隊も随時戦闘行動に入ります」

「よし、もしものためにダイダロスも起動させろ。使えるものは全て使え！！」

原子力空母の原子炉に火が入る中、海軍のトマホークミサイルが敵ＩＳに向けて発射され、空軍の戦闘機とゼオライマーが戦闘宙域に向けて加速していく。ニューヨークの軍港に設置された荷電粒子砲台『ダイダロス』にも、エネルギーが充填されていた。

「……」

若い士官は空中モニターを鋭い眼光を携えて睨んだ。

＊

ニューヨークシティに攻めてきた亡国機業のＩＳ操縦者は前方から飛んでくるものに必要以上に警戒した。

「敵のミサイルだ！！　油断無く避けろ！！」

トマホークミサイル。海軍が所有する原子力潜水艦に搭載されている巡航ミサイルだ。中距離から長距離、最大射程５０００キロを誇る優れものである。自らを標的に向けてコントロールする半自律型のミサイルであるが、その大きさは巨大で、重さは１，２トンある。

故に小さな的を狙うよりも敵の施設に着弾させるものだ。しかし、アメリカの若い士官はそれをＩＳに使った。ＩＳの操縦者はその不可思議な行動に酷く警戒したのだ。亡国機業も馬鹿ではない。先の戦争でアメリカはミサイルや戦車、戦闘機を使い、ＩＳを破っている。亡国機業もそれを知っていたのだ。ミサイルに警戒するのも無理はない。
そして、亡国機業のＩＳ操縦者の予想は的中する。

「……！！　燃料気化弾頭か！！」

「こっちはベアリング弾です！！」

あちこちで爆発し、内容物を撒き散らすトマホークミサイル。気化弾頭なら大爆発、ベアリング弾ならば中にあった鉄片を撒き散らす。数十と飛来したトマホークミサイル全てが直接的に当ててダメージを与えるものではなかったのだ。亡国機業は大きく迂回するように避けていたためダメージは殆どなかったが。

「ふん、アメリカの戦い方を知れば奴らを殺すのは容易いな」

亡国機業のＩＳ操縦者は見下したようにアメリカの沿岸部を睨む。しかし、彼女は知らない。アメリカは常に戦い方に変化を求めている事を。

＊

所変わりニューヨークシティ駐留軍軍部。そこの若い士官は空中モニターに映る亡国機業のＩＳの様子を見てにやりと笑う。

「敵の編隊、崩れていきます」

「トマホークミサイル第二射を放て。奴らを掻き乱すのだ」

「トマホークミサイル第二射発射されたし」

若い士官の目的はただ一つ。それは時間稼ぎだ。姑息で簡単な事かと思われるが、これは今回の戦争の上でアメリカに非常に必要な戦略だ。ニューヨークシティに駐留している軍はお世辞にも多いとは言えない。その理由は経済の要である街に余計な火種を植え付けたくないからに他ならない。故に今回の戦争でニューヨークは亡国機業を防ぎきれなかっただろう。しかし、この若い士官は既に世界中にアメリカの戦い方が露出しているのを承知していた。そして、それを逆手に利用したのだ。アメリカの戦い方を知るものなら開戦から間もなく飛んでくるミサイルを必要以上に警戒する。そして、必要以上に警戒すると、せっかく組んだ編隊を崩すことになり、余計な時間を使わされる。ＩＳでも編隊を組むか組まないかで戦力は大きく変わる。これを悟られないように行えば、時間稼ぎをしたうえに、救援に来た味方の戦いが楽になる。若い士官はそれを狙ったのだ。

「トマホークミサイル第二射着弾。敵の編隊、最大二キロまで膨れ上がりました」

「よし、これで連携は出来まい。後は大詰めだ。トマホークミサイルを最大量放て」

そして、彼はそう告げたときににやりと笑う。それは悪魔のような笑みであった。

＊

第二射のミサイルを凌いだ亡国機業のＩＳ操縦者は驚くべき景色を目の当たりにした。

「……なんだよ、この数は……！！」

それは空を夥しい数で埋め尽くすミサイルだった。トマホークミサイルよりも小さなものもあればそれよりも大きなモノもある。

「どれもこれも…、避けなくちゃいけねーのかよ！！」

亡国機業は再三にわたるミサイル攻撃に疲弊していた。わざわざただのミサイルに必要以上に警戒し、射撃か回避で凌ぐ。中には気化弾頭でもベアリング弾でもなく空のミサイルも存在した。それにたいして警戒しても後に来るのは空虚感。アメリカのミサイル戦術は見えない脅威による精神攻撃をそのうちに孕んでいた。そして、第三射のこの数である。信管を斬ろうにも数が多く、避けようにもミサイルの容貌が同じではミサイルを判別できない。レーダーも熱源反応が多すぎて画面が反応で埋め尽くされ、判断が鈍る。精神的に疲弊し、味方の援護も期待できない孤独な彼女等は、さらなる精神攻撃をかけられる。それはハイパーセンサーがあるミサイルを感知したことが始まりだ。

――第一級脅威接近。早急に回避を――

亡国機業のＩＳが脅威を操縦者に伝える。操縦者はハイパーセンサ

ーを使い、そのミサイルを見た。そして、

「……うそ、だろ……？」

彼女等は数多のミサイルのなかで一際大きなミサイルを見て、目を見開き空中に硬直する。

「……なんで……」

信じられない、認めたくない。そんな感情が彼女等からあふれでる。

「……アメリカは正気かよ……」

死の恐怖が彼女等を蝕む。死の鎌が彼女等に降り注ぐ。彼女等が目にしたものは……

「……核ミサイルを……、使うなんて……」

原子力のマークが付けられた一際大きな熱源を発するミサイル、トマホークミサイルよりもさらに大きな宇宙にまで飛んでいきそうなミサイル……、『核ミサイル』だった。

そして、彼女等は……。

次戦――戦略（前書き）

遅くなり申し訳ない。最新話です。

彼女等に、亡国機業のＩＳに一直線に飛ぶ一つのミサイル。それは核弾頭。破壊的で無慈悲なそれは、トマホークミサイルに搭載されている。それは彼女等に接近し……、

「アアアアアアァアアアアアアァアアアア！！！」

＊

亡国機業のＩＳは数時間後、量産型ゼオライマーによって全機捕獲された。無傷で。

若い士官が最後に放ったあのミサイルは結局核弾頭は搭載されておらず、ただのフェイクだったのだ。確かにトマホークミサイルには以前核弾頭運用を目指した機能は搭載されていた。しかし、ＩＳの登場とともに核兵器は廃れていき、苦渋の最終手段にまで落ち込んだ。そもそもアメリカは核弾頭を使用する気などさらさらなかったのだ。核弾頭を使えば例え使用する相手が国際テロ組織であろうと世界的な地位低下は否めない。

そして、大前提としてわざわざミサイルに内容物がわかるステッカーなんざでかでかと貼るわけないだろう。つまり、アメリカの主張では核兵器を使用するつもりはなく、威圧として『廃棄処分のただのミサイル』を使用したら、亡国機業が『勝手に』核弾頭だと勘違いした、という風になっている。証言者である亡国機業のＩＳ操縦者は精神的に崩壊寸前であり、証言がないため先の戦闘記録は存在せず、この核弾頭運用疑惑は人々の疑念とともに闇に葬り去られた。死んではいないが、死人に口無し、という奴である。

さて、ニューヨークシティで戦争しているときもワシントンＤＣやバベル基地で亡国機業との小競り合いがあった。しかし、それは天のゼオライマーと銀の福音に撃退されている。これで先の戦闘で亡国機業のＩＳをアメリカは三十機以上確保したのだった。

＊

亡国機業侵攻阻止。それはニューヨークシティのみならずアメリカ全土に中継され、アメリカ国民は勝利の喜びに身を奮わせた。それには何よりも飛行機乗り達の活躍が一番の理由であろう。特にバベル基地は物資が少なく、陸上兵器の援護がない中で飛行機乗り達が大立ち回りを演じた。それはアメリカ国民の士気を上げるには十分

過ぎる効果をもたらした。

さて、ワシントンＤＣでは国民達の喜びとは裏腹に真剣な顔をしている議員たちが召集されて議会が開かれていた。

「今回の戦争で我々は歴史的勝利をし、ＩＳ優位の世界に新たなる可能性の一歩を踏み出した！！」

大統領が壇上に立ち、声高らかに議員たちに告げる。議員たちは二院制であるため二つの派閥に別れているが双方とも満足そうな顔をしている。

「しかし、我々はここで留まってはならない！！　我々の理想を為すためには敵が多いからだ。油断して、満足して戦争に負ければ目もあてられない。故に！！」

しかし、議員たちは大統領の言葉に身を引き締めるように姿勢を整える。全員の目は大統領を射ぬいていた。

「我々は早急に戦争を終わらせるべく努力と行動を怠ってはならない。我々の目的のために散り礎となった勇敢なる戦士たちに報い、前に進まねばならない！！　我々は勝つのだ、この戦争に！！」

大統領の言葉は、議員たちの心を掴むには十分過ぎる魅力とカリスマを兼ね備えていた。堂々と立つ大統領は壇上から降りて、そのまま自席へ戻る。議会からは止まない拍手の音が大統領に降り注いでいた。

＊

――しかし、一体マサト大佐はどのように戦争を早急に終わらせるのだ……？

議会が終了した後、大統領補佐官は専用の防弾ガラス搭載リムジンの座席に座りながら思考を張り巡らせていた。例に漏れず、今回も大統領の演説のシナリオはマサト監修のもと彼が書いていた。そんな彼は秋津マサトの思考を掴めないでいた。

――戦争を始めるには古風だが最低限の大義名分が必要だ。マサト大佐は、かのナポレオンの様に世論と情報を最重要項目に置いて行動している。今回の『フェイク（核弾頭）』はギリギリの様だったが……。

彼が思考を張り巡らせているのはマサトの戦略だ。マサトは早急に戦争を終わらせることを確定的に宣言している。それを彼は疑問に思っているのだ。

――戦争を早く終わらせることは確かに大切だ。国民に無駄な血を流させないためにも。何よりもアメリカの戦略を攻略されないためにも……。

戦争でアメリカは数々の奇策を用いてＩＳを圧倒してきた。しかし、

この奇策は使えば使うほど対策を立てられやすい。よほどの馬鹿でないかぎり三回目以降は同じ戦略では倒れてくれないだろう。

――ドイツやイギリス、日本、中国、フランスに攻め入るだけの大義名分はある。彼の国への対策は簡単だろう。しかし、天災やブリュンヒルデが介入してこないとも限らないし、他国の軍事介入は怖い。テロが起こった後に対策を立てていては遅すぎる……。

ドイツやイギリス等の戦争の発端になった国には攻め入る事は出来る。しかし、他の国にも目を向けねばならない。戦争中、物資を止められて侵攻が出来なかった、なんて笑えない冗談である。そこで彼は一つの事に気付く。

――そうか……、物資か……。なぜこのような簡単な事に気付かなかったのか……。

彼は先程の物資を利用する事にしたのだ。古来より敵の物資を攻めることはよくあることだ。ライフラインを潰してしまえば、ＩＳといえど自己再生が追い付かない。物資を独占するだけで戦争が格段に有利になる。

――かのＡＢＣＤ政策のようなものか。となると……、

「早急に庁に戻ってＭＥＡＬ加盟国大使館に出向かないといけないかもな」

大統領補佐官はにやりと笑い、シートにさらに深く腰を降ろした。

次戦――ユーラシア強襲（前書き）

遅れて申し訳ないm（__）m

これからテスト期間に入るのでまた二週間ぐらい更新できない可能性があります。

次戦――ユーラシア強襲

ＭＥＡＬ加盟国の大使館に到着した大統領。その傍らには大統領補佐官がいた。

――ＭＥＡＬと協定を結ぶ。この戦争に勝つための一手だ

大統領補佐官はにやりと笑う。

＊

大統領補佐官はＭＥＡＬ加盟国との間に石油、レアメタル、食料の輸入独占権を手に入れた。今回の戦争はアメリカが現行兵器の利用の有用性を見せ付けたために各国は航空機や戦車、戦艦を戦線に揃えはじめた。しかし、出だしはアメリカのほうが早かったこともあり、戦力差は歴然としていた。だが、それは時間が経てば解決されること。アメリカは次の一手を打った。

戦車と航空機、そしてＩＳ。この二者の間には決定的な違いがある。それはエネルギーだ。元々石油が無くなると叫ばれていたためＩＳはエネルギーに高圧力の電気を使用する。そして、それに伴い各国は発電手段を化石燃料を使うものから自然エネルギーを使うものに

シフトチェンジした。その際に困るのは中東勢力だ。彼らは外国に売る石油を担保としてあらゆる贅沢を為してきた。それが急に途絶えて金が無くなる。彼らは貧窮に喘いでいたのだ。アメリカはそこにつけこんで各国よりも安く、石油の独占権を手に入れたのだった。アフリカや中東にはまだ膨大な石油があり、レアメタルや鉱物なども豊富だ。ＩＳによって価値の下がった代物が一気に表舞台に出る。中東やアフリカ勢力はアメリカの申し出に直ぐ様飛び付き、契約を結んだ。

これでアメリカは資材に対してなら各国を圧倒した。ドイツやフランス、イギリス、日本は元々資源が少なく、この戦争でも中東勢力を宛てにしていた。しかし、中東の石油はアメリカが独占。彼らには兵器を十分に動かすだけの石油は無かった。人造石油を使えば戦えるかもしれないが、人造石油は製造に馬鹿にならない金がかかる。この時点で四国には勝ち目が無かった。中国には豊富なレアメタルや石油があるが、それもアメリカ自身の保有量には適わないだろう。

―ＭＥＡＬは石油の価格暴落に喘いでいたからな。交渉は難しくは無かった。今回捕らえたＩＳ操縦者の拷問の依頼も取り付けた。そろそろ、次の戦いの準備をすべきか……

大統領補佐官は未だＭＥＡＬの大使館で談笑している大統領を尻目に携帯端末を取り出す。彼はそれの空中モニターを引き出し、電話をかける。軍部に直接繋がるホットラインだ。

「私だ。今すぐにアメリカ空軍、陸軍特殊部隊の編成を完成させろ。攻めに出るぞ」

彼はその後、二三話した後電話を閉じる。彼は常に無表情だった。

＊

ユーラシア大陸上空。そこには十機の輸送機、七機の護衛機が飛んでいた。輸送機の側面には大きなハッチがあり、今は閉められている。アメリカの国旗がペイントされた黒い輸送機は徐々にスピードを落としていく。そして、轟音と共にハッチが開けられた。

「……」

気圧差と暴風による風切り音が、一陣の風となり輸送機の中に吸い込まれる。それをアメリカ陸軍特殊部隊は物怖じせずにハッチの前に整列する。彼らが乗る輸送機は地上から一万メートル離れた位置に居り、彼らは眼下に広がる雲を見つめた。彼らはこれからこの雲のしたに広がる大地にある一つの街、中国の重慶基地に攻め込む。

今回からアメリカは戦争で攻勢に出た。物資の心配と陸続きする敵対組織が居ない今、今この時がアメリカの反撃が開始される瞬間なのだ。中国には彼らのような特殊部隊が先陣をきって突入し中国を混乱させる。その間に太平洋艦隊で日本、韓国を落とすのだ。ロシアに対しては常に警戒を払い、地対空ミサイル、空対地ミサイル、巡航ミサイル、多段式ミサイル、ミサイル迎撃ミサイルの照準を合

わせていた。

「……今回は生身による戦闘だ。ＩＳが出張ってくる可能性は低い。が、警戒は怠るな。常に死は俺たちを呼んでいる」

『サー・イエッサー！！』

上官の言葉に敬礼で返す兵士たち。しかし、彼らは生身と言うが、実は違う。彼らは黒い騎士甲冑のようなものを身に纏っていた。流線型の、数学的な曲線美を持つ騎士甲冑だ。

それはパワード・スーツだった。アメリカの大手兵器メーカーと軍部が合同で開発したＩＳに変わる陸上制圧兵器だ。女しか使えないＩＳと違い、男が使えるそれはアメリカの次世代兵器であった。

しかし、勿論欠点はある。まずＩＳの様に空を飛べない。故に陸上に限られた行動しか起こせないが、陸上制圧能力はＩＳを凌駕した。

次に大きさだ。十分な火力、防御力、動力を得るために仕方なく大きくなってしまった。パワード・スーツ運用のために専用の輸送機を造る必要もあった。重く、動力を随分食う心配もある。しかし、それらはパワード・スーツの移動方法にモーター駆動の車輪を足に付けることで解決された。瞬時に推進剤を噴射することによる緊急離脱も可能だ。その代わり、関節部や車輪はモーター駆動のため、連続して使うと熱を帯びて焼き付いてしまう欠点もあった。

三つ目は防御力だ。アサルトライフル程度なら防げるが、流石にＩＳの攻撃やアンチマテリアルライフル、戦車砲には耐えられない。しょうがない事だが、これはどうにも出来なかった。気休めとして弾丸を逸らせるように流線型を持っている程度だ。

このように欠点が多いパワード・スーツだが、通常よりも大きな兵器を使えるようになっている。彼らは背中にショットガン、手にはアサルトライフル、腰には地対空ロケットランチャー、グレネードを装着しており、予備弾倉も十分に持っている。それらの武器は普通の人間が使うよりもずっと大きなサイズだ。彼らはそれを掲げた。

「これより重慶基地に攻め入る。総員、落下準備。……落下！！」

そして、輸送機のハッチから兵士たちが落下を開始する。足を下にしてなるべく空気抵抗を受ける態勢に移行する。パワード・スーツが重いため、重力加速度や落下エネルギー、位置エネルギーが大きくなりやすい。それを解消するため空気抵抗を利用するのだ。

『……』

パワード・スーツを着込んだ兵士たちは高度一万メートルからの落下に物怖じをしていなかった。彼らは無慈悲な目線で腕に取り付けられた計器を確認して、そして、

『……パラシュート展開』

背中のバックパックからパラシュートを展開する。重いパワード・スーツの減速を手助けするものだ。しかし、パラシュートを展開したまま地上には落下しない。パラシュートは地面では邪魔になるし、敵に狙われる的になる。だから、彼らはパラシュートで減速した後、空中でパラシュートを切り離し、緊急離脱用推進剤を使って着陸するのだ。そうすれば瞬時の作戦展開が可能となる。

だが、戦争とは一方の作戦が罷り通るほど甘くはない。

『……敵基地より機銃掃射を確認。各個迎撃に当たれ』

一定高度に達した時、重慶基地から機銃が掃射された。対空砲火だ。

『……っち。やってくれる……』

重慶基地からの対空砲火にパラシュートが穴だらけになっていく。威力的にパワード・スーツを凹ませる事が出来る機銃の嵐に兵士は舌打ちをしながら空対地ロケットランチャーを放つ。しかし、それは軌道を外れて明後日の方向に飛んでいき、基地を破壊するには至らなかった。

『……外した!?　……っ!!!』

そして、

『……や、やられ……』

ガンッ!!　という音とともにパワード・スーツの頭部がアンチマテリアルライフルに貫かれた。兵士は姿勢制御も行えぬまま、地面に落下した。

＊

アメリカ陸軍の中国侵略は順調に進んだ。高高度からのパラシュート落下による作戦は今までのアメリカの戦い方と外れるもので敵の意表をついた。中国側からの抵抗もあり、兵士の三割は死ぬ結果となったが、パワード・スーツの性能を世界に示す機会にもなった。

南方から北上するように進攻するアメリカは絨毯爆撃、パワード・スーツによる基地制圧を繰り返し、中国の四分の一を制圧することに成功する。

北部から進攻する部隊はロシア陸軍の背面攻撃に壊滅する結果となったが、ロシアの大部隊を殲滅する戦果を上げていた。

一方、日本、韓国を攻めていたアメリカ海軍は日本、韓国の巡航ミサイル、大陸弾道ミサイルによる本土攻撃に一時撤退することになったが、その後艦載機やミサイルによる攻撃で日本の関西と、韓国全土を手中に収めていた。

この戦いは一ヶ月以上に及び、未だ続いている。

次戦――更識への謀（前書き）

遅れて申し訳ないです。

次戦――更識への謀

アメリカのユーラシア本土制圧が始まった同じ頃、アメリカ空軍はロシアの空軍とアラスカにある国際ＩＳ理事会の本部基地を強襲していた。

ロシアの大部隊に壊滅させられた陸軍の後詰めとして進攻したのはアメリカ特殊ＩＳ部隊だ。ロシアを樺太から反時計回りに回り込む様に進攻するＩＳ部隊はロシア陸軍を後ろから攻撃するに至る。これを指揮するのは秋津マサトだ。彼は何故、ロシアを攻撃するのか。それはロシアとの確執を終わらせるのと、ＩＳ理事会の退路を潰すためである。

彼はロシアとの戦闘を開始する。

＊

「右翼第１０７部隊は右から回り込むように前進、中央第１０６部隊は後退。包囲網を形成しろ！」

ユーラシア本土攻撃が開始されて二週間。ロシアの極寒の大地にはＩＳが何十機と戦闘をしていた。ミサイル、荷電粒子砲、レーザー

が飛び交い、吹雪で視界の悪い中を鮮やかに彩る。ＩＳにはハイパーセンサーがあるため吹雪は合ってないようなモノであるが、ロシアのＩＳ部隊はアメリカのＩＳを捉えられないでいた。

アメリカのＩＳに新しく搭載されたのは光の反射を自由に制御する位相制御装置だ。ＩＳの周りを包み込むように位相をずらし、光の屈折、反射を変えて姿を視認しにくくするのだ。ロシアのＩＳは吹雪に加えて猛スピードで移動する姿を消した量産型ゼオライマーをハイパーセンサーを持ってしても捉えられない。これはアメリカの一方的攻撃を可能にしていた。

――ロシア政府は昔からアメリカ政府との折り合いが悪い……。今回の大隊による攻撃も、水面下の宣戦布告と取っていいだろう。

秋津マサトは光学迷彩で姿を隠し、猛スピードで後ろに飛んでいく雪を端目に捕らえながら思考する。

――それの最たる理由は更識楯無とその妹更識簪の存在が大きい。

日本人なのにロシア代表である暗部組織『更識』のリーダーと日本人で日本代表候補生の妹。血縁関係による繋がりは予想以上に深いものがある。歴史上でも、アングロ＝サクソン人と共存したイギリスのゲルマン人の『ノルマン人』、そしてフランク王国に住んでいたゲルマン人もその血縁上、争いが絶えなかった。王権争いによって引き起こされた百年戦争が判りやすい例だ。彼女等は利害が一致するから協力関係を結んでいるが、それが無くなれば力は大幅に削がれて争いが起こる。

彼は後ろを見た。

「ロシア政府にはばれていないだろうな」
「イエス、秋津マサト大佐殿。ロシア政府に感付かれている事はありません。敵に何かリークされているなら敵に何か動きがあるはずです」
「……確かにな」
彼の後ろには隊員が二人居り、片方の隊員の腕の中にはボロボロになったＩＳを身に纏う一人の少女がいた。彼はそれを見て、密かに笑う。

＊

所変わり、ロシア空軍ウラジオストク基地上空に、一機の蒼い機体と数十の量産型ＩＳが滞空していた。
更識楯無だ。
彼女は目を瞑りながら思考する。
――アメリカ陸軍によるユーラシア本土強襲作戦……。それは、強襲用陸艦により装甲車、軽戦車を運び込み、北と南から中国を攻

撃する作戦……。だけど、この違和感は何……？

彼女は感じていた。アメリカの行動の違和感に。アメリカはユーラシア本土強襲の際にロシアを無視して中国に乗り込んだ。ロシア政府が宣戦布告をしていなくても日本に協力しているのは周知の事実。それを無視してロシアに背面を見せるのがアメリカの違和感だ。これでは無駄に部隊を減らす事に為りかねない。

彼女はそう思考しながら空中モニターを展開。モニターに映る時計は作戦開始時間を表していた。

『ジ……、ジジ……、こちらウラジオストク基地作戦司令室。これよりアメリカ空軍攻撃を開始する、全機進軍せよ』

彼女は耳の裏をパチパチと稲妻が走るような感触に更に違和感と言い表わせない不安感を気にしながら、

「――了解！！！」

ＩＳを進軍させた。

＊

更識楯無はアメリカ空軍が駐留しているという基地に向かって飛んでいた。

――敵はロシア本土に侵入しているというのに駐留基地に留まっているらしい。それもロシア陸軍の目の前でだ。

更識楯無は作戦司令室から来た新たなる情報に更に顔を顰めた。

――アメリカは、馬鹿なの？

敵の目の前にわざわざ駐留基地を張るなんて自殺行為も甚だしい。

更識楯無は更に違和感を感じた

――秋津マサトは何を考えているのかしら……。

彼女が違和感を感じている間にも彼女等はみるみるうちにアメリカの駐留基地に近付いていく。しかし、様子がおかしい。

――……敵の対空砲火が来ない……？

アメリカの駐留基地から対空砲火どころか物音すらしないのだ。しかも、

「あれは、ロシア陸軍！？」

よく見ると燃える基地のなかにロシア陸軍の戦車や歩兵の姿が見える。砲撃による爪痕か、基地の外壁は凹んだまま、地面に引き剥がされている。

「どういうこと……？　あの基地は私たちが攻撃するはずなのに…

……」

更識楯無は深い疑問を覚えながら基地に降り立った。

＊

更識楯無が基地に降り立ち、最初に目にしたのは地に伏せる夥しい数のアメリカ兵の死体だ。一様にパワード・スーツを身に纏っている。

――ＩＳとパワード・スーツの混成部隊？　でも、基地からの報告に、そんなものは無かった……

彼女は更に深まる違和感を胸に感じながらアメリカの駐留基地の司令室と思わしき建物に近づいていった。

――それに攻撃したなら後処理中の筈なのにこの静けさ……、明らかにおかしい。

そして、更識楯無は疑いを持ったまま作戦司令室の中に入る。彼女はそこで、驚くべきモノを見る。

「かんちゃん！！？？」

それは、陸軍兵士に拷問される更識簪の姿だった。

「ちょっと、何してるのよ！！！」

彼女は叫んだ。それに伴い、ロシア兵達が後ろを向いて、そして、驚愕の視線を彼女に向ける。ロシア兵達の中で士官と思わしき男は周りの兵士が驚く中、冷静に彼女を見た。

「まさか、作戦司令室の報告通りに来るとは……」

「何を言っているのよ！！　かんちゃんから手を離して！！」

更識簪が拷問される手は緩まない。それを見て楯無は癇癪を起こすが、ロシア陸軍士官は冷静に彼女に告げる。

「五月蝿い、この売国奴が。貴様らにはスパイ容疑がかけられている。彼女にはロシアの軍法に乗っ取り、尋問をしているだけだ」

「はぁ！？　スパイ容疑！？　何故私達が……！　……っ、まさか！！」

彼女は違和感の正体を見破った。作戦に於ける合ってはならないダブルブッキング、私達姉妹に掛けられたいわれもないスパイ容疑。

「嵌められた……！」

――秋津マサトの狙いはロシア基地の攻撃じゃない……。日本とロシアの利害関係の崩壊だ……。

＊

秋津マサトはロシア本土領空に於いて滞空しながらほくそ笑んでいた。彼は今回の作戦で三つの組織に虚偽の情報を送り込み、三つの組織の利害を崩壊させた。

まず更識簪を攫い、アメリカ空軍の制服を着せてアメリカ空軍駐留基地の部屋に寝かせる。

次にロシア陸軍駐留基地の作戦司令室にハッキング、更識楯無と、更識簪にスパイ容疑があるとウラジオストク基地からの伝令として送る。その際、捏ち上げたスパイ容疑の証拠も送る。

ロシア陸軍はアメリカ駐留基地に攻め込み、そこにアメリカの制服を着た簪を発見。さらに部屋の端末からロシアの機密情報をアメリカに送った痕跡を確認する。勿論同時刻にウラジオストク基地の楯無の部屋からも同じような痕跡を残してある。

ウラジオストク基地の作戦司令室とロシア陸軍駐留基地の作戦司令室とで情報の乖離が無いようにハッキングで情報統制を行う。

簡単な操作だが、ハマれば多くの人間を騙すことのできる操作だ。それを行ったのは、秋津マサトと共に滞空する特別型の量産型ゼオライマーだ。

アメリカには世界中のネットワークからあらゆる情報を抜き取るシステムがある。それを使って、日本、更識、ロシアとの間に亀裂をつくるのだ。

日本は更識に疑いを持つ。

ロシアは更識と日本にスパイの疑いを持つ。
更識はロシアと日本を追われる形になる。
こうして、ロシアと日本はアメリカと戦争する場合じゃなくなる。
日本は既にアメリカに関西を占領され、国土侵攻が苛烈さを増している。
ロシアにも大艦隊と大量のＩＳ部隊が迫りつつある。
国交での混乱、アメリカから迫る脅威、内部組織の不審。全て秋津マサトの思い通りとなっていた。
「くくっ、踊れよクズ共。道化の様にな」

次戦――ロシアの一方で（前書き）

遅くなりましたぁ！！

次戦――ロシアの一方で

アメリカ空軍のユーラシア強襲と同時刻。北アメリカ大陸の最北に位置するアラスカでも戦闘が行われていた。

「死ねぇ！！」

「蹴散らせ！　一人残らず殺せ！！」

怒号と銃声が響くのはアラスカにある国際ＩＳ理事会本部内だった。アメリカ、カナダ陸軍の五十師団、五十万人による総攻撃だ。対するアラスカは二十師団、二十万人。戦力の差は歴然だ。

アメリカ、カナダ陸軍はカナダ領内からアラスカを包み込むように部隊を展開、左翼、右翼の両陣営には寒冷地専用パワード・スーツ『ジャガー・ノート』を正式配備している。ジャガー・ノート、寒冷地用に改造された重戦車による波状攻撃、上空からの絨毯爆撃にアラスカ軍は補給もままならないまま、連戦を虐げられていた。

そして、ついにアメリカ、カナダ陸軍に国際ＩＳ理事会本部に侵攻を許し、蹂躙されはじめていた。

「こ、この……！　化け物がぁ！！」

銃口からオレンジ色のマズルフラッシュが絶え間なく吐き出される。螺旋に回転しながら飛んでいく７．６２ミリＮＡＴＯ弾はしかし、ジャガー・ノートの分厚い強化セラミック装甲に傷を付けることはなかった。

「ひ、ひぃ……！！」

アラスカ軍の兵士は恐れを為したのか、涙を目に浮かべて引き金を一心不乱に引く。何十発という弾丸がアサルトライフルから吐き出されるが、やはりジャガー・ノートの装甲に傷はつかなかった。

カチッ！　カチッ！

「た、弾が……！！！」

そして、ついにアサルトライフルの弾倉から弾が尽きる。カチッ、と虚しい音を何度も何度も耳にしてもアラスカ軍の兵士は一心不乱に引き金を引き続ける。ジャガー・ノートを身に纏ったカナダ軍の兵士は哀れなものを見るかのようにバイザー越しにアラスカ軍の兵士を見下した。

「く、来るなぁ……来るなぁぁ！！！！！」

一歩一歩近づいてくる白い悪魔の姿にアラスカ軍の兵士はアサルトライフルの銃底でジャガー・ノートを殴りかかる。しかし、それはジャガー・ノートの腰のハードパーツに取り付けられたワイヤー射出装置から射出された鉤爪付きワイヤーに絡めとられ、廊下の壁に叩きつけられる。鉤爪が腹に突き刺さるのと、廊下に叩きつけられた衝撃でアラスカ軍の兵士は無様にも口から血を吐いた。

「……」

ジャガー・ノートを身に纏った兵士はそれを気にもせず、給鋼糸装置を起動させ、ワイヤーを引き寄せる。

「や、止めろ！！　止めてくれ！！」

ズルズルと、徐々にジャガー・ノートの傍に引き摺られる兵士。その顔は恐怖に塗れていた。ジャガー・ノートの手には大型ショットガンが握られている。それを見て恐れを為したのだろう。直径三十センチもあるショットシェルの内包弾丸に至近距離から直撃すれば挽肉になるのはまちがいないから。

しかし、ジャガー・ノートはショットガンを後ろ腰のウェポンラックに戻し、変わりとして大きな取っ手を握った。

機械式大型変形重斧。簡単に言うなら折り畳み出来る拠点破壊用の斧だ。兵士はそれを見て顔色を変えた。

「お、おい……、待てよ。まさか、それでやろうってんじゃねーよな……？」

しかし、ジャガー・ノートは応えない。むしろ、重斧を振り上げる動作に移行した。兵士は怒りと恐れに顔を歪めて、ワイヤーが戻ろうとする方向とは逆方向に向かうため足に力を入れて逃げ出そうとする。

「冗っ談じゃねぇ！！！　あんなのにやられたら死ぬほど痛い思いして死ねねぇじゃねーか！！　俺は嫌だ！！　そんな苦しい死に方は嫌だ！！　止めろ！！　離してくれ！！」

しかし兵士の思惑からは外れ、ワイヤーはどんどんと給鋼糸装置に収まっていく。恐怖に止まっていた兵士の涙腺がまた開く。

「止めろぉぉぉ！！　誰か、誰か助けて！！　嫌だ、死にたくない！！　死にたくねぇよ！！」

藻掻き、爪を廊下に敷いてある絨毯に引っ掛けて、必死に逃げようとする兵士は子供のように泣き喚き、怒号を上げる。

「……」

ジャガー・ノートを身に纏った兵士は重斧を無言で振り上げて肩の位置で止める。そして、いまだに泣きじゃくる兵士を改めて見た。

「……死ね」

一言呟いて、重斧を振り下ろす。重斧の鋭利な刃は空気を切り裂いて兵士の右肩から左腰迄を一刀両断した。兵士は泣きじゃくる顔のまま、悶絶も、悲鳴もあげずに死んだ。

＊

戦闘はアラスカ軍の抵抗もあり二日に渡ったが、アメリカ陸軍はアラスカ軍の掃討を完了。国際ＩＳ理事会の幹部達を逮捕した。アメリカ軍の損害は戦車二百輌中七輌、兵士五十万人中五千人に留まると完全勝利と言っても差し支えないだろう。

現在、アラスカではアラスカの州再登録と戦後処理が行われていた。

その中で一人、白い鎧に腰掛けて階級章を手で弄びながら黄昏る一人の男性士官がいた。彼の腰掛けるジャガー・ノートの装甲に細かい傷や血痕が付いていることから、彼は激戦区を駆け抜けてきたのだろう。

「……死にたくねぇ、か……」

男性士官は空に舞う雪の欠けらを見上げながら、ぽつりと呟いた。彼の瞳には何も映っていない。が、彼の目尻には涙が映る。無表情で涙を流しながら彼はジャガー・ノートをみた。

「戦争に於いて、死ぬことは息をするより簡単に俺たちをついて回る。その中であの兵士は『死にたくねぇ』、か」

ジャガー・ノートのツルツルした手触りを確かめながら、彼は言葉を紡ぐ。

「よっぽど馬鹿なのか、それとも人間じみているのか……。どちらにせよ我がアメリカに必要の無い人間であるには変わらないが、しかし、」

「これでは俺が悪者だ」

彼は階級章を再度見た。作戦前の曹長から少尉に変わった階級章だ。
彼はそれを見つめ、手の中でくるくるともてあそぶ。

「奴らは一つ間違いを侵してんだよな。
この世には絶対の正義も悪も存在しない。あるのは解釈と勝者の独裁のみだ」

「俺はどちらとも揺らがない。
俺たちは兵士だ。アメリカに忠誠を誓った従僕だ、犬だ。
上層部の命令に従い、人を殺していく。そんな歯車に明確なる勧善懲悪と、個人の価値観は必要が無い」

再度空を見上げた兵士は、息を短く吐いた。

「だから、俺は、戦うのだ」

彼の吐いた息は直ぐに水滴とかわり、白い靄を作り出し、風に流された。ゆらゆらと、形も定まらず、弱く脆弱なそれは、風に掻き消されて中に消えた。

次戦――アメリカの危機（前書き）

遅れました。投稿します

次戦――アメリカの危機

「失礼します」

ユーラシア強襲作戦をアメリカが敢行してから約二ヵ月が過ぎた。そんななか、アメリカ本土の作戦司令室では数十人の将校や士官が集まり、今後のユーラシア侵攻に関して話していた。因みに秋津マサトも存在する。そして、先程入室した将校が席に着いて軍議が始まった。

「さて、皆にはまずこれを見ていただこう」

作戦参謀が空中モニターを掲示して壇上で話す。空中モニターにはユーラシア大陸が映し出されており、ある境目で色が分けられていた。白がアメリカで、黒が敵軍の領地である。白と黒の境目は中国国内とロシアに存在した。

「我がアメリカ軍はカナダを伴い、ユーラシア大陸を侵攻している。白が我が軍で、黒が敵軍である。これを見て分かると思うが、戦線は逼迫している」

騒めきが生じた。その中で一人の将校が手を上げて起立した。

「私には戦線がそれほど逼迫しているとは思えないのですが……。我が軍はロシアのウラジオストク基地、中国の重慶基地など敵の主要な基地を数多く占拠しています。その中で戦線が逼迫しているとは思えません」

彼の言い分は最もだ。アメリカ軍はロシアはウラジオストク基地、

中国は重慶基地と主要な基地を数多く落としている。中国に至っては首都の北京に迫りそうな勢いで行軍している。将校が疑問を感じたのも頷ける。
故に作戦参謀もその疑問を予想していたのか、疑問に即座に答えた。
「確かに貴官の疑問は的を得ている。戦力的にも構図的にも我が軍は有利だ。しかし、敵も馬鹿では無かったということだ」
「……どういう事でしょう」
「それは当事者である秋津大佐に話していただこう」

＊

秋津マサトは作戦参謀に呼ばれて壇上に上がった。彼は席に座る将校を横目で見ながら、無表情で話しだす。
「我らアメリカ軍特殊ＩＳ部隊がロシア侵攻の際に更識家、ロシア陸軍にサイバー攻撃を仕掛けたのは全員知っているだろう。我々は無事、更識家、日本、ロシアの親密な関係に亀裂を入れるのに成功した。そして、同時に国際ＩＳ理事会本部の制圧と理事会役員の粛清も成功した。しかし、我らは侵攻を留まらざるを得なかった」

秋津マサトはそういい、空中モニターに一つの映像を映し出した。
その映像は夜に撮影されたのか空が暗く映っており、それだけを見るなら普通の夜中の映像だ。しかし、この映像を見た瞬間、将校たちはどよめき、おののいた。

「端的に言おう。これに映る白い機体によって我がアメリカの戦車隊一個大隊が壊滅した」

どよめきが強くなる。秋津マサトは手礼でそれを押さえてさらに告げる。

「この機体は先日日本から戸籍剥奪をされた織斑一夏が駆る白式と思われる。

この機体はさほど強力ではなく、第四世代ＩＳながら、量産型ゼオライマーでも充分に対応できる存在だ。

しかし、この機体によって我々は戦線を広げる事が難しくなった」

これを見てもらおう、と秋津マサトは言い、もう一つの空中モニターを展開した。その空中モニターには一つの地図と各国勢力が模式化されていた。

「これを見れば分かるだろう。我々は更識を陥れ、ロシア陸軍二師団と更識を合わせて撃破しようとした。しかし、それは突如東から現れた白式に阻まれることになった。白式は一機ながらもアメリカ軍大隊、量産型ゼオライマーを攻撃、更識楯無、更識簪を味方につけて中東へと逃亡した。
さらにそれに合わせてロシアは基地から離脱、最前線基地を放棄し

て戦線を下げてしまった」

秋津マサトの言葉に合わせて模式化された勢力図が動き出す。そして、アメリカとロシアの間に空白地が出来た。そこまで見て、先程の将校が質問をした。

「戦線が下がる事のなにが問題なのでしょうか。私たちにとって戦線縮小は好都合なのでは」

この将校はマニュアル通りの考え方しか出来んようだな、と秋津マサトは思う。しかし、マサトは特に顔にも出さず将校を見た。

「戦線の意図的な縮小は戦争を早期終了しようと思う我々にとって不利だ。なぜなら、我々は戦線が下がった事によるデメリットを多く被るからだ。

例えば、戦線から取り残された敵基地の対処だ。我々が占拠し、降伏させた訳でもない都市や基地は下手に攻撃すれば世間の非難を浴びる。故に丁寧に時間をかけて降伏を促すしかない。これには基地機能制圧や防衛機能の敷設も含めれば莫大な時間が掛かる。

二番目にこれは単純に軍の行軍速度の無駄だ。雪の中、我が軍のラーズグリーズは行軍速度が落ちる。戦線縮小による必要不可欠な基地制圧に急げば燃料や時間を無駄にさせる。

三番目に補給路の確保の遅延だ。基地制圧を此方側からしていれば補給路の確保は容易い。しかし、その計画も含まない基地制圧による補給路の確保は混乱と時間を要する。ユーラシアという本土から離れた場所への補給路の確保は必要不可欠だ。蔑ろには出来ない。故に時間をかけて補給路を確保していかなければならない。

さらに厄介なのは敵の体制は万全という事だ。敵は白式の介入による混乱に乗じて基地を放棄して後退している。故に敵の後ろには従来のままの補給路が残り、我々が補給路を確保している間に防備を固める事ができる。さらにヨーロッパ諸国のロシア支援と戦争参加の旨が各国に通達された。これから戦闘が激化する中で、我々のこのタイムロスは痛いな。だから我々は戦線維持を必要とし、この戦線は逼迫しているのだ」

「成る程……。質問失礼致しました」

将校に長々と説明した後、彼は一息ついて将校達を見渡した。作戦参謀はその様子を見て、秋津マサト、将校たちに告げる。

「我々はこの事態を深く受けとめ、一つの作戦を決行する。それは、ＭＥ（Ｍｉｄｄｌｅ　Ｅａｓｔ）作戦だ」

作戦名を聞き、この作戦を理解した将校たちは声も発さずに作戦参謀を見た。

「この作戦の主な目的は中東、アフリカ勢力を使ったヨーロッパ諸国への圧迫だ。中東、アフリカ勢力は今や我がアメリカに勢力図が傾倒している。それを利用させてもらう。これはアメリカ、中東勢力にとってメリットが多い。必ず成功させるのだ」

作戦参謀はそう締め括り、したり顔をした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3300u/

IS世界に現われたらしい冥王

2011年11月9日20時52分発行